第 56 回
日米学生会議

The 56th Japan-America Student Conference

日本側報告書

Re-evaluating the Japan-America Relationship:

Civic Commitment to Global Issues

1934～2004

70th Anniversary

今、再考の時—日米関係と私たちの使命

目次

序章……1

日米学生会議の歴史　2
日本側実行委員長挨拶　3
アメリカ側実行委員長挨拶　5
内閣総理大臣からのメッセージ　7
本文中の略語　8

第1章　第56回日米学生会議概要……9

第56回日米学生会議テーマ　10
第56回日米学生会議活動概要　11
第56回日米学生会議日本側参加者一覧　13
第56回日米学生会議アメリカ側参加者一覧　14
第56回日米学生会議本会議日程　15

第2章　事前活動……17

春合宿　18
勉強会　20
防衛大学校訪問　24
勉強会　26
日本側直前合宿　33

第3章　本会議――サイト活動……36

ハワイサイト　37
サンフランシスコ　50
ワシントンD.C.　54
プリンストン　62

第４章　本会議――分科会活動……70

教育　71
グローバル経済システム　75
国際政治と日米　79
アイデンティティと市民活動　84
南北問題　88
メディア倫理　92
社会と科学技術　96
社会問題と制度　101

第５章　40 人の夏、40 人の……105

第６章　第 57 回日米学生会議概要……166

第７章　日米学生会議にご協力いただいた方々……171

序章

日米学生会議の歴史

日本側実行委員長挨拶

アメリカ側実行委員長挨拶

内閣総理大臣からのメッセージ

本文中の略語及びお知らせ

日米学生会議の歴史

1934年～1940年　初期の日米学生会議

日米学生会議は1934年、満州事変以降悪化しつつあった日米関係を憂慮した日本の学生有志により創設された。米国の対日感情改善、日米相互の信頼関係回復が急務であるという認識の下、「世界の平和は太平洋の平和にあり、太平洋の平和は日米間の平和にある。その一翼を学生も担うべきである」という理念が掲げられた。当時の日本政府の意思と能力の限界を感じた学生有志は、全国の大学の英語研究部、国際問題研究部からなる日本英語学生協会（国際学生協会の前身）を母体として、自ら先頭に立って準備活動を進めていった。資金、運営面で多くの困難を抱えながらも 4 名の学生使節団が渡米し全米各地の大学を訪問して参加者を募り、総勢99名の米国代表を伴って帰国した。こうして第1回日米学生会議は青山学院大学で開催され、会議終了後には満州国（当時）への視察研修旅行も実施されるに至った。日本側の努力と熱意に感銘した米国側参加者の申し出によって、翌年第 2 回日米学生会議が米国オレゴン州ポートランドのリードカレッジで開催され、以後1940年の第7回会議まで日米両国で毎年交互に開催された。しかし、太平洋戦争勃発に伴い、日米学生会議の活動も中断を余儀なくされた。

1947年～1954年　戦後の日米学生会議

戦争の終結によって会議は再開を見たものの、戦前とは異なり、1953年までは日本のみでの開催となった。翌1954年、戦後初の米国開催として第15回日米学生会議がコーネル大学で開催されたが、その後、資金問題、日本人学生の参加者の不足、米国における財政援助の中断などに悩まされ、会議は1955年から1963年まで再び中断された。

1964年～2003年　今日の日米学生会議

1964 年、OB/OG からの会議再開を望む声に応え、会議創始者の一人である故板橋並冶が理事長を務める財団法人国際教育振興会の全面的支援の下に、会議が再開された。第 16 回会議はリードカレッジで開催され、77名の日本人学生と62名の米国人学生が参加した。1973 年の第 25 回会議では、限られた日程の中での議論をより効率的かつ集中的に行うために、毎回テーマを設定し、期間を1ヵ月とするなど現在の会議の基本形態が整備された。

70 年の歴史を持つこの会議において、最も意義のあることは、創設以来、その企画、運営を両国の学生が主体的に行っていることである。しかし創設時と今日で日米両国を取り巻く環境は大きく異なっており、会議の形態自体も変化を重ねている。日米両国が新たな関係の構築を迫られている現代において、日米学生会議は、創設当時の理念を受け継ぎつつ、時代の変化に対応してゆく柔軟性を求められているといえよう。

日本側実行委員長挨拶

第56回日米学生会議実行委員会
日本側実行委員長　飯田智紀

2004年8月20日早朝、プリンストン。日本側参加者はバスに乗り込み、アメリカ側参加者との別れを惜しみつつ帰国の途についた。空港へ向かうバスの中は重い雰囲気に包まれ、参加者は皆、表現し難い感情を噛み締めていた。1ヵ月にわたる本会議をやり遂げた達成感、無事に終了したという安堵感、ひと夏を通じて友情を築いた友との別れ。そしてさらに、「このひと夏とは一体何だったのだろうか」という大きな疑問が、帰国を目の前にして各自の心を覆っていたのではないかと、本会議が終わった今振り返る。この夏、日米の学生79名が集った第56回日米学生会議とは何だったのだろうか。

1934年、悪化しつつあった日米関係を危惧した日本の学生有志によって、日米学生会議は創設された。そして今年、日米学生会議は幾度かの中断を乗り越え70周年を迎えた。それはまさに、かつてこの会議に集った先人たちの努力によるものであり、70年という長きにわたって、日米学生会議は両国の歴史とともに歩み続けたのである。そこで、弛まぬ歩みの節目に当たる第56回日米学生会議は、"Re-evaluating the Japan-America Relationship: Civic Commitment to Global Issues"「今、再考の時—日米関係と私たちの使命」という総合テーマを掲げ、これまでの日米関係を振り返り、現在の関係を再考し、そして今後のあり方を見出そうと試みた。同時に、歴史の上に構築された現代に生きる私たち、そして、学生であり、日米学生会議の参加者である私たちの使命とは何なのかを模索したのである。

本会議では全米4つの開催地を訪ね、私たちは日米関係の軌跡を目の当たりにした。ハワイでは、真珠湾の海中に眠る戦艦アリゾナから今も浮上し続ける油。サンフランシスコでは、日系人排斥運動により強制収容所に収容された経験を語る老人。ワシントンD.C.では、街の中心部に新たに誕生したWorld WarⅡ Memorial。そしてニューヨークでは、記憶にも新しいワールドトレードセンターの跡地。これらの軌跡を日本とアメリカの学生が共に巡り、両国の歴史を振り返り、一人ひとりの考えや思いを共有し合うことには大変意義があった。なぜならば日米の学生がこのように共有し合うことこそが、日米学生会議にとっては普遍的なものであり、この過程を経ることによって相互理解を達成していくからである。しかし対話を繰り返し、相互理解を達成しようと試みる過程において、日本とアメリカという二つの文化の差異を受け入れる事に苦労している参加者はそれほど多くなかった。むしろ国家の違いより個人の考え方の違いを乗り越える事に難しさを感じた者が多かった印象を得た。そのため参加者達は一人ひとりの思いや意見、考えを、対話を通じて共有し、相互理解を達成するため試行錯誤し、新たな自分を発見していったのだ。

「世界の平和は太平洋の平和にあり、太平洋の平和は日米間の平和にある。その一翼を学生も担うべきである」という精神の下、相互理解の促進を行ってきた日米学生会議。70年という月日を経て、日米関係が良好になった今、第56回会議は両国家の関係を考えるだけでなく、両国家の国民一人ひとりの相互理解の重要性を個人の成長によって実感する会議となった。このような貴重な経験をした私たちの使命とは、相互理解をする事に満足するのではなく、まさに日米学生会議が創設時に掲げた目的を思い出し、今後忘れることなくその一翼を担っていくという事なのだ。

本会議を終えた今、私たちが目指していたことを十分に達成できたといえるかどうかはわからない。しかし、1ヵ月弱の本会議の中で行ったことは「始まり」ではあると確信している。世界において日米関係の役割が注目される現代、その考察はこのひと夏で終わるべきではなく、今後も継続してなされていくものであろう。私たちはこの夏、相互理解を通じてそれを模索していった。そしてそれは本会議が終了した後も、参加者各自の中で行われていくものであろう。この報告書がまた新たな「始まり」生む一翼になってくれれば幸いである。

最後になりましたが、第56回日米学生会議の開催に際して、多大なるご協力を頂戴いたしました後援団体の皆様、ご賛助賜りました財団・企業の皆様、準備段階並びに本会議でご協力賜りました講師の皆様、日頃から貴重なご指導をいただきました（財）国際教育振興会、並びにThe Japan-America Student Conference, Inc.の皆様、様々な場面で多大なるご支援をいただいたOB,OGの皆様、そしてその他、当会議に関わって下さいましたすべての方々に、この場をお借りして心より御礼申し上げます。ありがとうございました。

アメリカ側実行委員長挨拶

The 56th Japan-America Student Conference Executive Committee
American Executive Co-Chairs Maiko Nakarai
Torin Martinez

I have often heard my elders lament about children today growing up without heroes or role models. It is true – there is no Superman, Mother Teresa or Abraham Lincoln in our present society. But while the public hero may no longer exist, I believe each of us have role models; figures we revere, admire, and aspire to emulate.

Through my experiences, both as a delegate to the 55th Japan-America Student Conference (JASC) and as co-chair of the American Executive Committee of the 56th JASC, I found my own heroes in the four founders of JASC. Confronted with steadily deteriorating relations between Japan and the United States, our founders refused to sit back and watch hopelessly as the world tumbled to disorder, but instead courageously took initiative and achieved the unimaginable. I truly admire their dynamic vision, unrelenting drive and motivation, ability to actualize change, and their unwavering belief in their hopes, dreams and the noble cause they represented. I admire their ability to prove that individuals *can* make a difference.

Over the course of its rich 70 year history, the Japan-America Student Conference has indeed achieved its founders' goal of improving relations between Japan and the United States. The bilateral relationship has evolved from one of bitter conflict to that of co-dependence and stability. Throughout the years, JASC has promoted strong friendships across the Pacific, one individual at a time, and to this day this foundation is further solidified every year. The founders of JASC are thus my heroes, for their vision and drive gave rise to a program which has made an everlasting impression and irreplaceable contribution to the U.S.-Japan relationship.

This year the Japan-America Student Conference celebrated its 70th anniversary under the conference theme, "Re-Evaluating the Japan-America Relationship: Civic Commitment to Global Issues." True to our theme, we dedicated countless hours to re-evaluating not only the U.S.-Japan Relationship, but also the function, role and current applicability of JASC. Through these discussions, I reaffirmed that despite current favorable relations, our founders' goal of constantly striving towards a better bilateral relationship remains crucial. Delegates to JASC throughout the years have thus remained conscious of this overarching objective of JASC, and it continues to underlie every activity of the conference.

I also realized that the true essence of JASC lies in the day-to-day experiences: The meaningful as well as seemingly insignificant exchanges, the excitement and frustrations, the roundtable discussions, panel discussions, field trips, receptions, cultural activities, night-time conversations and activities, bus rides and meals. This summer I saw 79 students representing different backgrounds, experiences, interests and views come together to form one community. During the one month was an amazing exchange of opinions, a blending of cultures, the collapse of stereotypes, myriad struggles and achievements, sadness and joy. It was a give and take which challenged each delegate to venture outside their comfort zones, to re-evaluate, accept and appreciate individual similarities and differences. I believe these experiences left everlasting impressions on all of us, and it is these experiences, newfound understandings, and lifelong friendships which form the backbone of a strong cross-cultural relationship.

Although the United States and Japan have already achieved a solid relationship, the fundamental values of recognizing and appreciating differences that JASC instills, and the bonds it creates, not only across the Pacific but today, across all corners of the globe, are becoming increasingly important in our global community, one which sadly is still confronted by conflict and tragedy.

It has been my honor and pleasure serving as co-chair of the 56th JASC American Executive Committee. It is my hope that each of us will take what we have learned during our month together, and as we return to our original communities, that we become the role models and heroes of the generations to come.

日本国内閣総理大臣からのメッセージ

内閣総理大臣　小泉純一郎

第56回日米学生会議の開催にあたり、心よりお祝い申し上げます。

日米学生会議は、1934年から現在に至るまで、日米両国の相互理解を促進される活動を続け、本年で創設70周年という節目の年を迎えられました。

日米両国が、自由と民主主義という価値観を共有しつつ戦後約60年の間に育んできた強固なパートナーシップは、世界の平和と繁栄に大きく貢献してきました。そしてこの間、日米学生会議に参加した方々も、政治、経済、文化等における日米間の友好関係のみならず、広く国際社会の発展と調和のために大きく活躍されてきました。このような事実を見るにつけ、次世代を築いていく若者が、会議でのさまざまな体験を通して交流を深めていく重要性を深く認識させられます。

本年の日米学生会議は「今、再考の時―日米関係と私達の使命」(Re-evaluating the Japan-America Relationship: Civic Commitment to Global Issues) というテーマを掲げています。日米交流150年を経たこの夏に、若い皆さんが、まさに使命感をもって日米関係のありかたを考えていくことは、皆さんの将来にとっても、また日米両国の将来にとっても非常に有益なことであると考えます。皆さんが自由闊達な意見交換を通じ、今後の日米関係、さらには国際社会の発展に貢献してくださることを大いに期待します。

本文中の略語及びお知らせ

本文中の略語

日米学生会議では参加者が日常的に用いる略語及び慣用語があり、本文でもしばしば登場しています。以下、一覧にしますので、お読みになる際の参考になさって下さい。

JASC：「日米学生会議／Japan-America Student Conference」の略。

JASCer：「日米学生会議参加者」の意。

JASC, Inc.：アメリカ側主催者 "The Japan-America Student Conference, Inc." の略。

EC：「実行委員会」または「実行委員／Executive Committee」の略。

デリ：「参加者／delegation」の略。

ジャパデリ：「日本側参加者／Japanese Delegation」の略。

アメデリ：「アメリカ側参加者／American Delegation」の略

アルムナイ：「日米学生会議の OB/OG」の意。

サイト：「本会議開催地」の意。第 56 回会議ではハワイ、サンフランシスコ、ワシントン D.C.、プリンストンがこれにあたる。

テーブル：「分科会／Round Table」の意。

JRT：本会議中のプログラムの一つ、「ジョイントラウンドテーブル／Joint Round Table」の略。

CWD：本会議中のプログラムの一つ、「全体討論／Conference-Wide Discussion」の略。

ST：本会議中のプログラムの一つ、「スペシャルトピック／Special Topic」の略。

リフレクション：本会議中のプログラムの一つ、「反省会」の意。

第１章

第56回日米学生会議概要

テーマ

活動概要

日本側参加者一覧

米国側参加者一覧

本会議日程

第 56 回日米学生会議テーマ

The 56th Japan-America Student Conference Theme

Re-evaluating the Japan-America Relationship: Civic Commitment to Global Issues
今、再考の時—日米関係と私たちの使命

1934 年、悪化しつつあった日米関係を憂慮した日本の学生有志により、両国の関係改善を目指して日米学生会議は創設された。彼らが当時抱いていた思い、彼らを行動に突き動かした思いとは、どのようなものだったのだろうか。創設当時の OB/OG の手記や話からは、社会で起きている様々な問題に対し、ただ傍観するのではなく、自らも当事者であると捉え行動しようとする思い、問題の解決を誰かに任せるのではなく、自らもその一翼を担おうという思いが、彼らの原動力であったことがうかがえる。

2004 年、日米学生会議は創設 70 周年を迎える。創設以来、時代が大きく変遷する中で、日米学生会議は歴史を重ね、その時々の社会問題に対し真摯に取り組んできた。時代が変わりこそすれ、創設当時の精神、あらゆる問題を自らのものと捉え行動していく精神は、現在に至るまで変わらずこの会議に宿っている。

では、今私たちの生きる時代とはどのような時代なのだろうか。70 年前とは異なり、現在日本と米国は極めて強固かつ友好的な関係を築いている。国家から民間のレベルに至るまで、密接な関係を構築し、二国間の交流はますます活発になっている。また、情報通信技術の発達と移動時間の短縮によって、人、物、資本、情報が、国境を越えて移動するようになり、グローバル化が実感をもって叫ばれる時代となった。かつてに比べ、空間としての世界が相対的に小さくなっている。しかし、グローバル化によって多くの恩恵がもたらされる一方で、それに伴う様々な問題が、国境を越えて広がっている。世界が目まぐるしく移り変わり、これまでの既成概念の枠を越えた事象が見られるようになった現代において、日米関係を再考する必要は高まりつつあるといえよう。日本と米国は現在、国際社会において多大な影響力をもつ国である。だからこそ、私たちは、日本と米国の二国間のみを語るのではなく、国際社会の中の日米関係を考えなければならない。現代において日米関係はどうあるべきか。国境を越えて広がる問題に対し、日米はどのような役割を果たしていけるのだろうか。日米学生会議を貫く精神は、これらの新たな課題へと向かっていく。

第 56 回日米学生会議は、この精神を胸に今動き出した。今日のあらゆる問題に対し、私たちには何ができるのか。どう行動すればいいのか。学生ができることには限界があるかもしれない。しかし、私たちはいかなる利害にもとらわれず議論し合い、その方法を常に模索していく。その意見を社会へと発信し、それに対する反応を積極的に取り入れ、社会との双方向的な関係を目指していく。それこそが、私たちの使命である。

第 56 回日米学生会議活動概要

Program and Organization

事業概要

主催
財団法人　国際教育振興会

後援
外務省、文部科学省、米国大使館、日米文化センター
財団法人　国際ビジネスコミュニケーション協会

企画・運営
第 56 回日米学生会議実行委員会

期間
2004 年 7 月 25 日～8 月 21 日

開催地
ホノルル、サンフランシスコ、
ワシントン D.C.、プリンストン

参加者
日本側 40 名（実行委員 8 名を含む）
米国側 39 名（実行委員 8 名を含む）

会議運営

2003 年夏に開催された第 55 回日米学生会議の最後の開催地京都において、日本側参加者とアメリカ側参加者の中から第 56 回日米学生会議実行委員が選出され、第 56 回日米学生会議実行委員会が発足した。実行委員会は、各実行委員の役割を決定した後、会議のテーマや開催地、分科会、ST、CWD、JRT、参加人数、開催日程などについて検討するため、昼に夜をついだミーティングを重ねた。そして、第 56 回日米学生会議の基本方針は “Kyoto Agreement”にまとめられた。

日本側実行委員会のこれまでの歩み　2003 年 9 月～2004 年 7 月

8 月	第 56 回日米学生会議実行委員会発足
9 月	役職引き継ぎ、予算案作成、財務活動開始、OB/OG 会、理念合宿
10 月	後援名義申請、ポスターや実施要綱等の作成、HP 立ち上げ準備
11 月	OB/OG 会、広報合宿、HP 立ち上げ準備
12 月	OB 総会、実施要綱の作成、本会議準備合宿、実施要綱等を各種機関へ送付
1 月	参加者応募受付　、HP 立ち上げ、本会議準備合宿
2 月	OB/OG 会、選考試験問題作成、選考合宿
3 月	第 1 次選考試験、第 2 次選考試験、選考合宿（参加者決定）
4 月	財務活動、OB/OG 会
5 月	春合宿の準備、春合宿の直前合宿、春合宿

6月	講演会、勉強会、防衛大学校訪問、本会議準備合宿
7月	講演会、勉強会、日本側直前合宿、本会議

本会議概要

本会議中のすべてのプログラムは、第56回会議の総合テーマとの整合性を考慮しつつ、実行委員を中心とした学生によって企画、実行された。

サイトイベント

本会議はアメリカの4つの都市で開催された。各開催地において、開催地の特色を生かした文化体験型のプログラムや、フィールドトリップ、パネルディスカッションなどが行われた。特に大きなイベントとしては、過去の日米学生会議の参加者とともにハワイサイトで行われた「日米学生会議創設70周年式典」が挙げられる。

分科会

日米両国の参加者は全員、各自の興味、関心をもとに8つの分科会のいずれかに所属し、レポート作成、プレゼンテーション、ディスカッション、フィールドトリップなどの活動を通して議論を重ねた。本会議中に計15回の分科会セッションを行った。

分科会テーマ

教育
グローバル経済システム
国際政治と日米
アイデンティティと市民活動
南北問題
メディア倫理
社会と科学技術
社会問題と制度

スペシャルトピック

スペシャルトピックは、論題が既に固定された分科会とは異なり、様々なトピックを参加者がその興味に従って自由に設定し、自発的な意見交換、議論、交流を行うものである。「イラク戦争」「北朝鮮問題」「靖国神社」といった政治的なトピックを扱うグループもあれば、ＥＵ拡大に関心を抱いたグループは、地域統合と拡大したＥＵが日米に与える影響について議論を交わした。一方、「国際結婚」「若者文化」「宗教」「哲学」などを話すグループもあり、多岐にわたる話題について活発な議論が行われる機会となった。

全体討論

分科会やスペシャルトピックがグループごとに異なる論題について議論をするのに対して、全体討論では参加者全員が一つのテーマについて話し合った。語学の壁や、それまでの活動を振り返っての考えや意見を共有し、以降の活動をよりよくしていくのに有意義な機会となった。

第 56 回日米学生会議日本側参加者

The 56th Japan-America Student Conference Japanese Delegation

日本側実行委員

安藤　彩	お茶の水女子大学	文教育学部	３年
飯田　智紀	慶應義塾大学	法学部政治学科	３年
大宮　貴史	慶應義塾大学	総合政策学部	３年
坂口　紋野	慶應義塾大学	商学部	３年
佐藤　智紀	東京大学	経済学部	３年
ジェフ　ハッチンズ	上智大学	比較文化学部	３年
原　　奈央	関西外国語大学	外国語学部	３年
福家　雄大	立命館大学	国際関係学部	３年

日本側参加者

荒島　由也	慶應義塾大学	法学部政治学科	２年
伊東　孝哲	慶應義塾大学	総合政策学部	３年
海野　慧	立命館大学	国際関係学部	２年
大地　悠子	山形大学	医学部医学科	３年
尾形　樹穂菜	青山学院大学	文学部心理学科	３年
久保田　豊乃	青山学院大学	国際政治経済学部国際政治学科	３年
黒田　佳代	兵庫県立大学	応用情報科学研究科	修士１年
佐藤　陽子	津田塾大学	学芸学部国際関係学科	４年
島　　裕貴	立命館大学	文学部哲学科	２年
下斗米　紀子	一橋大学	法学部	３年
新目　久美子	聖心女子大学	文学部歴史社会学科国際交流専攻	４年
杉田　道子	国際基督教大学	教養学部国際関係学科	２年
高瀬　哲郎	東京医科歯科大学	医学部医学科	４年
田中　珠理	慶應義塾大学	政策・メディア研究科	修士１年
坪田　裕美子	九州大学	21 世紀プログラム	３年
出浦　寛子	慶應義塾大学	法学部法律学科	２年
寺崎　テレサ	早稲田大学	国際教養学部国際教養学科	１年
寶　　一博	三重大学	医学部医学科	４年
砥上　明子	早稲田大学	政治経済学部政治学科	３年
中田　牧	国際基督教大学	教養学部国際教養学科	３年
中村　恵理	東京大学	公共政策大学院	修士１年
能見　駿一郎	東京大学	法学部第二類	４年
袴田　隆嗣	東京大学	教養学部総合社会科学科	４年
白　　雲	早稲田大学	アジア太平洋研究科	修士１年
久野　愛	東京大学	総合文化研究科地域文化研究	修士１年
広田　愛	関西学院大学	社会学部社会学科	２年
福田　愛奈	お茶の水女子大学	生活科学部人間生活学科	２年
三谷　佳孝	立命館大学	国際関係学部	３年
村上　裕子	京都外国語大学	外国語学部英米語学科	３年
女鹿　智恵	早稲田大学	アジア太平洋研究科	修士１年
森上　翔太	東京大学	教養学部総合社会科学科	３年
山田　悠花子	愛知淑徳大学	文化創造学部文化創造学科	修士１年

第56回日米学生会議米国側参加者

The 56th Japan-America Student Conference American Delegation

米国側実行委員

Ms. Tiffany Hirata	University of Washington	International Studies	Junior
Ms. Jill Kunishima	Mills College	Communications / Psychology	Post Graduate
Mr. Torin Martinez	UNC at Chapel Hill	Political Science/Psychology	Post Graduate
Ms. Leah Mullen	Mills College	Civic Leadership	Post Graduate
Ms. Maiko Nakarai	Harvard University	Government	Sophomore
Ms. Kristine Tyson	Cornell University	Human Development	Junior
Ms. KristenWhite	University of Kansas	English/Political Science/Int'l Studies	Junior
Ms. Aziza Zakhidova	University of Pennsylvania	International Studies/Business	Sophomore

米国側実行委員

Ms. Julia Bartlett	Guilford College	Asian Studies and Education	1st Year
Ms. TaNaya Birch	University of Wisconsin-Madison	East Asian Studies	Senior
Mr. Chieh-Ting Chen	UNC at Chapel Hill	Business Administration	Senior
Mr. Christopher Chhim	University of Chicago	Linguistics/International Studies	1st Year
Mr. Morris Cornell-Morgan	Earlham College	International Studies	Junior
Ms. Carolyn Cross	Princeton University	History	Junior
Ms. Shannon Foreman	Smith College	East Asian Language and Literature	Sophomore
Ms. Anna Franekova	Harvard University	Government	Junior
Ms. Lyndsey Garcia	Mount Holyoke College	International Relations	1st Year
Ms. Monique Gilliam	Cornell University	Undecided	1st Year
Mr. Lasantha Gunasekara	Cornell University	Neurobiology	Junior
Ms. Portia Hunt	Rutgers College	East Asian Languages & Area Studies	Senior
Ms. Michelle Lee Jones	University of Chicago	History	Sophomore
Mr. Tony Kingsolver	Indiana University	Political Science / Sociology	Fifth
Ms. Sarah LaFleur	Harvard University	Social Studies	Sophomore
Ms. Hanna Lee	University of Chicago	Mathematics/Economics	Senior
Mr. Hunter McDonald	Harvard University	East Asian Studies	1st Year
Ms. Reiko Mizutani	Keio University	International Relations	Junior
Ms. Lauren Moss	Randolph-Macon Woman's College	Psychology and History	1st Year
Ms. Megumi Nakamura	Princeton University	East Asian Studies	Junior
Mr. Nicholas Napalo	Wesleyan University	East Asian Studies	Junior
Ms. Ashley Neeley	University of Maryland	Chinese / Communication	Fifth
Ms. Kay Negishi	Harvard University	Neurobiology	1st Year
Mr. Nicholas Parkel	Rutgers University	East Asian Languages & Area Studies	Junior
Ms. Eric Shelton	University of Redlands	Global Business	Junior
Ms. Elspeth Spransy	Eckerd College	Int'l Relations / Political Science	Junior
Ms. Yukie Takeda	University of South Alabama	Communication	1st Year
Ms. Tina Toal	Widener University	International Relations	Senior
Mr. Nicholas Topjian	Harvard University	East Asian Studies	Senior
Ms. Mika Yasuo	University of Puget Sound	Foreign Language / Int'l Affairs	Sophomore
Ms. Linda Zhang	Harvard University	Biochemistry	Senior

第56回日米学生会議本会議日程

2004年7月25日～8月21日

ハワイ

7月25日	日本側参加者ホノルルに到着、ジョイントオリエンテーション#1 分科会#1、アイスブレーク
7月26日	ジョイントオリエンテーション#2、えひめ丸パネルディスカッション 開会式、スキット
7月27日	分科会#2、フィールドトリップ、異文化体験（フラダンス）
7月28日	裏千家ティーセレモニー、分科会#3、 真珠湾フィールドトリップ事前勉強会 “Unlikely Hero”（ドキュメンタリー映画鑑賞、質疑応答など）
7月29日	分科会#4、真珠湾訪問（ミズーリツアー、アリゾナメモリアル） タレントショー
7月30日	分科会#5、70周年記念式典、ウェルカムディナー
7月31日	OB/OGとの分科会#6、ルアウパーティー
8月1日	サンフランシスコへ出発

サンフランシスコ

8月2日	サンフランシスコ到着、パネルディスカッション 強制収容体験者の方々との分科会#7、ホームステイ
8月3日	アジア美術館、エンジェルアイランドツアー
8月4日	ワシントンD.C.へ向けて移動

ワシントンD.C.

8月4日	ワシントンD.C.到着
8月5日	サイトオリエンテーション、集合写真撮影、分科会#8
8月6日	パネルディスカッション、スペシャルトピック#1
8月7日	ホワイトハウス訪問、フィールドトリップ、JRT
8月8日	サービスプロジェクト、CWD
8月9日	国務省訪問、第二次世界大戦記念碑（WWⅡ Memorial）見学 分科会#9
8月10日	分科会#10、分科会#11、日本大使館訪問
8月11日	終日自由時間
8月12日	プリンストンに向けて出発

プリンストン

8月12日	プリンストン到着、サイトオリエンテーション レセプションパーティー
8月13日	UNICEF訪問、模擬国連ツアー、分科会#12 国連日本使節団訪問
8月14日	分科会#13、講演会、分科会#14
8月15日	フォーラム　於プリンストン大学
8月16日	フィールドトリップ、ニューヨーク散策
8月17日	分科会#14（リフレクション） 第57回日米学生会議実行委員選挙
8月19日	閉会式
8月20日	日本側参加者帰国、アメリカ側参加者解散

第２章

事前活動

春合宿

勉強会

防衛大学校訪問

直前合宿

春合宿

2004年5月4日～6日 国立オリンピック記念青少年総合センター

初顔合わせ～感動と興奮～

2004年5月4日から5月6日までの3日間、国立オリンピック記念青少年総合記念センターにおいて、第56回日米学生会議参加者の初顔合わせとなる春合宿が行われた。日本側実行委員8人、日本側参加者32人の計40人で構成される第56回日米学生会議の本会議に向けての準備活動が、いよいよ本格的に始動した。実行委員長の歓迎の挨拶が終わると、椅子を円形に配置した一室で順番に自己紹介をし、アイスブレーキングを通して交友を深めていった。

オリエンテーションでは、日米学生会議についての様々な説明を受け、独自の用語やジェスチャーを知る機会にもなった。夜には小グループに分かれて、この第56回日米学生会議にかける意気込みを語り合い、それぞれの決意を新たにした。

翌日は分科会ごとに分かれてのミーティングを2時間近く行い、その中では今後の事前活動の方針や勉強会、講演会の企画などについて話し合った。そして、ミーティングの内容を分科会ごとに発表し、全員で共有した。昼には日米間のコミュニケーションの違いや文化の違いについて学んだ。その後、本会議での英語のディスカッションに慣れるため、小グループに分かれて英語でディスカッションを行った。英語でのディスカッションは、参加者に本会議を意識させ、緊張感を高めるものであった。夜にはOB/OGの方を招いてのレセプションが行われた。第2回日米学生会議の参加者でいらっしゃる堀内宗忠氏からスピーチをいただいた際には、当時の学生会議が直面した数々の試練や思い出など貴重なお話をうかがうことができ、日米学生会議の歴史を実感させられる一幕であった。また、第56回日米学生会議の参加者は一人ひとり壇上で3分程度の自己紹介をすることになり、熱い思いを語る者、英語でスピーチをする者など個性に富んでいた。

3日目は、今後の予定などの連絡や、メーリングリスト発足の説明などの簡単なアナウンスの後、正午前には解散となった。

2泊3日という短い期間において過密なスケジュールではあったが、合宿という共同生活を体験したことの意義は大きく、数日前までは見知らぬ者同士であった参加者が自然と打ち解け、親睦を深める絶好の機会となった。各参加者にとっては、アカデミックな面においても、交流の面においても、双方の面において意義深いものであった。

勉強会「朝日新聞記者訪問」

2004年5月22日 朝日新聞東京本社

講師：武井宏之氏、柴田鉄治氏

講師略歴

＜武井宏之氏＞
早稲田大学卒業。
テレビ東京の報道記者を経て、
朝日新聞記者に転身。
現在、朝日新聞東京本社社会部の記者。

＜柴田鉄治氏＞
1935年東京都生まれ。
東京大学理学部卒。
1959年朝日新聞社入社。
東京本社社会部記者、福島支局長、論説委員、
科学部長、社会部長、出版局長、論説主幹代理、
総合センター所長などを歴任。
その後、朝日カルチャーセンター社長を経て、
現在、国際基督教大学客員教授。

勉強会内容

朝日新聞の記者としてイラクのサマワ基地に赴いた武井記者と、元朝日新聞論説委員で現在は国際基督教大学客員教授でいらっしゃる柴田鉄治先生を囲み、質疑応答形式でお話をうかがった。

武井記者へは、報道倫理や情報操作といった戦争報道に関する質問のみならず、イラクへの自衛隊派遣の是非や復興支援のあり方についてなど、参加者から幅広い質問が提示された。大学の講義においてや書物で一般的に言われていることよりも、ずっと臨場感のある武井記者のお話に、一同は心を大きく揺さぶられ、質問は途切れることがなかった。

一方、柴田先生からは、社説の執筆過程や日米のジャーナリズム比較など、報道全般の事項について詳細な説明をしていただいた。メディアによって世論が大きく左右される今日の社会において、実際にメディアを通して情報を発信していく側の方々からお話をうかがうことができたこの機会は、参加者に大きな刺激を与えた。

勉強会「参加者へのメッセージ」

2004年5月29日 福島しんじ事務所

講師：福島真治氏

講師略歴

ウィスコンシン州立大学政治学学士。
ルンド大学大学院(スウェーデン)政治学修士。
その後、
欧州連合(EU)代表部ワシントンD.C.研修員、
欧州連合(EU)本部ブリュッセル研修員
を経て、
現在、大阪市議会議員。

勉強会内容

第56回日米学生会議の英題テーマは「Re-evaluating the Japan-America Relationship: Civic Commitment to Global Issues」である。

そして、市議会議員という立場上、市民参加という点において第一線で活躍されており、さらにアメリカへの留学経験のある福島氏に講演していただいた。

前半は日米間の教育の違いについて述べられ、福島氏自身の体験から日米間の教育を比較された。アメリカの初等教育においては、人種間、地域間での教育水準の格差をなくすために全米で学生のレベルを底上げする動きがあるのに対し、日本では詰め込み教育を敬遠し、「ゆとり教育」を推進する動きが見られる。日本は、「勤勉さ、知識、技術」といった面で世界に存在感を示してきたが、この「勤勉さ」も失われつつあり、日本以外のアジア諸国が台頭してくる中で日本の存在感が薄れていくことを危惧された。

後半は、現在の国際政治の概要や、福島氏自身の体験に基づいての英語の話し方、アメリカ人とのコミュニケーションの仕方などを幅広く説明していただき、最後には参加者の質問に答えて時間の許す限りアドバイスを下さった。「日米学生会議には達成しなければならない明確な目標がないので、参加者の皆さんには甘えが出てくるかもしれないが、この機会を最大限に活かして成長するように」と我々を激励して下さった福島氏の言葉を受け、参加者の意識が高まっていった。

勉強会「アメリカ外交の捉え方」

2004年6月5日 日米会話学院

講師：福田潤一氏

講師略歴

千葉県出身。
青山学院大学卒業。
東京大学大学院総合文化研究科博士課程、
国際関係論分野専攻。
専門は国際政治理論、アメリカ外交。
国際基督教大学社会科学研究所で
非常勤助手を勤める。
第54回日米学生会議参加者。

勉強会内容

6月5日、日米会話学院において「アメリカ外交の捉え方－海外での軍事力使用を巡って」について、東京大学総合文化研究科国際社会科学専攻博士1年の福田潤一氏から講義をしていただいた。また、この勉強会には日米学生会議のOBの方も数名参加されていた。

9.11 米国同時多発テロ事件以降、アフガニスタン、そしてイラクと、アメリカの海外における軍事力行使が目立つ中で、アメリカ外交政策の良し悪しを判断する以前に、その前提として、アメリカの軍事力行使がどのような考えの下に成り立っているのか、そのもとになるアメリカ外交の理念や歴史とはどのようなものなのかについての理解は欠かせない。そのため、アメリカ外交の分析枠組み、アメリカ外交のアクター、アメリカの軍事力行使に伴う問題点について、国際政治学的な視点からお話ししていただいた。

その後、「アメリカ人は本当に外国との関係に興味があるのか、そしてないのだとしたら、関心をもってもらうにはどうしたらよいか」「アメリカにおけるメディアの役割」「日本のパワーとは何か」「自衛隊を派遣することは日本のソフトパワーの向上に繋がるか」「日米安保は東アジアの安定に役立っているのか」などのテーマで参加者の間でディスカッションを行った。

勉強会「イラクへの自衛隊派遣～制服組の立場から～」

2004年6月12日 国立オリンピック記念青少年総合センター

講師：山内大輔氏、吉田圭秀氏

講師略歴

＜山内大輔氏＞

1985年防衛大学校卒業。普通科連隊、警務隊部隊及び部隊長、内局、
陸上幕僚監部、陸上幕僚長副官などを経て、
現在、防衛研究所一般課程に入所中。一等陸佐。

＜吉田圭秀氏＞

1986年東京大学工学部卒業。1995年陸上自衛隊幹部学校指揮幕僚課程卒業。
第26普通科連隊、防衛大学校、普通科教導連隊、幹部学校指揮幕僚課程、
外務省日米安全保障条約課、第34連隊中隊長、陸上幕僚監部人事部補任課、
陸上幕僚監部装備部装備計画課を経て、2003年より陸上幕僚監部防衛部防衛課防衛班。

勉強会内容

日本の防衛に携わる自衛隊。しかし、この時問題となっていたのは、国土の防衛ではなくイラクへの自衛隊派遣の是非であった。この勉強会では、実際に自衛隊員として任務を遂行している、いわゆる「制服組」と呼ばれるお二方に、現場での経験に基づいたお話をうかがった。

前半には、自衛隊という組織の仕組みと、自衛隊での訓練の経験などについてうかがった。後半は質疑応答で、特にその時に問題になっていたイラクへの自衛隊派遣についてうかがった。イラクでは日本の自衛隊は受け入れられているという。なぜなら、日本の自衛隊は現場密着型の「日本式の援助」をイラクで行っているからである。阪神大震災の時に見られたように、復興支援は日本の自衛隊が得意としている分野であるそうだ。しかし、海外派遣において難しい点は、いつ地元住民にバトンタッチをして撤退するかということである。なかなか撤退ができないという状況にあるのは、日本としての政策的なグランドデザインが欠如しているからではないか、という指摘がなされた。そこで最近では、現場により精通している制服組の意見も求められるようになったそうだ。また自衛隊のステータスについて、国際的には軍隊と同じであるが、国内法的には国家公務員という地位であるという説明がなされた。参加者にとっては、自衛隊という存在を新たな角度から見るきっかけになったといえよう。

防衛大学校訪問

2004年6月19日 防衛大学校

新たな価値観との出会い

2004年6月19日、第56回日米学生会議の日本側参加者35名は、神奈川県横須賀市にある防衛大学校を訪問した。

会議参加者の中には防衛大学校に在学する友人をもつ学生や、以前に見学したことがある学生もいたが、大半の学生にとっては防衛大学校生と交流するのは初めての経験であった。そのため、この日は日本の安全保障や自衛隊のあり方について積極的に意見交換をし、両者の考え方を共有する場であると同時に、自衛官の卵である同じ年代の防衛大学校生と友情を深める貴重な場でもあった。今回の訪問は例年とは異なり平日ではなく休日に訪問したため、学校主催ではなく、防衛大学校の学生と日米学生会議の参加者が事前に協力し合い、学生主体でプログラムを作っていった。そのため、今回の訪問では学生同士が意見交換をする機会を重視した。

防衛大学校到着後、参加者は西原正防衛大学校長から激励のメッセージをいただき、続いて防衛大学校の学校生活や年間行事についての広報ビデオを見た。そして防衛大学校の学生とともにキャンパスツアーを行い、図書館などの施設や部活風景、宿舎などを見学した。その後、ともに昼食をとり、対話を楽しみ、そして清道陸軍一佐の「防衛学の視点から見た今日の国際情勢」と題する講演を聴かせていただいた。そして訪問のメインイベントである「グループ討論会」を、6つのグループに分かれて行った。各グループとも日米学生会議参加者と防衛大学校の学生がほぼ同じ割合で入る構成となっていた。事前に用意していた、「自衛隊のあり方」、「日米安保と米軍基地問題のあり方」、「アジアの中での日本の役割」、「教育制度」、「自衛隊における女性のあり方」などのトピックについて、白熱した議論を行った。討論中は立場や関心、考えの違いにより意見が衝突する場面もあったが、その理由を明らかにしていく中で、双方の学生は互いの立場を理解していった。訪問終了後には横須賀の街で夕食をともにし、防衛大学校生の日常や将来への率直な思いを聞くことができた。

限られた準備期間で企画、準備した訪問ではあったが、目的としていた学生間の交流を盛んに行うことができ、参加者に新たな発見と刺激、そして友情を与えてくれたことであろう。

The 56th Japan-America
Conference
第56回日本学生会議
Re-evaluating the Japan-America Relationship:
Civic Commitment to Global Issues
今、再考の時　日米関係と私たちの使命

文部科学省座談会

2004年6月20日　国立オリンピック記念青少年総合センター

講師：上田智一氏

講師略歴

1997年東京工業大学第6類入学。
2003年3月修士課程修了、
同年4月博士課程に進学。
同年9月に中退し、
10月に文部科学省入省。
現在、
科学技術・学術政策局基盤政策課に勤務。

勉強会内容

文部科学省科学技術・学術政策局の上田智一氏を迎え、文部科学省が行っている科学技術人材養成や、現在の教育が抱える問題点など幅広くお話をうかがった。科学分科会を中心とした少人数での質疑・応答形式の座談会であったため、学生の視点からの問題点を深く掘り下げることができた。

上田氏は、学生時代に建築学を専攻し研究者を目指して研究を行っているうちに、大学のあり方に改善が必要であると感じた。そして、互いに必要性をあまり感じていなかった、大学と産業界とのつながりを作ることにより、研究者の成果が正当に評価され、科学技術がスムーズに社会の役に立つのではないかと考えたそうだ。実際、大学は産業界の要請に合うような研究を進める傾向にあり、文部科学省もそれを推奨している。公的資金を産業界との連携を加味したものにすることで、大学に競争原理が働き、研究活動に流動性をもたせることができるのではないかと期待しているそうだ。それに対し、学生からは「自由な学問をするはずの大学が、産業界を視野に入れ、お金が儲かる研究しかやらなくなるのではないか」などの意見が出た。

他にも、科学技術に関する倫理問題、科学技術とメディアとの関わり、高等教育における科学推進のあり方、科学技術の国際化などについて自由に意見を交わした。

勉強会「日本の医療・医療倫理」

2004年6月26日 新須磨病院

講師：松本悟氏

講師略歴

兵庫県姫路市出身。昭和2年8月30日生。
京都大学医学部卒業。
昭和37年より米国シカゴ市ノースウェスターン大学医学部脳神経外科、シカゴ大学脳神経外科レジデント、ドイツケルン市マックスプランク脳研究所研究助手を経て、
昭和43年北野病院脳神経外科部長、
昭和46年神戸大学医学部脳神経外科教授に就任。
平成3年に同職を定年退官、
現在、神戸大学名誉教授、
特定医療法人慈恵会新須磨病院常任顧問。

勉強会内容

兵庫県須磨にある新須磨病院にて松本悟先生にお話をうかがった。先生は日本二分脊椎・水頭症研究振興財団の会長で、現在神戸大学名誉教授、特定医療法人慈恵会新須磨病院常任顧問である。

私たちはまず、自分たちが疑問に思っていることを先生に質問し、それについて先生に答えていただくという方法で話を始めた。

先生は、日本はもちろんのことアメリカやドイツなどでも働かれた経験があり、日米の保険制度の違いや医療システムの違いなどを話して下さった。また医学部の受験制度については、5分～10分程度の面接ではその人の人間性まで見るのは難しいという問題や、医者の数が日本において十分なのかという問題などについて、先生のご意見をうかがった。話の内容は広範囲にわたり、医学部の教育内容、また日本において臓器移植が進まない現状に見られるような文化の違い、倫理問題などについても話し合い、私たちは多くの問題に気づくと同時に問題の深さ、難しさを改めて認識することとなった。

私たちの訪問を快く迎えてくださり、お茶やお菓子を出してくださるなど先生の心遣いを受けながら、先生との談話を楽しむことができた。

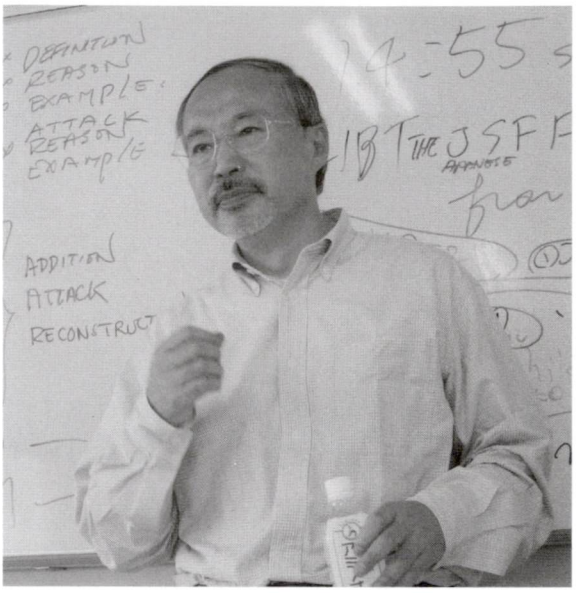
勉強会「ディベートの極意」

2004年6月26日 日米会話学院

講師：井上敏之氏

講師略歴

慶應義塾大学経済学部卒業。
（株）ミキモトに入社し、営業、商品企画、
人事教育担当を経て、1975年に退社。
同年より、ユニバーサル葉タバコ会社在日代表。
1995年に独立、（有）スピーチディベート研究所
を設立、現在に至る。
第16回日米学生会議参加者。



勉強会内容

スピーチ・ディベート研究所の代表としてご活躍であり、日米学生会議のOBでもいらっしゃる井上敏之氏に、英語でのディベートについて丁寧なご指導をいただいた。井上氏はまず、言葉による戦いのゲームであるディベートの種類やルールについて触れられ、1)point 2)reason 3)example 4)pointというディベートを組み立てるための基本構成について、例を挙げながら説明して下さった。そして、参加者は、アメリカから留学のため来日しており、第56回日米学生会議実行委員であるジェフ・ハッチンズと井上氏による英語のディベートを見て感想や意見を言い合った後、二つのグループに分かれて、「宗教は善か悪か」「自衛隊はイラクに駐留すべきか、撤退すべきか」というトピックについて実際にグループディベートを体験し、井上氏からさらなる指摘やアドバイスをいただいた。

参加者は皆、英語で高度な内容を発表することやディベート自体の難しさを実感しつつも、説得力のある意見の組み立て方、日頃の情報収集の必要性、早くかつ的確で柔軟に考えることの重要性などについて学んだ。勉強会を終えて「もっとディベートを訓練したい」という感想も多く聞かれ、この経験によって本会議へ向けてのモチベーションが上がったこと、そして本会議中のディスカッションや意見を発表する際に、大きな一助となったことは言うまでもない。

勉強会「今後の日米関係」

2004年７月２日 ウイングス京都

講師：村田晃嗣氏

講師略歴

1964年兵庫県生まれ。
1987年同志社大学卒業。
1994－95年ジョージ・ワシントン大学留学。
1995年神戸大学大学院研究科博士課程終了。
広島大学総合科学部専任講師、同助教授を経て、現在、同志社大学法学部助教授（国際関係論、特にアメリカ外交・安全保障政策研究専攻）。

勉強会内容

７月２日、京都市にあるウイングス京都で、「今後の日米関係」と題して同志社大学助教授の村田晃嗣氏から講義をしていただいた。村田氏には米国留学時の体験談、また日米関係の過去、現在、未来についてそれぞれお話していただき、米国との関係を正しく見るには相手国を冷静に分析することが重要であるということを、アフガニスタン、またイラク戦争を例にとって説明していただいた。さらには日本外交のあり方についても、他国の外交を例にとり比較することによってわかりやすくお話していただいた。

勉強会の後には同志社大学法学部の村田ゼミの学生も加わり懇親会を開いた。そこでは、ゼミ生とともに日本を取り巻く様々な時事問題について、アルコールの助けも借りつつ熱く語り合い、参加者双方にとって良い刺激となった。

この勉強会は、今後の世界における日本の役割について深く考える機会となったのではないだろうか。

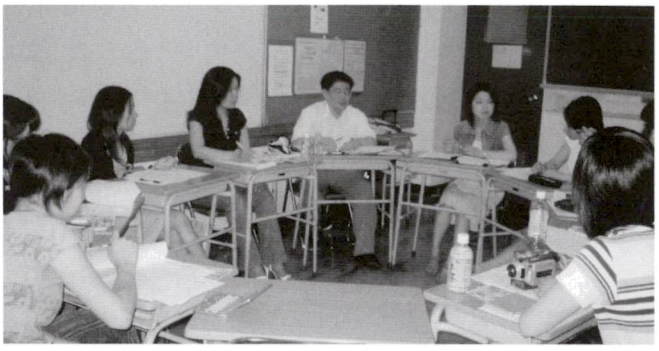
勉強会「アジア系アメリカ人」

2004年7月3日 日米会話学院

講師：武田興欣氏

講師略歴

東京大学法学部第三類(政治コース)卒業。
東京大学大学院法学政治学研究科政治専攻修士課程修了。
東京大学大学院法学政治学研究科政治専攻単位取得済退学。
プリンストン大学政治学博士号(Ph.D.)取得。
現在、青山学院大学国際政治経済学部助教授。
専攻は政治学。
研究テーマはアメリカ連邦議会の立法過程、
アジア系アメリカ人の政治とアイデンティティ。
第39回日米学生会議参加者。



勉強会内容

青山学院大学助教授であり、日米学生会議の OB でいらっしゃる武田興欣氏に、アメリカのマイノリティ・グループとして挙げられる、アジア系アメリカ人について解説していただいた。まず、参加者が自己紹介とともに、各自の持つ「アジア系アメリカ人」のイメージ、印象を述べることから勉強会が始まった。参加者がもっているイメージも多様であったように、実際「アジア系アメリカ人」を一括りにすることは難しい。なぜならアジア系アメリカ人自身が、世代、民族的なバックグラウンド、政治的な立場によって、異なる認識をもっているからだ。

勉強会の後半では、アジア系アメリカ人の政治的な発言力、どれくらい活躍しているか、アメリカ連邦議会の議員数など、具体的な数字を示して説明して下さった。州単位、または地域単位でアジア系アメリカ人への政策は多様である。例えば連邦政府単位では、市民権や投票権などの問題で、州単位、地域レベルでは教育や都市開発などの問題で政策が異なる。また歴史的背景として、公民権運動やベトナム反戦運動は、今回の日米学生会議のサイトの１つでもあるサンフランシスコで始まったということにも触れられた。

勉強会の最後には、アジア系アメリカ人学生の中で、大学に「Asian American Studies」のコースを導入して欲しいという運動が起こっているというトピックが紹介された。これは「Asian Studies」とは異なり、アメリカにおいてのアジア系アメリカ人の歴史や役割について学ぶコースである。これは、彼らの「アジア系アメリカ人」としてのアイデンティティの高まりを反映しているといえるだろう。

大阪大学 OSSIP 勉強会

2004 年 7 月 4 日　大阪大学

講師：ロバート・D・エルドリッヂ氏

講師略歴

1968 年生。
Lynchburg College, Virginia, USA
(B.A. International relations high Honors,
Cum Laude, 1990)
1996 年神戸大学法学研究科前期課程(政治学修士号)
1999 年神戸大学法学研究科後期課程(政治学博士号)
を経て、
現在、大阪大学助教授。
専門は、日本政治・外交史、日米関係史、
対外政策決定過程論、安全保障論、沖縄問題。

勉強会内容

7 月 4 日、大阪大学大学院国際公共政策研究科（OSIPP）にてロバート・D・エルドリッヂ助教授の協力の下、勉強会を開催した。午前中は、エルドリッヂ助教授による日米学生会議参加者のための講義「戦後日米関係と沖縄」があり、なぜ沖縄に興味をもつに至ったのかという助教授の個人史から、いわゆる「沖縄問題」とは何か、「沖縄問題」が戦後どのようにして形成されていったのか、今後の沖縄問題の展望、そして沖縄の米軍基地を「負担」にではなく「財産」にするにはどうしたらよいか、などについてお話をしていただいた。昼食後には OSIPP ツアーがあり、OSIPP ではどのような活動がなされているのか、助教授自らが紹介して下さった。

午後からは、助教授のゼミの学生による論文発表会に日米学生会議のメンバーも参加し、OSSIP では現在の日米関係についてどのようなことが論点とされ研究対象となっているのかを垣間見ることができた。助教授のゼミにはアメリカ海軍からの留学生やヨーロッパや中米、アジアからの留学生など、様々なバックグラウンドをもつ学生が所属しており、日本とアメリカの学生からだけではない日米関係論に日米学生会議のメンバーは触れることとなった。論文発表会後には夕食懇談会の場が設けられた。

勉強会：English Discussion Session

高まるモチベーション

春合宿から本会議までの約2ヵ月間、英語力を高めるための英語ディスカッションセッション（English Discussion Session）が週に一回のペースで、東京四谷を中心として行われた。第56回日米学生会議実行委員のジェフハッチンズが主宰したこのEDSは、主に二つのことを目的とした。一つ目は、我々日本人学生が、本会議中にアメリカ人学生と英語で高度な議論を交わすための「アカデミック英語」の練習。二つ目は、アメリカ人と交わすカジュアルな日常会話の練習である。

毎回15人前後の参加者が集まったEDSは、時々アメリカ人留学生も交えて行われ、議論したトピックはイラクへの自衛隊派遣の問題から、学生であることの意義に至るまで、実に様々であった。ディスカッションが終わった後には、留学生や日本側参加者同士の会話を楽しみつつ、英語で話すことの難しさや喜びを分かち合った。

EDSは多くの学生にとって、英語で議論を行う本会議へ向けて心の準備もさせてくれる場となった。

直前合宿

2004年7月24日～25日 東京大学検見川セミナーハウス

高まる期待と緊張

第56回日米学生会議本会議に先立ち、7月24日から25日にかけて、直前合宿が行われた。春合宿以降初めて、日本側参加者40名全員が、千葉市にある東京大学検見川セミナーハウスに集合した。直前合宿の場から翌日出発する成田空港まではバスでの移動であるため、各自大きなスーツケースを抱えての再会となった。

集合後は、委員長の挨拶に続き、直前合宿および本会議のスケジュールを確認した。その後、当会議の主催団体である国際教育振興会を代表して、賛助会事務局長である伊部正信氏より改めて、「日米学生会議に応募した時の初心を忘れずに、心して本会議に臨むように」とのお話があった。実行委員による緊急連絡先や健康管理についての諸注意を受けた後、宿泊棟に移動した。夕食後は主に、本会議開始後に日本側、アメリカ側参加者がそれぞれ発表し合うスキットの練習に時間を費やした。今年は「日本の夏を紹介する」ということをテーマに、ラジオ体操、夏祭り、盆踊りなど、いくつかのキーワードを挙げ、参加者を三つのグループに分けて各担当箇所のスキットを練習した。その後は全員で、実行委員が用意していた花火を楽しみ、明日から始まる本会議への興奮を抑えきれぬまま就寝した。

翌日は、午前中を再びスキットの練習に費やし、分科会ごとのミーティング、今後のスケジュールの最終確認をした後、成田空港へと出発した。

参加者ノート

寺崎テレサ

事前学習では、朝日新聞社、防衛大学校、朝鮮学校などを訪問した。朝日新聞社では、イラク戦争を取材されていた記者の方からお話をうかがうことができた。現場の生々しい取材体験は、本の上で得られる情報の何倍もの重みがあった。イラクの人たちの生の声を聞ける機会は滅多にない。中でも印象的だったのは、イラクの人たちが日本のことをどう思っているか、という点だ。驚いたことに、彼らは日本に対してとてもいい印象をもっていた。日本の自衛隊がイラクの復興支援のために一生懸命に活動していることを、彼らは肌で感じとっているらしい。他国の復興支援の方法が、単に口で指図し、指導するだけなのに対し、日本の自衛隊は、イラクの人々と一緒になって道路を舗装し、地下水を掘っているという。そのような、本当の意味での復興支援協力がイラクの人々を親日派に至らせたのだという事実を知り、感動を覚えた。

防衛大学校の訪問の際には、自衛官の卵たちと意見交換をすることができた。普段は滅多に出会うことができない彼らとの討論は、非常に意義深かった。中でも印象的だったのは、彼らの情報源が非常に限られているという点だ。防衛大学校では、規律正しい生活を送ることが鉄則であり、普段の生活も厳しく規制されている。普段、私たちが何気なく見ているワイドショーやドラマ、夜のニュース番組などは、ほとんど見ていないという。そのため、一般の人々と知識のギャップや感覚の違いがあるという。彼らと討論をした際に、普段、メディアや新聞では見られないような単語や議題が出てきて、驚かされた。

朝鮮学校訪問の際は、普段は見ることのできない在日朝鮮人の子どもたちの生活を垣間見ることができた。その学校では、朝鮮語を使うことが徹底されていた。日本語を学校の中で使用すると、減点が課されるのだ。ここまで母国語の使用を徹底させている学校は珍しいという。現在、ほとんどの朝鮮学校では、日本語を使う生徒が大半だという。中には、母国語を話せない生徒もいるという。アイデンティティを確立するためには、母国語がいかに重要な役割を果たすか、ということを学んだ。

文部科学省の官僚の方をお招きして勉強会も開いた。教育改革の最中、文部科学省の内部ではどのような動きが起こっているかを知ることができる貴重な機会だった。

バイオベンチャー企業の訪問では、現在、水面下で起こりつつあるバイオテクノロジーの隆盛を感じることができた。最先端のバイオテクノロジーやバイオビジネスに触れることができ、未来を創造する上で非常に意義深い機会となった。

能見駿一郎

思い返せばもう半年も前のことになるが、つい昨日のことのように思い出される。その日、私たちは緊張と興奮で昂ぶる気持ちを抑えつつ代々木のオリンピックセンターに集結した。そう、それぞれに熱い想いを内に秘めた 40 の個性が織り成す第 56 回日米学生会議の暑く熱い夏は、既に春合宿において始まっていたのである。

その後、直前合宿に至るまでの期間、私たちは迫り来る本会議を見据えつつ、分科会の枠を越えて事前勉強会を重ねた。もちろん時間的、距離的な問題もあり、皆が全ての勉強会に参加できたわけではなかったが、それら一つ一つの勉強会が非常に生産的なものとなったことは間違いないであろう。私が参加できたのは、福田氏による「アメリカ外交の捉え方」、防衛庁、防衛大学校、文部科学省、OSSIP の各勉強会であったが、それらも全て普段経験することのない大変貴重なものだった。福田氏による勉強会は、周知のごとく本年が米大統領選の行われる年でもあり、またイラク戦争により米国の単独行動主義が様々に論じられていたときでもあったため、時宜にも適い私たちの関心も高く、複雑なアメリカ外交に対する考察を深める良い機会となった。防衛庁の方をお招きしての勉強会でも、焦点は主にイラク戦争に伴う自衛隊派遣問題に当てられたが、そこから派生して、比較的市民に密着した活動を行う自衛隊の特徴や、海外展開が徐々に増える中で重要性を増す制服組の現場感覚など、大変興味深いお話をうかがった。事前勉強におけるメインイベントであった防大研修も非常に印象深いものであった。そこでは、多数の防大生を交えたディスカッションを通し、防大生ならではの現実味と凄みを帯びた意見に触れ刺激を受けた一方で、国内の一般的な意識と防大生の意識との間の乖離を感じさせられる面もあった。これらの勉強会は関東で開催されたのだが、そこには地方在住の参加者も意欲的に訪れていた。それに触発され、関東在住の参加者も関西まで足を運んで参加したのが OSSIP 勉強会であった。そこでは、エルドリッヂ氏から日米関係における沖縄問題について様々な観点からお話をいただき、また、引き続き参加させていただいた OSSIP の学生による報告会では、各国からの留学生、米軍関係者など様々なバックグラウンドを持つ方による熱のこもった発表にさらなる刺激を受けた。

このように、事前勉強会はどれ一つとっても非常に意義深いものだった。それは残念ながら私が参加できなかったものも同様であろう。そこで得たものが本会議にどう活かされたのかは各人それぞれなのかもしれないが、少なくとも本会議を見据えて日本側参加者の意識を高め、想いを共有するかけがえのない時間となったことは間違いなく、また、それらは本会議へ向けての糧となっただけでなく、私たち一人ひとりの人生の糧ともなったのではないだろうか。

思えば、事前勉強会は本会議への助走であった。その助走は徐々に加速され、直前合宿を経て本会議への大跳躍へと繋がった。

第3章

本会議——サイト活動

ハワイサイト

サンフランシスコサイト

ワシントンD.C.サイト

プリンストンサイト

ハワイサイト

サイトコーディネーター：大宮貴史、Tiffany Hirata

ハワイサイトの概要

日本人にとって、ハワイはリゾート地としてよく知られており、身近な場所であるという印象がある。また、歴史を紐解いてみると、明治期には多くの日本人が移民としてこの島へ渡り、真珠湾では太平洋戦争の火蓋が切って落とされるなど、日本との関わりが深い地であるといえよう。一方で、2001 年に実習船「えひめ丸」が、米軍の潜水艦と衝突した事故を忘れてはなるまい。

当サイトでは、これらの史実や事件をより深く理解するために、真珠湾へのフィールドトリップや、えひめ丸事件に関するパネルディスカッションを行った。また、ワイキキビーチやダイヤモンドヘッドを訪れ、ハワイの自然、そしてその開放感を感じ取った。ハワイの開放的な空気の下、初めて顔を合わした日本側参加者とアメリカ側参加者は、その緊張を和らげ、友好を深めていった。

さらにこの地では、日米学生会議創設 70 周年を記念した式典が催され、多くの過去の参加者がこの地に集合した。現在と過去の参加者が交流し、日米学生会議の歴史を振り返ると同時に、日本とアメリカがかつて対立し、戦後ともに歩んできた歴史を振り返ることとなった。

ハワイサイトのスケジュール

7 月 25 日	日本側参加者到着
	ジョイントオリエンテーション#1
	分科会#1
	アイスブレーク
7 月 26 日	ジョイントオリエンテーション#2
	えひめ丸パネルディスカッション
	開会式
	スキット
7 月 27 日	分科会#2
	フィールドトリップ
	異文化体験（フラダンス）
7 月 28 日	裏千家ティーセレモニー
	分科会#3
	真珠湾フィールドトリップ事前勉強会

	“Unlikely Hero”（ドキュメンタリー映画鑑賞、質疑応答など）
7月29日	分科会#4
	真珠湾訪問（ミズーリツアー、アリゾナメモリアル）
	タレントショー
7月30日	分科会#5、70周年記念式典
	ウェルカムディナー
7月31日	OB/OGとの分科会#6
	ルアウパーティー
8月1日	サンフランシスコへ出発

7月25日　日本側参加者到着、ジョイントオリエンテーション#1 分科会#1、アイスブレーク

ハワイ大学にてアメリカ側参加者と対面した。事前に決まっていたパートナーから、蘭の花の首飾り（レイ）を首にかけてもらい、日本側参加者は感激していた。荷物を部屋まで運び、初めてのアメリカでのランチを楽しんだ後、早速分科会が行われた。時差ボケに苦しむ中、まずは自己紹介と分科会の方向性を話し合った。夜は皆で交流を深めながら、これから本格的に始まる会議への期待が高まっていった。

7月26日　ジョイントオリエンテーション#2（グランドルール）

79名の参加者には、アメリカ人、日本人はもちろんのこと、タイや中国、スロバキアなど、様々な国からの留学生もいた。多種多様なバックグラウンドを持つメンバーが、お互いに快適でより充実した1ヵ月にするために、日米学生会議の期間中に守るべきルールについて話し合った。このルールは、誰かに提示されたものではなく、それぞれが抱える不安を共有できるような、よりよい環境にするために参加者自らが考え出したものである。ルームメイト間での気配り、アメリカ側参加者と日本側参加者間での言語についての配慮、全体での情報共有、集団生活での細やかな心配りなどに関するルールが提示された。この話し合いを通して、会議成功への意欲と、お互いへの心配りを感じることができた。

７月26日　えひめ丸パネルディスカッション、開会式、スキット

Japanese Cultural Center of Hawaii において、アメリカ海軍の潜水艦と衝突し、ハワイの海に沈んだ「えひめ丸」の事件に関するパネルディスカッションが行なわれた。このパネルディスカッションを通じて、事件後にアメリカ政府は、日本の文化を考慮した遺体回収を行おうとしていたことなど、公には報道されなかった事件の背景について詳しく知ることができた。パネルディスカッションの後は、同会場にてオープニングセレモニーが行われた。夜はハワイ大学に戻り、日米両学生が練習を重ねてきたスキットを披露した。日本側は日本の夏を紹介するもの、アメリカ側は映画『タイタニック』の撮影風景を再現したもので、どちらも笑いの絶えない楽しいものであった。

７月27日　分科会#2、フィールドトリップ、異文化体験

午前中に行われた分科会は２回目ということもあり、進め方や討論の形式などそれぞれの特色もでてきたようであった。午後からは、フィールドトリップとしてワイキキビーチ、ダイヤモンドヘッドなどの場所を各自選択し、それぞれ楽しいひとときを過ごした。夕食後はハワイ大学に戻り、フラダンスの実演を見せてもらった後、簡単な振り付けを習い参加者全員で踊るという貴重な異文化体験をした。

７月28日　裏千家ティーセレモニー、分科会＃3、真珠湾事前勉強会、”Unlikely Hero”鑑賞

裏千家ティーセレモニーは、希望者のみが参加という小規模なイベントであったが、アメリカ側参加者にとっては日本文化に触れるよい機会となった。午後は、次の日の真珠湾訪問に備えて事前勉強の時間が設けられた。グループディスカッションの形態で、真珠湾に関連した出来事に関して知識の共有や意見交換が行われた。その後、アメリカ海兵隊での差別に立ち向かった日系アメリカ人のドキュメンタリー映画である”Unlikely Hero”を鑑賞し、ご本人と監督を交えて活発な質疑応答が行われた。

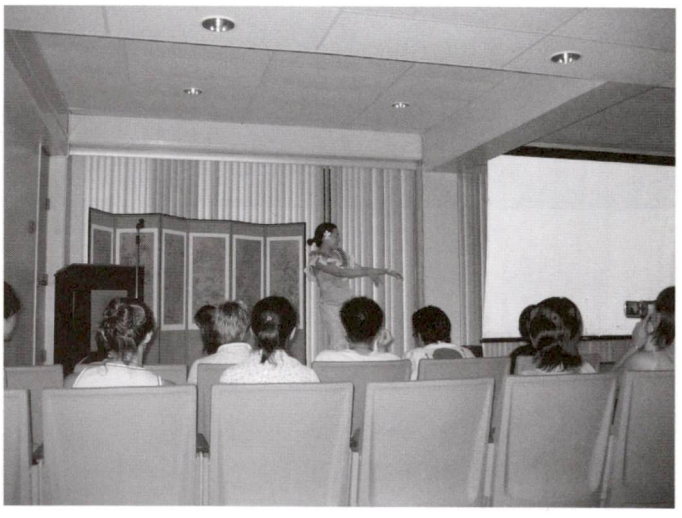
7月29日　分科会#4、真珠湾訪問、タレントショー

午前中は 4 回目の分科会が行われた。分科会はいよいよ本題に入り、各自が本会議前に執筆した論文について、プレゼンテーションを開始した。

午後はバスで真珠湾を訪れ、一般公開されている太平洋艦隊旗艦ミズーリ号を見学した。船上では、1945 年当時に日本全権であった重光葵外相により調印された、太平洋戦争降伏文書や、艦隊に突撃した神風特攻隊について説明を受けた。さらに、観光用ボートで真珠湾を一周した後、アリゾナ艦隊記念碑を訪れ、海底に残された沈没船を見学した。このアリゾナ艦隊は、日本軍による真珠湾攻撃時に攻撃を受け、沈没した軍艦である。日米両国の学生にとって感慨深いこの場所で、それぞれが歴史について考える機会を得た。

夜は真珠湾について意見交換を行い、各自の考えを述べ合った。その後、参加者の特技を披露し合うタレントショーが開かれ、歌や踊り、体操など、参加者のユニークな個性と才能が披露された。

真珠湾に浮かぶ戦艦ミズーリ号



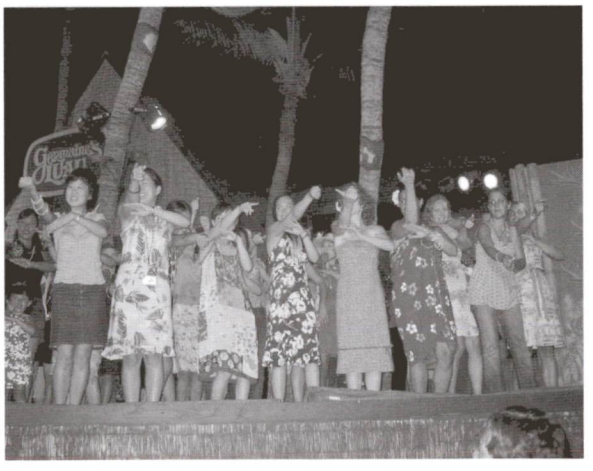
タレントショー

7月 30日　分科会#5、70周年記念式典、ウェルカムディナー

昼食後、ハワイ大学内の施設 Imin Center にて日米学生会議創設 70 周年記念式典が行われた。日本、アメリカ側の過去の参加者も多く列席し、式典は盛大なものとなった。第 56 回会議の日本側、アメリカ側の実行委員長の挨拶に始まり、過去の参加者の紹介、日米学生会議が辿った 70 年の道のりが描かれたスライドショーなどによって、この学生会議の歴史を振り返った。式典参加者全員での写真撮影の後、ハワイ州知事邸である Washington Place にて開かれたウェルカムディナーパーティーでは、過去の参加者や会議の協力者と親睦を深めた。

7月 31日　OB/OGとの分科会#6、ルアウパーティー

日本やアメリカ、世界各地から集まった数十名の OB/OG を交え、分科会を行った。分科会は 20 歳前後の同世代同士の討論が通常だが、世代の違う OB/OG を迎えることで、中身の濃い議論が繰り広げられた。第 56 回会議参加者には歴史を知る良い機会となり、OB/OG には自身が参加した際の学生会議を懐かしむひとときとなった。夜は、OB/OG も交えてハワイの伝統的なパーティーに参加した。ここでは、ハワイを始めポリネシア地域の伝統的なダンスなどが披露された。ショーの途中では、本会議参加者がステージ上でフラダンスを披露するなど、ハワイの最後の夜を締め括る楽しいイベントとなった。



日米学生会議における日米関係

大宮貴史

「現在の日米関係は･･･」。

昨今、メディアなどを通して毎日のように耳にするため、私たちは、この言葉の持つ意味を深く考えることは少ないであろう。「日米関係」自体が抽象的であり、目に見えないものであるので、その言葉の意味や重みを明確に捉えにくい。

下田で結ばれた日米和親条約を発端とする日米交流は、今年で 150 周年を迎えた。その間、両国は様々な壁を乗り越え、現在では政治、経済など様々な分野で堅固な関係を築いている。また、両国の歴史背景をみると、互いに自国の持つ価値観、文化など異なるものを取り入れて成長してきた。そして今日、日米関係は二国間のみならず、世界における日米関係として、その重要性が認識されているといえよう。民間レベルでも、多様な留学プログラムを始め、文化交流事業などが活発に行われている。このような事実からは、一見日米関係は順風満帆のように思われる。しかしその一方で、在日米軍基地問題など日米間が抱える問題が残っているのも事実である。

日米学生会議では毎年、日米関係を再考するテーマが掲げられる。これは参加者が物事に批判的な人間であるという理由からだけではない。学生にとっては国家間の日米関係の持つ意味を自分なりに理解したいからではないだろうか。知識人、政治家が唱える「国益のため」とは片付けることが出来ず、自分達の視点での日米関係を模索しているからかもしれない。それが、日米学生会議で毎回、議題になる所以であろう。では、第 56 回日米学生会議が目指した「今、再考の時—日米関係と私たちの使命」とは一体どのようなものなのであろう。

「日本の学生が夢見た中で一番偉大な夢」。日米学生会議の創始者の一人が、このように会議を表現してから 70 年の月日が流れた。1932 年にロサンゼルスで開催された「世界青年会議」に、日本代表として参加した彼は、世界の学生間の親善と理解を図るという目的の下に開かれたこの会議に感銘を受けた。そして、学生によって日米両国民の偏見を取り除き、相互理解を促進すべく、日米学生会議は 1934 年に産声をあげた。創設当時は、学生が会議運営のために資金的な援助を得ようと東奔西走した。今でこそ国際交流が盛んに行われているが、当時は社会からその必要性を問われることもしばしばであった。また、開催にこぎつけた会議中の議論では、満州国建国についてのアメリカ人の質問に、必死で日本側の経緯を説明したという記録も残っている。当時は珍しい日米の男女同席での会議に驚いた学生もいたという。つまり当時は、日米両学生が集まること自体に意味があったということができよう。和やかな雰囲気に包まれながら、日米間の友情を育んでいたことがうかがえる。その数年後に、日米関係の歴史に影を落とすこととなる日米開戦を迎えるとは、思いもよらなかったであろう。

そして2004年盛夏、澄み切った青空に浮かぶ太陽の下、開放的な雰囲気に包まれたハワイで、日米学生会議70年の節目を祝う式典が行われた。各世代の参加者は、会議の思い出話に花を咲かせ、また今年の参加者との交流によって、世代を越えた日米学生会議の意義を語り合う貴重な時間となった。参加した年代が異なっても変わらない日米学生会議への情熱、そして1ヵ月間寝食をともにした仲間との友情が、会議そして個人レベルでの日米関係を良好にしていく原動力となっているのである。

国際連盟事務局次長等を歴任した新渡戸稲造は「太平洋の掛け橋とならん」という言葉を後世に残している。日米学生会議もこの太平洋を越えた 4 人の学生の夢をきっかけに、艱難辛苦を乗り越えてこれまで続いてきた。会議自体も参加者個人により、日米関係を広義に解釈し、アカデミックなディスカッションを期待する者から、学生交流プログラムを意識して参加する者まで多様な学生が会議に参加してきた。そして、これまで学生会議では、両学生の率直な意見交換によって相互理解がなされてきた。それは、互いに相手の価値観を尊重し、受け入れてから可能であったのだ。

日米学生の間にいくつもの友情がこの会議から生まれた。その友情は海を越え、個人レベルでの日米関係を構築してきた。個人が、国家間の日米関係の一躍になることは現実的には難しい。しかし、日米両学生の間で育まれた固い友情は、永遠の絆となり、太平洋の架け橋となっていくだろう。そして、今後の日米関係の一躍として、その関係をより一層強固にし、将来の二国間関係とつながっていくはずである。そして、個人レベルでの日米関係の重要性を再認識することが、第56回日米学生会議の目的であり、それが私たちに課せられた使命なのである。

日米学生会議は、日米関係の親善、学生の国境を越えた視野の拡大、生活をともにした学生の友情によって継続してきた。これからもその歴史を刻んでいくだろう。会議には世代を越えても変わらないものがある。それは、学生の何事にも恐れずに果敢に挑戦する冒険心である。そして、これからの学生会議でも受け継がれていくだろう。

参加者ノート　尾形樹穂菜

私にとってハワイサイトでの出来事は、すべてが印象的で、衝撃的で、そして新鮮だった。「ハワイの地で最も嬉しかったこと」—それは素敵な「相棒」と出会えたことである。彼女は19歳で、心優しい、どんなときでも笑顔と面白いツッコミを忘れない女の子である。私にとって彼女の存在はとにかく大きかった。到着したばかりの頃、うまく自分の思いや考えを伝えられない悔しさともどかしさの中にいた私を、彼女の笑顔が救ってくれた。ハワイの地でのルームメイトでもあった彼女は、ドアにこんな張り紙をしていた。"Please do not forget to bring your smile, room-key." 言いたいことが言えず泣きそうな心境にあったとき、彼女のスマイルと思いやりにパワーを分けてもらった。そして、私はいつの間にかみんなに打ち解けていくことが出来た。

「ハワイで最も悩み、考えたこと」—それは文化の違いと戦争に対する考え方の相違である。日本側参加者到着後 2 日目に行われたえひめ丸事故に関するパネルディスカッションは、非常に考えさせられるものであった。事故当時ニュースを目にしたときから、私の中でいつの間にか反米感情がふつふつと煮え始めていたことに気づいた。しかし、多額の費用をかけたという、異例の遺体引上げ作業が行われた背景をパネリストから耳にし、なぜ加害者であるアメリカの乗組員が謝罪をしなかったのかという点について、別の視点から見ることができた。アメリカでは、謝ることは補償するということを意味するのだという。しかしながら、日本人はたとえ補償が万全でなくてもまず謝るのである。例えば私たちは、記者会見などで当事者が頭を下げている光景をしばしば目にする。このように考えていくと、「謝る」ということの文化差があるゆえに、えひめ丸事故後のアメリカに対する批判が私の中でさらに高まっていったのかもしれない。確かに事故が起き、9名の尊い命が失われてしまったことは悲しい。それが現実であり、今でもそのことに関しては強い憤りを感じる。しかし、事故を引き起こしたアメリカ側が、日本の文化や心情を理解しようと努めたのも事実であることをアメリカ人の口から聞き、ハッとした。手袋をはめて引上げ作業にあたり、遺体に対する敬意を払ったこと、事故を起こした相手国が日本であったので遺体救出にこれだけの予算と労力を投じたのではないかということなど、アメリカなりに引き起こしてしまった事故の重みについて誠意をもって対処していたのだということを知った。またパネルディスカッション後、あるアメリカ側参加者は、「当事者は人間として謝るべきであった。しかし軍に入っている以上、個人的に謝罪することができなかったのかもしれない。」と言っていた。このように事故についての意見が交わされた一方、ある別のアメリカ側参加者は「えひめ丸の事故とは一体どんなものであったのか」と質問してきた。その一言には大きなショックを受けた。果たして一般のアメリカメディアはこの事故をどのように取り扱ったのであろうか。この事故に関してどれだけ多くのアメリカ人が、どの程度把握しているのだろうか。そのような疑問が次々頭をよぎった。あのような事故は二度と起きてはならないものであると実感するとともに、メディアや人々の関心について考えさせられた。

その日、私は「謝ること」について少し考えてみた。日本人がすぐに謝ることは逃げることなのだろうか、それとも誠意を見せることを意味するのだろうか。しかし補償問題について万全でないまま謝るということは確かに無責任かもしれない。このように考えていくと、日本人はより感情が前に出る習性を持っているのかもしれないと思った。それゆえに、まず心で謝ることを重視するのかもしれない。一方、アメリカ人にしてみれば具体的な補償があってこそ初めて誠意を見せることになるのかもしれない。

また私は生まれて初めてパールハーバーを訪れた。USS(米国艦船)ミズーリにて神風特攻隊が命を落とした場所、そして日本人の奇襲で命を落とした人々の慰霊碑を目の当たりにして、「もう何があっても二度と尊い命が失われてはならない、このような歴史を繰り返してはいけない」と自分に言い聞かせた。また、神風特攻隊として命を落とした青年に対して、アメリカが今もなお敬意を払っているということに驚いた。案内をしてくれたガイドによると、終戦後独自調査を行い、その青年の名前を突き止めたという。私はその事実を知り、アメリカ人も日本人も同じ人間だと痛感するとともに、これは戦争のために命を落とした人を、今もなお英雄として称える傾向にあるアメリカの一面なのかもしれないとも感じた。パールハーバーを訪れる前とその後に行われたアメリカ側参加者との討論では、追悼記念館の意味から、イラク戦争に及ぶまで様々な意見が交わされた。追悼記念館については、広島の平和祈念資料館を訪れたことのあるアメリカ側参加者から、「広島の資料館は戦争の恐ろしさを伝えている。日本の勝ち負けではなく『歴史』『命』を教えている」といった意見が出た。またミズーリで案内をしてくれたガイドの説明の仕方が、「どこかアトラクション的である」という、ある日本人参加者の意見に対して、「多くの戦争体験者の世代からみるとミズーリはアメリカ勝利の象徴であり、アメリカ万歳という意味合いを持っている。しかし私たちは戦争の恐ろしさを伝えていかなければならない」といったアメリカ側参加者の声も上がった。私はそれまで、「アメリカ人は戦争好き、常に利益優先」などといった偏見を知らず知らずのうちに持っていた。しかし今回とりわけハワイサイトでの会議を通して、様々考えを持つ人々がアメリカという国には存在するということを肌で感じることができた。日米学生会議に参加する前の私は、頭ではわかっていても実際にアメリカ人に会って話をするわけでなく、メディアを通じたアメリカしか知らなかった。それゆえに自分の中にある偏見や固定観念は深まるばかりであった。そんな私にとって彼らの意見は一つ一つが新鮮で、心に響いた。また、「報復を行う前に、なぜテロが起きたのかという点を押さえなければ、永遠にそれを解決する糸口は見つからないのでは」と私がつたない英語で問いかけ、「何もせず見ているだけというのも罪ではないか」との意見が出たとき、自分の戦争に対する考え方の曖昧さに気づいた。私は戦争に反対であるし、一般市民の尊い命を奪うテロ攻撃という手段も、適切ではないと思っている。しかしそこで具体的にどうするべきなのかと問われると言葉に詰まった。果たして資本主義の世界で、一般市民の生活レベルを上げていくことは不可能なのであろうか。一握りの金持ちと平均的な生活を営む人々、そして貧困に苦しむ人々と、まさに三分化されたこの世界で「戦争をなくそう」と叫ぶこと自体、馬鹿げているのか、「テロはなぜ起きるのか」と考えたところで何

も変わらないのではないだろうか。—そのとき、次々と浮かぶ疑問にはっきりとした答えを見つけることはできなかった。確かに日本の生活レベルは上がったが、今もなおこの国で餓死する人がいるのも事実だ。水道もガスも止められ、コンビニで破棄される食料で生き延びている子どももいる。使い捨て社会の裏には貧困から両親や親戚、知人に虐待を受け、命を落とす子どももいる。悲しいけれど、それが現実だ。今の私にとって「平等」という言葉の意味はいまいちわからず、なおかつ戦争は遠いところで起きているのだという感覚がある。

そこで何をしたらよいのか、考えれば考えるほどわからなくなったこともあった。しかしハワイで戦争について様々な人の意見を聞いていく中で、今まで見えなかったものが見えてきたように思う。確かに「戦争」について話し合う私たち学生は無力かもしれない。しかしながらハワイサイトを終えた辺りから私は、「何事も意見を交換することから始まるのであり、そんな草の根的な活動は私たちが思っている以上に大きな意味を持つのではないか」と感じるようになった。

私は経済の専門的な知識もないし、論理的な提案もできない。だから話し合うことから一歩を踏み出そうというアイディアはあまりに楽観的過ぎて、実際に緊急の救済を必要としている人にとってみれば、あまり力になっていないのも事実であろう。しかしながら、今回日米学生会議を通して感じたのは「人間はやっぱり心だ」ということである。今、私たち学生ができること、それはまさにより多くの人と意見を交換していくことなのかもしれない。

大自然に恵まれたハワイの地で私たち日米の学生が「戦争」について真剣に語り合ったことが、きっと「平和」につながるものであると私は強く信じている。そして夜遅くまでハワイの星の下、語り尽くしたことは一生忘れないだろう。またいつか第56回日米学生会議の参加者とともに真珠湾を再訪し、社会人としての視点から「戦争」について考えることができれば、と今ふと思う。

参加者ノート　杉田道子

今だから言えることだが、私が日米学生会議に応募した動機の一つはハワイに行けることだった。私はいわゆる大観光地に旅行するのがあまり好きでないので、今までハワイに行こうと考えたことがなかったが、多くの人の「ハワイは天国だよ〜」、「世界で一番いい場所だね、あそこは」などという感想を聞いて、いろいろ妄想していた。南国フルーツに青い海、やしの葉が茂る砂浜、フラダンスにアロハシャツ･･･と典型的なイメージを膨らませながら、「ハワイの海でマンゴーを食べるんだ！」と思い本会議前の課題に励んだ。

しかし同時に、「ハワイではやるべきことがある」、と密かに意気込んでいた。やるべき

こととはパールハーバー訪問である。広島で生まれ育ち、被爆体験のある母校での平和学習などの影響で、私は広島的平和アイデンティティのようなものを持ち続けているつもりだ。私が考える広島的平和アイデンティティとは、ヒロシマの受けた原爆の被害を唯一の被爆国のものとして世界に伝え、原爆その他の核兵器廃止の重要性を市民の視点で訴え続けること、そして平和の推進をいろいろな形で行ってゆく使命を認識すること、である。一言で言えばNo more Hiroshimaなのだが、過去の核実験に絶えず抗議してきたこと、市民レベルで平和運動や平和教育に取り組んできたことを思うと、単に「ヒロシマのようなことは二度とごめんだ」以上の平和を希求をしていると考えている。

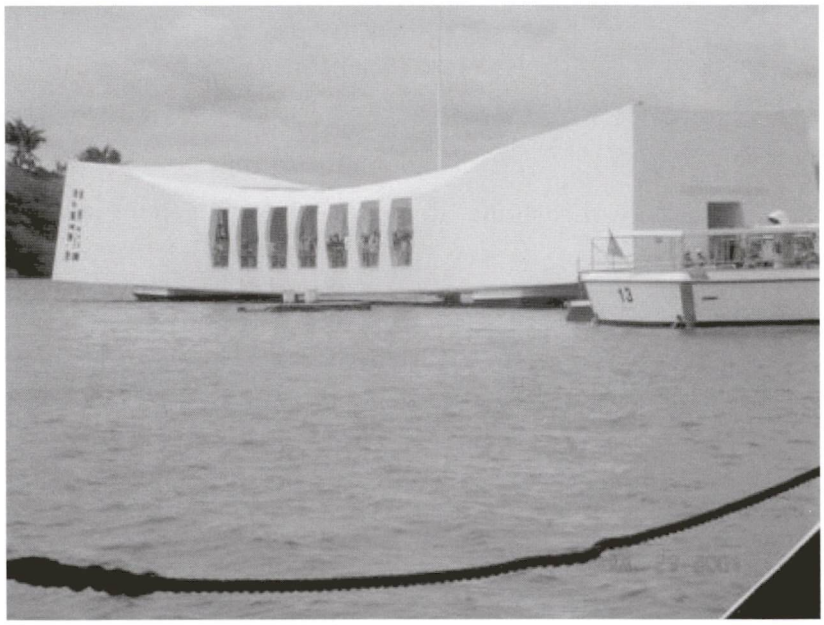
そんな広島人として、No more Hiroshimaを唱えるとき、いつも後ろめたさを感じていたのだが、それはパールハーバーを知らないからだった。「アメリカのヒロシマ」のように言われているパールハーバーの悲劇を知らずして、ヒロシマの被害ばかりを述べるのは、相互理解ではなく一方通行の責め合いのような気がしたからだ。象徴的なことに過ぎないのかもしれないが、私にとっては意義深い訪問であった。

さて、そのように意気込んでパールハーバーに行き、私は主に二つのことを思った。一つ目は、やはりパールハーバーはとんでもない悲劇であったことである。今も沈む戦艦と静かな海を見て、攻撃直後のアメリカ海軍兵を想った。私たちと同年代の青年が、どれほど恐怖と戦い、息絶えたのだろうか。パールハーバーは軍用基地であったからまだ正当性が認められるだとか、死者の規模は原爆とは比べものにならないじゃないかいう意見を聞いたことがあるが、全くの見当違いだ。日本軍の攻撃は、多くの尊い命とその家族を始めとする多くの人の心に、償っても償いきれない傷を残してしまったのだ。

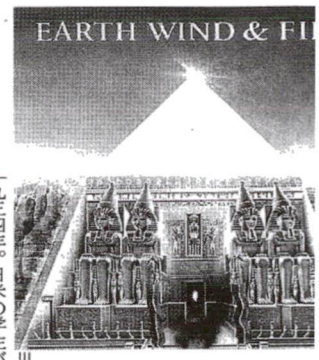
二つ目は、パールハーバーからはNo more Pearl Harborのメッセージは伝わってこなかった、ということだ。世界で唯一原爆が投下された街である広島は、原爆投下後から現在までの復興の歴史の傷が深いがゆえに、No more Hiroshimaというメッセージを発信し続けてきた。今まで、No more Hiroshima, Remember Pearl Harborと聞いて何も疑問に思わなかったが、No more を訴え続けるヒロシマと対照的に、パールハーバーからはRemember のメッセージしか伝わってこなかったのである。だからといってパールハーバーを軽視するつもりはないが、これが互いの戦争解釈を象徴しているように思えた。まだまだ相互理解の壁はあることがわかり、ヒロシマの役割を再考した。

ハワイは、期待した通り、最高の場所だった。オリエンテーション、タレントショーやスキット発表、参加者の名前覚え、分科会の方向決定、講演会など、緊張の連続とハードスケジュールで、決して「天国」とは形容できない日々だったが、とても有意義な時間が過ごせたと思う。70周年のリユニオンも、日米学生会議の意義や歴史の上にある現在を確認する場として、心に残る時間が持てた。ハワイに対する私のステレオタイプは、日米学生会議の思い出で鮮やかに色づけされたようだ。

USS ミズーリ甲板にて



アリゾナメモリアル



音楽の伝統は、アフリカから連れて来られた奴隷たちによるワークソングに由来する。彼らは、失われた故郷のリズムで綿を摘み、鍬を打ち、遥か遠い故郷を想うことで日々の試練に耐えた。

やがてそれはブルースやジャズ、そしてソウル（ミュージックダイレクト）

光り輝き、宇宙へと飛び立たんばかりだ。

彼らに苦役を与えて来た白人文明によって支配された地球から、新たな新天地へと向けて旅立つかのように。（一九七七年、現在の発売元はソニー・ミュージックダイレ

文　化

日米学生、友好の遺伝子

◇相互理解めざした学生会議、70周年に同窓生集う◇

山本東生

戦前から続く日米学生会議が、七月末に米国ハワイで開いた第五十六回会議で発足七十年を迎えた。これに合わせて初めての大規模なリユニオン（同窓会）が実現、親子二代にわたり会議のメンバーだった私はその実行委員長を務めた。戦争などで二度にわたり中断した波乱の歴史を振り返りながらエピソードをつづってみたい。

会議が誕生したのは一九三四年。日米の学生が自由に意見を交換し、相互理解を深めて両国の関係改善を目指そうと日本の学生が創設した。故板橋並治氏が同志の田端利夫氏や中山公威氏らと氷川丸で太平洋を横断、広い米国で会議の必要性を遊説して回ったのがきっかけだった。

□□□

国際的孤立の中で

これに応じて米国から約百人が日枝丸や大洋丸に分乗して来日、三四年七月に青山学院で第一回の開催にこぎ着けたのは有名な話だ。米国側の提案で、次回から交互に開催するようになった。

しかし当時の日本は世界から孤立し始めていた。第一回会議の前年に国際連盟を脱退。第七回（四〇年）は軍部の監視下で行われ、日米開戦直前の四一年にはついに中止に追い込まれた。四七年に再開したが五五年には財政事情を背景に再び中断、新たなスタートを切ったのは六四年である。

私と会議のかかわりは慶応義塾大学三年のある日、父の廣治が募集用紙を持って来たのが始まりだった。父は第一回の会議に参加し、会議創設者の一人で十年ぶりの会議再開に尽力した板橋氏と友人だった。そんな縁で私は第十六回（六四年）と十七回（六五年）に参加。その後、三井物産で商社マン人生を歩んだ。

同窓会員に働きかけ、七十周年記念行事の準備を始めたのは昨年秋から。各地に散らばる同窓生への連絡は大変だったが、会議には不思議な求心力があるのか呼びかけは予想以上の反響を呼び、約八十人の同窓生と家族が日米各地からホノルルに集まった。

□□□

現役学生に交じり討論

記念式典ではベティ・ビトウセクさん（85）が米国側を代表してあいさつ。南カリフォルニア大学で開いた第六回に続いて津田塾大学での第七回にも参加した大先輩だ。日本側は第八、九回に参加した飯田和子さん（76）が高円宮妃殿下からのメッセージを代読した。

明るく「アロハ！」と登場したのはE・オーカワ・ハワイ日米協会会長。一八四八年に利尻島に漂着したR・マクドナルドが、名村五八郎（後に咸臨丸の遣米使節通訳）に英語を教えた史実に触れ、日米の歴史には様々な人々の貢献があったことを話してくれた。

ハワイ大学で、同窓生は現役の学生八十人に交じりテーマ別討論を楽しんだ。初対面でも年代を超えてすぐに打ち解けたのは、皆に会議を「ふるさと」と思う共通の気持ちがあるからだろう。会議は学生が一年かけて準備し、会議の終わりに次の実行委員を選出して引き継がれる。参加者には共通の遺伝子のようなものが生まれるのだ。

□□□

親子2代の友情

会議は宮沢喜一元首相に代表される多くの著名人を輩出、友情を橋渡ししてきた。しかしそれほど知られなくても貴重な友情がはぐくまれた例がある。第一、二回の会議に参加した韓国の元外相、金溶植氏と私の父との交流は時を超えて生き続けている。

父と中央大学で同窓だった金氏は戦後、韓国政府で外交官の道を歩み、その清廉さから韓国のどの政権でも一目置かれる存在だった。私は晩年の金氏に何度かお会いしたが、金氏は「お父さんと合宿してモーリス・ドップの本を輪読したんだ」と懐かしそうに話してくれた。あの時代に、二人はリベラルな考えを共有していたのだろう。九四年の韓国訪問時に「一度お父さんのお墓に参りたい」とつぶやくのを聞いた。それが別れだった。

今年に入り、米国に住むご子息S・W・キム氏の所在がわかった。キム氏は八月末に来日、我が家の古いアルバムにあった金氏の写真を差し上げた。大学対抗の英語弁論大会で優勝した金氏がトロフィーを持っている。キム氏の目は少し潤んでいた。そして二人で第一回の会議を開いた青山学院で写真を撮った。

今年の総合テーマは「今、再考の時―日米関係と私たちの使命」。サイコウといえば、日米関係は今が最高の時とも言われるが、米国の一国主義や日本の外交姿勢は閉塞感も感じさせる。そんな中での七十周年である。軍靴の音の近づく中、会議を創造した学生たちの勇気と情熱をあらためて思い出した。（やまもと・はるお＝三井物産ソルベント・コーティング顧問）

ハワイに集まった同窓生

交遊抄

師匠

子

私には人生における姉御と師匠がいる。姉御ことは樋口恵子さんとは一九七一年に岡山で開かれた婦人週間の大会で出会った。とてもパワフルで度量の大きな人。他人の意見を吸い上げてまとめるのが上手だが、おっれればいけない時があるのによ」と勇ましく語る姿は実に頼もしかった。

もう一人、私が師匠と呼ぶのは宝井琴桜さん。講談界では女性初の真打ちで、女性問題にも熱心に取り組んでいる。十五年前、男女共同参画を話し合うシンポジウムで一緒になり、以来私が講談には

『日本経済新聞』2004年9月9日

サンフランシスコサイト

サイトコーディネーター：安藤彩、Jill Kunishima、Leah Mullen

サンフランシスコサイトの概要

グローバル化という言葉が当然のように使用される現代。国境を越えた人の移動を止めることは、もはや不可能であると言えよう。そのような時代において、国家、個人、そしてそれらに存在するアイデンティティを一人ひとりが深く意識することは不可欠である。当サイトでの各種の企画を通し、サンフランシスコの土地のみならずアメリカ全土、また日本を含めた世界各国における移民受け入れ態勢の変遷、実情、将来の可能性、そしてその中におけるアイデンティティの位置付けについて、意識を深めるよい機会となった。

当サイトでは過去の日米学生会議に参加したOB/OGの方々の多大なご協力を得て、参加者全員がホームステイを経験することができた。各家庭からの心温まるもてなしを受け、心癒されるひとときを過ごすことができたことは、スケジュールがめまぐるしく進む会議日程の中において、日本を離れての集団生活という慣れない環境にいる日本側参加者にとっては特に嬉しいものであった。

ミルズカレッジにて開催されたパネルディスカッションでは、日系人がサンフランシスコの土地で辿ってきた歴史の概要や、現代における日系人のアイデンティティについての意見に触れ、また実際に日系人収容所にて生活をしていた方々をお迎えしてのディスカッションでは、当時の過酷な生活の実態について直接の声を聴くことができた。

道のあちらこちらにハート型のモニュメントが見られるサンフランシスコの街並みからは、移民受け入れや同性愛文化などに象徴されるマイノリティーへの理解を実感すると同時に、そこに暮らす人々一人ひとりの心の寛容さをひしひしと感じることができた。長い会議日程における2泊3日という、ほんのわずかな滞在期間ではあったが、他サイトとは一味も二味も異なる経験と議論をすることができた。

サンフランシスコサイトのスケジュール

8月2日	ハワイよりサンフランシスコ到着 パネルディスカッション 強制収容体験者の方々との 分科会#7、ホームステイ
8月3日	アジア美術館 エンジェルアイランドツアー
8月4日	ワシントンD.C.へ向けて移動

８月２日　パネルディスカッション、分科会#7、ホームステイ

ミルズカレッジの教授陣をパネリストに招き、日系アメリカ人を始めとしたアメリカにおける人種差別についてのパネルディスカッションを行った。また、戦時中実際に強制収容された日系アメリカ人の方々を囲み、その体験談をうかがった。「私はアメリカ人です」と言い切ったスピーカーと、「私は日本人でもアメリカ人でもありません」と言い切った日系アメリカ人の学生の対照が印象的であった。

ミルズカレッジでのスケジュールが終了した後、参加者はこれから２日間お世話になるホストファミリーと対面した。日本側とアメリカ側参加者１名ずつでペアを作り、ホームステイを行った。皆、ホストファミリーの心温まるおもてなしに感激していたようだった。

８月３日　アジア美術館、エンジェルアイランドツアー

サンフランシスコ市内にあるアジア美術館を訪れ、芸術を通じてアジア地域の文化を理解すると共に、アメリカにおけるアジア美術の展示方法を楽しんだ。

午後はサンフランシスコ湾に位置するエンジェルアイランドを訪れ、移民局を見学した。1900 年代初頭の移民排斥運動で、中国人を主とした多くの移民が合衆国本土入国を目前にこの島に収容された。移民らは、不安な気持ちや疎外感を表した漢詩を移民局の壁に刻んだという。それらは現在も残っており、アメリカ移民史の複雑さを象徴している。

かつての移民収容所の中で

参加者ノート　荒島由也

ホストファミリーが迎えに来てくれるのを待つ中、私は期待と不安の中にいた。普段は楽観的である私も今回はそうはいうわけにはいかなかった。というのも私のステイ先のファミリーはゲイカップルだと聞かされていたからである。抵抗は感じなかったがいくらか先入観をもっていたことは確かであった。しかしそんな不安も彼らと顔を合わせ、打ち解けていくうちにすぐに解消された。その日の晩、とても素敵な料理を振舞って下さり、とても話が弾んだ。中でも同姓愛についてオープンに話して下さったのにはとても驚き、感銘を受けた。彼らの価値観、生き方を聞いているうちに、正直今まで狭い価値観にとらわれていた自分が恥ずかしくなった。今までアメリカは何度も訪れたことはあったし、ホームステイもしたことはあったが、これだけ深く個人の価値観や人となりに触れたことはなかった。普段では絶対経験できないことをし、視野を広げられたことでホームステイは大成功であった。彼らとその愛犬にはとても感謝している。

参加者ノート　黒田佳代

私たちは、サンフランシスコにおいて、アメリカ側参加者と日本側参加者が一組になり、ホームステイをさせてもらった。

私がホームステイさせていただいた家庭は“ボートハウス”！！貴重なボートでの生活、そして優しいホストファミリーに恵まれ、楽しい時間を過ごすことができた。

ホストファミリーとの一番の思い出は、クルージングに連れて行ってもらったことだ。部屋中の物を収納し帆を張ると、生活していたボートが、セーリングに出かけるヨットに早変わり。ゴールデンゲートブリッジや、サンフランシスコの街並みを味わいながらのセーリングは、とても贅沢であり清々しかった。船に乗客として乗るのとは異なり、自分たちで実際に船を動かすという、貴重な経験だった。イキイキしながら船の運転をしているホストマザーの姿を見て、ボートハウスで生活する魅力に共感を覚えた。

たった2泊3日ではあったが、本当に貴重な体験をさせていただいた。多文化が共存するサンフランシスコの特別な一面を見ることできた。最後になったが、私たちを受け入れてくれたホストマザーに、心からの感謝の気持ちを記したいと思う。

参加者ノート　下斗米紀子

サンフランシスコサイトは、2泊3日という短期間の滞在となった。そのための移動時間が余計にかかり、サンフランシスコでのスケジュールも大変忙しいものとなったため、後々に会議参加者から必要性があったのかどうか、といった声が聞かれることとなった。しかし私個人の感想としては、このサイトがあってとてもよかったと振り返って思うのである。

サンフランシスコサイトのメインイベントは、現地の家庭へのホームステイであった。私はこれまで海外において短期と長期のものを含め、6回ほどホームステイを経験していた

が、常に思うことは、ホームステイは「楽しい」と「疲れる」が半々であるということだった。ただ言葉が通じないという壁があるだけでなく、やはり人様の家にお邪魔をして、彼らの生活に入り込んで数日過ごすということは簡単ではないのである。しかし今回のホームステイは、アメリカ側参加者から１名、心強いパートナーを得ることになった。彼女はホームステイ自体初めてだといって大変緊張をしていた。言葉において彼女が私を代弁するときもあれば、ホームステイにおける所作みたいなものを私が彼女に教えることもあった。それまで個人的に彼女とは言葉を交わしたことはなく、全体としてみてかなりおとなしいという印象であったが、このとき私たちはよくしゃべり、互いに楽しい時間を共有した。チャイナタウンに行ったり、ピラミッド型のビルを見たり、ケーブルカーに乗ったり、ホストファミリーは私達に典型的なサンフランシスコ観光を提供してくれた。私は今までにないくらい自然にホストファミリーとの時間を満喫できていることに少し驚いた。それもやはりアメリカ側のパートナーがいたことにかなり助けられていたのだろうと思う。

できればもう少し長くサンフランシスコにはとどまりたかった。あと１日くらいホームステイが長くてよかったし、もっとこの都市の特徴を知るイベントがあってもよかったのかもしれない、個人的には美しいミルズカレッジを散策したかった。それでもサンフランシスコというアメリカ有数の都市に滞在できたことは、アメリカという国の多様性を確認することでもあったし、アメリカが持つ計り知れないパワーを感じることでもあった。ハワイでも、ワシントン D.C.でも、ニューヨークでも知りえないアメリカの一面を、この都市は背負って世界にその名を知られているのだ。

アジア美術館前にて

ワシントンD.C.サイト

サイトコーディネーター：Jeff Hutchins、Kristine Tyson

ワシントンD.C.サイトの概要

ワシントン D.C.では、今までの日米関係の歴史を振り返るとともに、現在の関係を再考し、そしてその今後を考えること。そしてまた、市民がいかに政策決定、地域社会の形成に関わっていくことができるかを模索することを目的とした。

この地ではまず、大学教授やJASC Inc.理事長ウィリアム・クラークがパネリストとなり、日米関係に関するパネルディスカッションが行われた。また、国務省でのブリーフィングでは、外交の最前線に立つ方々から、アメリカの外交戦略、ODA、核を巡る問題など、多岐にわたるトピックについてお話をうかがった。一方で、日本大使館にも訪問し、そこで行われたレセプションでは、ワシントン D.C.在住の OB/OG の方々にも多数お集まりいただいた。さらに、Boys & Girls Club という施設を訪れ、清掃、草むしりなどの美化活動、そして壁画を描くなどのコミュニティーサービスを行った。

ワシントン D.C.での日程は、分科会単位で活動する時間が多く設けられたこともあり、各々の分科会は、その分野に通ずる市民団体、政府機関や公共施設、メディアへの訪問などを積極的に行うとともに、議論を掘り下げていった。この地で本会議の折り返しを迎えたが、あらゆる重要な施設が集中しているこの都市の特長を活かし、全体としての活動、そして分科会の活動に厚みをもたせることができた。

ワシントンD.C.サイトのスケジュール

8月4日	ワシントン D.C.到着
8月5日	サイトオリエンテーション
	集合写真撮影
	分科会#8
8月6日	パネルディスカッション
	スペシャルトピック#1
8月7日	ホワイトハウス訪問
	フィールドトリップ
	JRT、CWD#1
8月8日	サービスプロジェクト
	CWD#2
8月9日	国務省訪問
	第二次世界大戦記念碑見学

8月10日	分科会#10
	分科会#11
	日本大使館訪問
8月11日	終日自由時間
8月12日	プリンストンに向けて出発

8月5日　サイトオリエンテーション、集合写真、分科会#8

サイトオリエンテーションの後、地下鉄を利用してアメリカ連邦議会議事堂を訪れた。移動中小雨がぱらつくこともあったが、参加者たちは話に夢中で、交流を一層深めた。その後、議事堂前で集合写真の撮影が行われた。午後は分科会を行い、夕食後はフリータイム。皆ワシントンの夜を満喫した。

8月6日　パネルディスカッション、スペシャルトピック#1

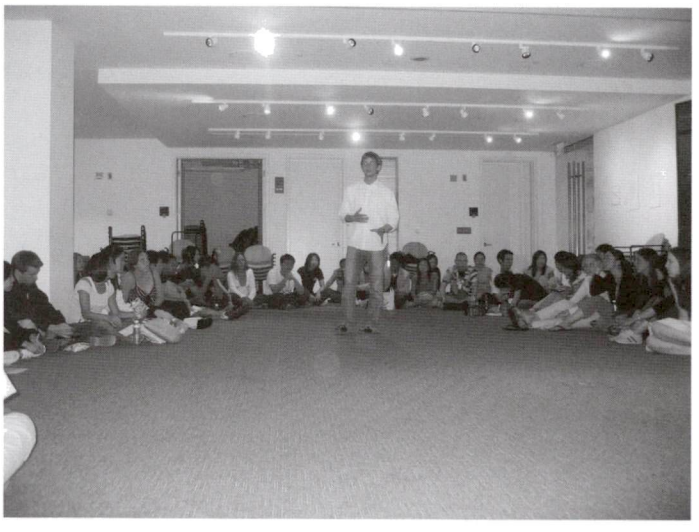
午前中は自由時間に当てられ、午後は「日米同盟を考える」と題したパネルディスカッションが行われた。日米同盟が専門のジョージ・ワシントン大学のマイク・モチヅキ教授ら4名からお話をうかがい、その後パネリストと日米学生会議のOB/OGを招いた交流会が開かれた。夕食後のスペシャルトピックの時間には、参加者が自由に提案したテーマに分かれて討論を行った。「イラク戦争」、「北朝鮮問題」、「靖国神社」、「EU拡大」などの政治、経済的なトピックから、「ジェノサイド」、「同性愛」、「若者文化」、「キリスト教と政治」、「日米の恋愛観」など、多岐にわたるトピックについて活発な意見交換を行った。

討論に熱中する参加者たち

８月７日　ホワイトハウス訪問、フィールドトリップ、JRT、CWD#1

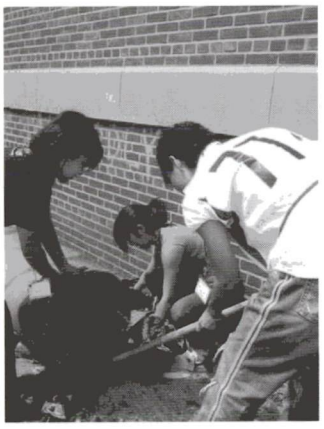
宿泊先から程近いホワイトハウスへ見学に行った。訪問者全員に身分証明書の携帯が義務付けられるなど、警戒が厳重だった。その後のフィールドトリップでは、スミソニアン博物館、美術館などの選択肢の中から、各自希望する所へ見学に行った。その後行われたジョイントラウンドテーブルでは、8 つの分科会から一人ずつ集まり、各自が所属する分科会のこれまでの成果や今後の方向性を報告し合った。続いての CWD では、会議が進行する中で各自が感じる不安やフラストレーション、会議の問題点などを皆の前で伝える機会となった。参加者全員にとってよりよい会議にしていくためにも、この全体討論の場で各自の思いを皆で共有できたことは、非常に有意義であった。

各分科会の進行状況を報告し合う JRT



これまでの活動を振り返り、皆の前で述べる CWD

8月8日　サービスプロジェクト、CWD#2

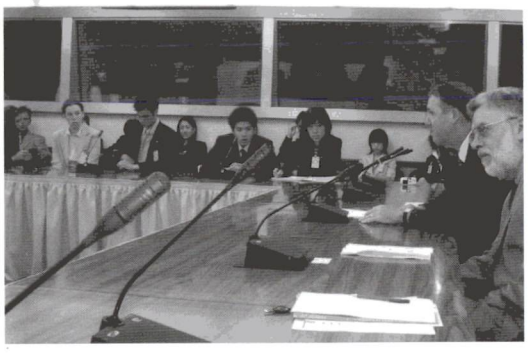


午前と午後を通して、Boys & Girls Club という施設にてサービスプロジェクト（ボランティア活動）を行った。Boys & Girls Club は、ワシントン D.C.の警察が運営する、地域の青少年を周囲の犯罪から守り、スポーツ、ボランティア活動などを通じて彼らの健全な成長を目指す施設である。参加者は半分に分かれ、体育館の外壁に絵を描いたり、草むしり、ごみ拾いなどの美化活動を行ったりした。そのような施設においてボランティア活動を行うことで、そのような活動の意味を考えることに加え、Boys & Girls Club のような施設が社会に果たしている意義や役割を考えることにもつながった。

夜の CWD では、アメリカの学生と日本の学生がペアになり、茶道、華道、書道など、日本文化のレクチャーを受けた。実際に抹茶をいただいたり、小さな器に花を生けたりして、日本の文化に触れた。

8月9日　国務省訪問、第二次世界大戦記念碑見学

午前中に訪れた米国国務省では、日米間の政治、経済、ODA や核の問題まで多くの方々から、様々なお話をうかがうことができた。質疑応答の時間が多くとられ、学生の積極的な参加が見られた。午後は全員で第二次世界大戦記念碑（World War Ⅱ Memorial）を訪れ、自由に見学をした後に、互いの感想、意見の交換を行った。夜には分科会が行われた。



国務省でのブリーフィング

World War Ⅱ　Memorial

8月10日　分科会#10、分科会#11、日本大使館訪問

この日は午前、午後とも分科会が続き、かなりの体力を消耗した。午前中の分科会では、分科会の成果を発表する、フォーラムについての話し合いを始めたグループもあったようだ。午後の分科会を16時頃に終えて、夕方からは日本大使館を訪問した。日本大使館では久しぶりの日本料理に舌鼓を打ち、レセプションに参加していた若い外交官の方や、日米学生会議のOB/OGの方々から色々なお話をうかがった。翌日は終日自由時間ということもあって、多くの参加者は夜遅くまで語り合った。

日本大使館前にて

テラスにて会食

参加者ノート　海野慧

第 56 回日米学生会議に参加して最も印象に残ったのは、ワシントン D.C.サイトでの World WarⅡ Memorial を見学した後の意見交換である。私は、そのメモリアルを注意深く見てみたときに、そのメモリアルから一種のプロパガンダのようなものを感じた。それは、「真珠湾攻撃の苦しみを乗り越えなければならない」と強調するルーズベルト大統領の言葉が刻まれていたり、「我々は勝利を収めた」と表す言葉が刻まれていたりしたことなど、様々な理由からそう感じたのである。そんな私の思いをリフレクションで発表すると、アメリカ側参加者の中には同様にプロパガンダを感じた人もおり、それが印象的だった。しかし、それ以上に私にとって大きな衝撃を与えた意見があった。それが、アメリカ側参加者の、「メモリアルに対して愛国心を感じる」という意見であった。彼は、「このメモリアルは現実にあったことを記している記念碑に過ぎない」と言い、プロパガンダというのは憶測が入っていると強く語った。

その時、私の中で大変に新鮮なものを感じた。可能性として予想できる範囲の答えであり、驚くべきものではないように思われるかもしれないが、私は我々がそれぞれ別の国家で、環境で、わずか 20 余年ではあるが、生きてきた違いがここに表れているように感じた。これらの考え方の違いを共有することが、大変素晴らしいことであると実感した。そのような機会を得られて良かったと思う。

参加者ノート　坪田裕美子

5 時間に及ぶ大陸横断フライトを終えて、東海岸ワシントン D.C.に到着。その翌朝から、毎日が「フル回転」し始めた。昼間は分科会にフィールドトリップ、そしてパネルディスカッション。これだけでもヘトヘトなのに、夜の自由時間になると街へ繰り出す。一体みんなどこからこんなエネルギーが生まれてくるのだろう。それは「1 ヵ月間という短い時間の中で、みんなとできるだけ多くの経験をしたい」という、参加者の貪欲な姿勢からくるものだったのかもしれない。

D.C.サイトでメインとなったのは、ディスカッションであった。日米学生会議の一員としてこの地を訪れたのは、「皆で語るため」といっても過言ではないと思う。どのサイトよりも多く設けられた分科会の時間。有志により進められたスペシャルトピック。World War Ⅱ Memorial 見学後の意見交換･･･他にも、自由時間を使って議論したこともあった。

その中でも記憶に残っているのが、8 月 7 日に行われた全体リフレクションだった。本会議も残すところあと半分という時に、これまでを振り返るために行ったリフレクション。ここでは、今まで皆の前で伝えることのできなかった感謝の気持ち、フラストレーション、新たな提案などが次々と出された。言葉ではうまく表せないが、それは個人個人のストレートな感情を 79 人で共有した場であり、79 人の心が一つになったと実感できる場であった。

その時の光景を思い出すと、今でも涙が出そうになる。本会議が始まった時の感動を思い出し、第 56 回日米学生会議が後半戦に向けてスタートしたあの日のあの出来事を、私は決して忘れないと思う。

参加者ノート　三谷佳孝

「あれが、ウォーターゲート事件で有名なウォーターゲートホテルです。」

ジョージ・ワシントン大学の寮に着き、バスの中でワシントンD.C.に滞在経験のある日本側実行委員長が言った。アメリカの歴史を変えた事件が起こったホテルが寮の目の前にあるということを聞き、とうとう首都ワシントン D.C.に来たということを実感した。オリエンテーション的な要素を含むハワイサイトや、楽しいホームステイを体験したサンフランシスコサイトを終え、気がつけば会議を半分終えていた。今までの日程を振り返り、各参加者がこの会議を見つめ直すことになったワシントン D.C.では、参加者の想いが揺れ動くことになった。

ワシントンD.C.滞在4日目の夜、参加者79人が一堂に集まりそれぞれの個人的な想い、会議に対する想いを発表する場が与えられ、何人かの参加者が、これまでに感じてきた不安や苦悩を打ち明けた。中には「なぜ、自分が今ここにいるのか」と問う者がいたり、日米学生会議の意味を根本的に問い直す者もいた。少なからず日本側参加者は、これまでかなりストレスが溜まっていたはずだ。英語によるコミュニケーションの難しさ、アメリカ人との共同生活の難しさといった、ある程度予想された問題だけではなく、皆が愚痴をこぼした、毎日単調に繰り返されるサンドウィッチだけの昼食に始まる文化の違い、会議中の時間のルーズさや繰り返されるレセプションなど、会議の進行に関わることは、確実に我々の精神面に打撃を与え続けていたのだろう。ここで、皆の気持ちを共有し参加者全員の相互理解を深められたことは、この後の会議の進行に非常に重要であった。

また、ワシントン D.C.ではホワイトハウス、国会議事堂や国務省など、このサイトにふさわしい場所を訪問し、東京とは全く違うアメリカの首都の雰囲気を味わった。フィールドトリップでは、スミソニアン博物館やアーリントン墓地を訪れた。中には、動物園に行った者もおり、各自ワシントンでの時間を楽しんだようだ。また、宿泊先のジョージ・ワシントン大学は立地が良かったので、夜の自由時間を利用して様々なモニュメントを見に出かけた者も多くいた。このサイトではサービスプロジェクトも行い、学校を訪れ奉仕活動をすることにより、今回の会議のテーマである市民参加を体験した。

ワシントン D.C.では、日本大使館でのレセプションも催され、参加者一同は緊張しながら政府関係者や過去の日米学生会議参加者の方、ワシントンに在住されている日本人の方などとの交流を楽しんだ。大使館では日本食が振る舞われ、日本側参加者は、久しぶりに味わう故郷の料理に満足し、アメリカ側の参加者も普段は食べる機会の少ない日本料理を楽しんでいたようであった。

サービスプロジェクトの様子

壁画の完成に向けて

サービスプロジェクトで完成した壁画

プリンストンサイト

サイトコーディネーター：原奈央、Aziza Zakhidova

プリンストンサイトの概要

当サイトではまず、プリンストン大学において、同大学教授陣によるパネルディスカッションを行った。今後のアジアにおける地域統合の可能性、経済的な結びつきの強まりとそれに伴う金融体制、通貨政策のあり方など、アジア地域における新たな動きを考察する機会となった。ニューヨークへのフィールドトリップでは、UNICEF、模擬国連、そして国連日本使節団によるブリーフィングを受け、活発な意見交換を行った。また、当地は本会議の最後のサイトであることから、これまでの活動を振り返りまとめること、そして各分科会の成果をまとめ発表することを目的に、プリンストン大学にてフォーラムを開催した。会議の 1 ヵ月間を振り返るとともに、我々日米の学生がその中で築いてきたもの―相互理解・友情―を感じ取ることとなった。

最後に、来夏に行われる第 57 回日米学生会議の実行委員選挙を行い、参加者全員が一体となって、候補者の中から日米各 8 名、計 16 名の新実行委員を選出した。

本会議終了を目の前にして、多くの参加者はニューヨークへ出かけ、最後の交流を楽しんだ。また、スポーツをしてともに汗を流したり、夜遅くまで語り合ったりするなど、本会議の終了、すなわち別れの時までの時間を、各自思い思いに過ごしていた。

クロージングセレモニーを終え、1 ヵ月弱にわたった第 56 回会議は終わりを告げた。アメリカ側参加者との別れを惜しみつつも、日本側参加者は帰国の途についた。

プリンストンサイトのスケジュール

8 月 12 日	プリンストン到着
	サイトオリエンテーション
	レセプションパーティー
8 月 13 日	UNICEF 訪問
	模擬国連ツアー
	分科会#12
	国連日本使節団訪問
8 月 14 日	分科会#13
	講演会
	分科会#14
8 月 15 日	フォーラム
8 月 16 日	フィールドトリップ
	ニューヨーク散策

8月17日	分科会#15
	第57回日米学生会議実行委員選挙
8月19日	閉会式
8月20日	日本側参加者帰国
	アメリカ側参加者解散

8月12日　サイトオリンテーション、レセプションパーティー

最後のサイト地プリンストンに到着した。実行委員からプリンストンでの日程や注意事項、フォーラムの説明を受けた後、プリンストン大学の学生によるキャンパスツアーが行われた。ツアー後には、プリンストン大学の先生方や関係者、会議のOB/OGを招き、レセプションパーティーが行われた。多くの参加者が、今までの会議を振り返っての感想や、最後のサイトへの期待と抱負についてスピーチを行い、会場は大いに盛り上がった。

8月13日　UNICEF、模擬国連、分科会#12、国連日本使節団訪問

バスに乗って、ニューヨークへフィールドトリップに出掛けた。午前中は2つのグループに分かれて、順番にUNICEF、模擬国連を見学し説明を受けた。午後は、国連日本政府代表部にてお話をうかがった。ODAやイラク復興支援のパンフレットをもとに日本の外交方針を説明していただいた後、質問の時間が設けられた。参加者からODAに関する質問が多くなされ、活発な意見交換の場となった。

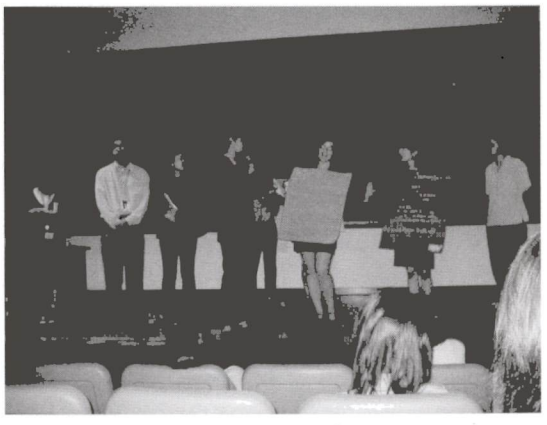
8月14日　分科会#13、講演会、分科会#14

「アジアにおける新たな地域主義」と題した講演会が行われた。東アジアにおける金融政策のあるべき姿について、東アジア地域統合の可能性についてなど、現在大きな話題となっている内容であった。森信教授からはアジアにおける今後の通貨政策についての講義を、Davis 教授からは東アジア統合の可能性について自由貿易の観点からの講義を、そしてRozman 教授からは、東アジア統合における政治的問題を取り上げた講義が行われた。午前と午後に行われた分科会は、翌日のフォーラムに向けた準備が中心となった。

8月15日　フォーラム

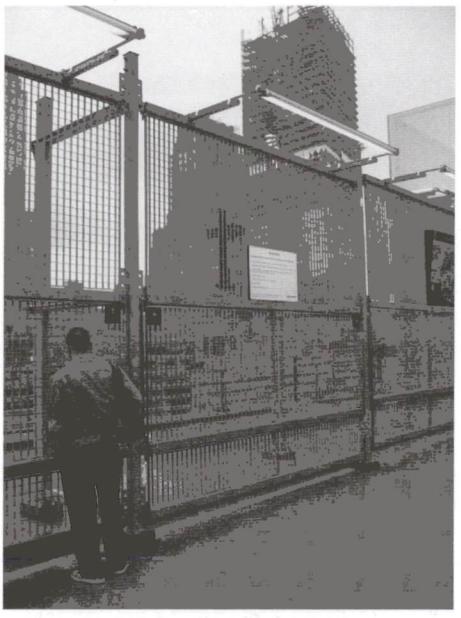
フォーラムは、実行委員と参加者から構成されたスタッフによって企画、運営がなされた。当日は、各分科会の発表を中心に行い、発表の合間には有志によるスピーチも行われた。

各分科会ともそれぞれの色を出し、この１ヵ月の成果を報告するとともに、会議を通して培った友情、相互理解を再認識する場となった。



8月16日　フィールドトリップ、ニューヨーク散策

早朝、激しい雨の中、2台のバスに分乗しニューヨークへ向かった。片方のグループはグラウンドゼロを訪れた後、ウォール街周辺をガイドに引率されつつ見学し、もう一方のグループは、かつて移民が住んでいたアパート、いわゆるテネメント（Tenement Housing）を見学した。その後は、国連ツアーに参加したり、ジャズクラブに行ったり、ショッピングをしたりと、各々少人数のグループに分かれニューヨークでの散策を楽しんだ。



グラウンドゼロを目の前にたたずむ参加者

8月17日　分科会#15、新実行委員選挙

午前中には最後の分科会が行われ、全体を通しての感想や分科会としての総括を行った。午後からは、来夏に日本で開催される第57回日米学生会議の実行委員選挙が行われた。この第56回会議を振り返り、評価や批判を行いつつも、次の会議を創り上げたいという強い希望と熱意をもった参加者たちが立候補した。各候補者のスピーチ後、長時間にわたる質疑応答の時間が設けられた。夜中まで緊迫した空気の中、参加者全員の投票により、日米各8名、計16名の新実行委員を選出した。

参加者の質問に耳を傾ける立候補者

8月18日　新実行委員ミーティング

新実行委員は、残された2日間という短い期間の中で、第57回会議の土台となる総合テーマや開催地、分科会について議論を行い、第57回会議の構想を練ることとなった。こうして形作られた第57回会議の枠組みは、"Princeton Agreement"としてまとめられ、第57回会議は来夏へ向けて動き出した。

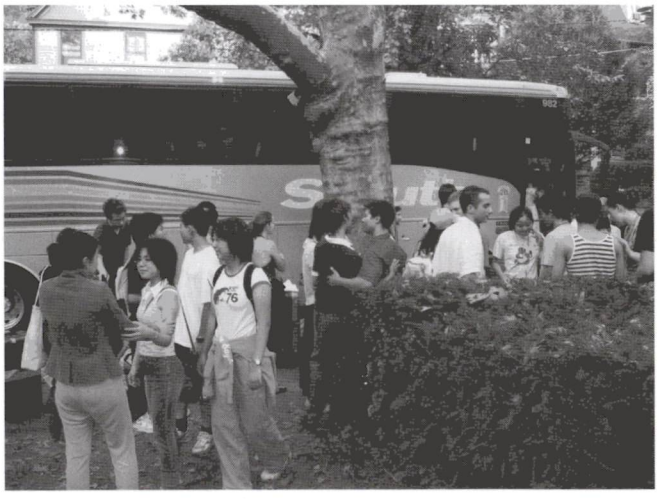
8月19日　閉会式

閉会式では新しく発足する第57回日米学生会議の実行委員と、"Princeton Agreement"としてまとめられた、第57回会議の概要が発表された。その後、新旧の実行委員長によるスピーチがあり、それぞれに感想や抱負を語った。

旅中の思い出の曲にのせて、本会議中に撮った写真が数多くスライドショーで上映され、歓声、笑い声の中、参加者はともに過ごしたこの1ヵ月を振り返った。

8月20日　日本側参加者帰国、アメリカ側参加者解散

プリンストン大学でアメリカ側参加者との別れがやってきた。荷物を寮からバス乗り場までともに運び、友情を確かめ合った。お互い抱きしめ合ったり、握手をしたりする中で涙ぐむ者もいた。別れを惜しみ、再会を約束しつつ、日本側参加者は空港へ向かうバスに乗り込み、帰国の途についた。



参加者ノート　福田愛奈

私たちにとって会議最後の夜は、一体何であったのか。いかなる字句であっても書き記すことはできないであろう。それでも、人生で最も多く写真を撮った数時間であったのではないか、とは言える。その理由は幾つか考えられる。閉会式で気持ちが高揚した勢いで、1ヵ月間あまり話せなかった人に話しかけに行って撮り、閉会式で読み上げられた全員の名前を聞いて話し足りない人を思い出して一緒に撮り、会議に熱中するあまりに、写真をあまり撮っていないことに気づき焦って撮り、会議当初と顔つきや髪の長さを比較するために撮り、日常だった仲間や風景をいつまでも忘れないように撮り、また日米学生会議の最後の夜のその瞬間を生きた証にするために撮っていたのかもしれない。

数日前から、一人ひとりに宛てた手紙や連絡先を記したメモや名刺を入れるため、紙袋の「ポスト」が79個設置されていた。計画性のない私たちの多くは、最終日の夜を少なからずこの手紙の執筆にあてた。本当に仲良くなった友に限らず、会議中に仲違いしてしまった友、素直に気持ちを伝えることができなかった友、もっと話をしたかった友に宛てて、皆思い思いに手紙を書いた。それも各自の部屋で静かに書くのではなく、大勢で狭い机を囲んで黙々と書くという異様な光景であった。私も可能な限り皆と一緒にいたかったので、最後の夜だけは部屋に帰らなかった。子どもの頃、クリスマスイブには寝れば早くサンタさんが来る、と言われた。同じ原理であろうか、その夜どう見ても眠そうなのに起きていた多くの学生は、起きていれば別れを意味する朝が来ないと考えたのかもしれない。話し疲れ、空腹に襲われた私は、外のベンチでアメリカ側参加者が買って来てくれたアメリカ製カップラーメンを、フォークで朝4時頃に食べた。彼女たちとの会話の中で、不思議と次の日の朝については誰もが避けるようにして触れなかった。「次はいつアメリカに来るのか」「日本に遊びに来るのはいつか」「次いつ会おうか」といった話を繰り返していた気もするが、眠気でボーっとしていたのか、話の内容については残念ながらあまり覚えていない。

後日談ではあるが、最後の夜皆はどこにいて何をしていたのか、との問いに、ある友人は「ある者は外のベンチで語り、ある者は飲み踊り、ある者は部屋で最後の夜を惜しみ、ある者は人を探して力尽きていた」と答えた。誰もが最後の夜を精一杯楽しみ、悔いのないように（力尽きてしまっては悔いが残るかもしれない）各々の過ごし方をしていたのである。会議が始まった頃、これほど別れの時が早く訪れ、またその時がこれほど名残惜しいと想像できた者はいないであろう。1ヵ月間毎朝9時には、眠くても嫌でも顔を合わせてきた78人の仲間に「おはよう」と言えるのは、この夜が明けた朝が最後になるのだ。振り返れば霞みの中を駆け抜けた1ヵ月でもあり、また思い起こせば色々あった1ヵ月でもある。寝なかったにもかかわらず、最後の朝は訪れた。泣き、抱き合い、再会を約束し、笑い、手を降り、別れた。これ以上は割愛する。

参加者ノート　山田悠花子

“ I'm frustrated with...”

これは私がプリンストンで「生」の言葉として覚えたフレーズ。最後のサイト、プリンストン。第56回日米学生会議の集大成がここで行われた。少し強引ながら、“be frustrated with”を通じて、プリンストンサイトを振り返ってみようと思う。

I'm frustrated with my memory.

映画『Beautiful Mind』の舞台として、日本でも馴染みのあるプリンストン大学。映画を観たことがあったのに、その場面を思い出せない。帰国してからすぐにこの映画を何度か見直して、プリンストンへの親しみや懐かしさを感じていた。初めてここに足を踏み入れた時、ここは大学というよりも、ある小さな街といった印象を受けた。キャンパスのあらゆるところが貫禄を醸し出していた。「ここで勉強したら、ひょっとして私も将来ノーベル賞を受賞できるかも」と甚だしい勘違いを簡単にしてしまいそうな雰囲気。キャンパスセンターには、ずらりと並ぶプリンストングッズ。ここには靴下から下着から、何から何まで揃っている。もちろんすべてプリンストンのロゴ入り。それらを買いに訪れるたくさんの人々、慣れた様子でキャンパスツアーをするプリンストンの学生。さすがプリンストン、である。ここが最後のサイトであることにとても興奮していた。

I'm frustrated with the huge campus.

プリンストン大学では、素晴らしいキャンパスを守るために、多くの人たちが働いている。キャンパスの中に相当数の警備員が常に巡回していることには驚いた。安全といえば安全かもしれないが、それだけ「何か」が起きる可能性があるというのはやはり気分のいいものではない。プリンストン滞在初日。銃を持っている人がいるという通報があり、一瞬のうちに警備員が集まりキャンパス内に緊張が走る。結局、銃に見えたものは傘であったというだけのことであったが、治安の不安定さを感じた事件であった。また、広いキャンパスで迷子になるのは簡単なこと。ただでさえ方向音痴な私は、気軽に外に出歩けない。案の定、夜中キャンパス内で迷子になり、数時間迷いあぐねた末、警備員の車で寮まで送ってもらった、という参加者もいたほど。

I'm frustrated with something.

特に何かに対して、というわけではないが、参加者同士、お互いのことをそれなりに知り始め、慣れ始めてきた頃。大きな衝突はなかったけれども、色々なところで何らかのフラストレーションをそれぞれが感じていたように思う。例えばプリンストンでは、大学からニューヨークまで電車に乗って1時間30分。ニューヨークに慣れておらず、右も左もわからない日本側参加者らは、基本的にアメリカ側参加者とともに行動することが望ましいとされた。危機管理の面を考えれば当然。しかし、ここに集団行動の難しさが出た。日本側参加者が行きたい所と、アメリカ側参加者が行きたい所が必ずしも一致するとは限らな

い。アメリカ側参加者が行きたくない所に、日本側参加者は行くことが困難である。交渉開始。フラストレーションが溜まる。また、アメリカ側参加者の中でも、せっかくプログラムを用意したのに、日本側参加者は参加しない、と困惑していたメンバーもいた。互いにフラストレーションは溜まる。上辺だけで付き合っていくのは無理なほど、一緒に時間を共有している間柄なゆえの感情。ある意味で、日米学生会議の醍醐味がここにあった。

I'm frustrated with the closing of the conference.

会議最終日が近づくにつれ、メンバーの中にはいつもとは違う空気が流れ始めた。I miss you を連発する人、スキンシップ狂になる人、ただひたすらにメッセージカードを書く人、会議後の生活を心配し始める人、会議が終わるということを忘れようとするかのようにはしゃぎまくる人、etc。新たに第 57 回会議の実行委員が決まり、来年の会議に向けて動き出している一方で、今年の会議が終わろうとしている。何とも奇妙な雰囲気に包まれた。一つのものが終わりを迎え、新たなものが生まれ出た地として、プリンストンは忘れられない場所となった。

第４章

本会議――分科会活動

教育

グローバル経済システム

国際政治と日米

アイデンティティと市民活動

南北問題

メディア倫理

社会と科学技術

社会問題と制度

教育

Contemporary Problems in Public Education

分科会メンバー

大宮貴史*　（慶應義塾大学総合政策学部）
尾形樹穂菜　（青山学院大学文学部心理学科）
島裕貴　（立命館大学文学部哲学科）
出浦寛子　（慶應義塾大学法学部法律学科）
寺崎テレサ　（早稲田大学国際教養学部）
TaNaya Birch　(University of Wisconsin-Madison)
Christopher Chhim　(University of Chicago)
Carolyn Cross　(Princeton University)
Shannon Foreman　(Smith College)
Tiffany Hirata*　(University of Washington)

（*はコーディネーターを示す）

分科会設置の目的

絶えず変化する世の中において、教育はよりよい社会を形成していく上で必要な人材を育成するための投資と言える。今日、日米両国の教育に対する関心度はかつてないほど高まっている。日本では詰め込み型の学習を是正し、創造性や国際性が備わった人材を育てるための取り組みがなされている。また、教育現場である学校は、学級崩壊や学力低下が叫ばれる中、総合的学習などによって、学校だけでなく地域社会との連携も行おうとしている。一方の米国では、教育を受ける上の不平等や、多種多様な民族が生活をする中での学校における多文化教育、そして身体障害者の教育など、特別ニーズ教育の見直しが行われている。

当分科会では歴史教育、高等教育、特殊教育など、両国の教育に共通する問題を比較していくことにより、未来の教育のあり方を考えることを目的とした。

活動内容

1. 事前勉強

1.1. 東京朝鮮中高級学校

6月21日、東京十条にある東京朝鮮中高級学校を訪問した。教職員同分会長である権氏が迎えてくださり、いろいろなお話をうかがった。日本の文部科学省は、朝鮮学校などのいわゆるアジア系民族学校卒業者に、国公立大学への受験資格を認めていないため、卒業後に大検を受けざるを得ない生徒がいる現状や、社会的差別を回避するために名前を変える在日コリアンが多いことなど、在日コリアンや日本社会が抱える深刻な問題について言及された。

1.2. （株）公文教育研究会

7月21日、東京市ヶ谷にある公文教育研究会の本社を訪問した。東京広報デスクのチーフである山﨑氏に公文の方針や教育方法、沿革や将来について話していただいた。公文はいわゆる「塾」でありながら、一般的な塾とは違って地域との関わりを大事にし、教員の人間性や包容力を重視している。また、生徒一人ひとりが安心して学べるよう、教材を細かいレベルに分け、生徒が自分のペースに合わせて着実に成長できるよう、工夫している。"Kumon"が世界各国に進出しているということも知ることができた。

2. 講演

2.1. ASSETS 特殊学校

ホノルルにあるASSETS Schoolは、ハワイで唯一、言語障害（dyslexia）を持つ子どもや、いわゆる才能のある子どもを受け入れる特殊学校である。科学分科会とともにこの学校で指導していらっしゃる方にお話をうかがった。本校では、言語障害を障害とは考えず、生徒の学び方に合わせて環境を柔軟に変えることを目指している。"Different learners require different teaching"という言葉でわかるように、生徒は一人ひとりユニークな学習指導を要するのであり、それを提供するのが先生の役目と考えているそうだ。ASSETSでは視覚、聴覚、触覚を刺激することによって生徒の学習促進を図っている。また、週に数回カウンセリングの時間を設けて、生徒の学習面および社会面での成長を見守っている。

2.2. James Kawika Riley 氏

Northern Colorado大学に在学中のRiley氏は、大学を受験する時、ポリネシア人（Pacific-Islander）であるにもかかわらず大学側から「アジア人」とみなされた。ポリネシア人はアジア人とは明らかに異なり、独自の文化を持つと信じたRiley氏は、大学側の行為は不公平と考え、大学、さらにはアメリカの教育省に、アジア人とは別に"Pacific-Islander"のカテゴリーを設置することを要請し、制度化することに成功した。Riley氏は、無知が誤りの原因である（Ignorance as cause of mistake）ということを強調された。

3. 本会議分科会

3.1. ケーススタディー

ディスカッションを始める前にお互いの受けてきた教育を知ることは有意義と考え、我々は初めの数回のセッションで、各自の教育歴をパワーポイントで発表することにした。それぞれ、自分の通った学校が公立か私立か、クラスの規模はどれぐらいか、授業科目は何か、などの基本的な事実を発表した後、自由な雰囲気で質疑応答が行われた。アメリカ側の教育で特に興味深かったのは Charter Schools と Gifted Education である。チャータースクールとは、公立学校でありながら、政府にあまり拘束されずに独自の教育を進めていける学校で、日本でいう実験校や専門学校を連想させた。Gifted Education とは、公立学校で他の生徒より gifted、つまり優れた才能を持つと判断される生徒が受ける特別教育のことで、多くの場合、彼らは通常の授業の他に、週に何回か gifted の生徒だけが集まる学校へ通い、高等な教育を受けるそうだ。

日本の教育でアメリカ側が特に興味を示したのは、我々の受験制度とそれに伴う塾の存在、そしてエスカレーター方式の教育だった。受験制度では、アメリカの大学は各生徒の高校での学業と課外活動における活躍ぶりを評価するのに比べ、日本の大学はセンター試験や各大学の試験など筆記試験重視で試験を行う。また日本では塾（cram school）に通うのが当たり前で、場合によっては 1、2 歳から通い始める子もいる。日本の小学校から大学までほぼ自動的に上がれるエスカレーター式の教育にもアメリカ側参加者は驚いていた。

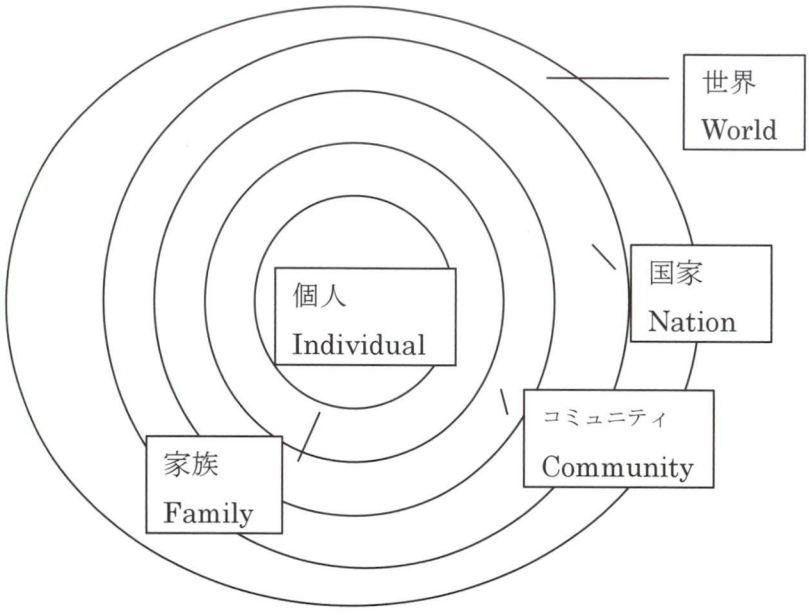
3.2. 論文発表

一人ひとりが準備してきた論文を発表し、一つの発表が終わるごとにディスカッションが行われた。アメリカ側のペーパーの討論内容は、ブッシュ政権が推進した No Child Left Behind Act（NCLBA）という法律からバイリンガル教育のあり方や、多文化・他文化教育にいたるまで様々であった。No Child Left Behind Act は、今日アメリカで一番議論されている教育トピックであるだけに、我々の討論も熱く繰り広げられた。NCLBA の下で公立学校はそれぞれアカウンタビリティーの確保のため、生徒の統一試験の結果を人種別・所得別に細かく統計し、保護者や政府に公開することを義務付けられている。学校が一定の基準を満たさない場合、保護者は子どもを別の学校に移すなりして、より高い水準の教育を受けさせる権利を有するらしい。

日本側のペーパーの討論内容は、哲学教育、障害者教育、企業家教育などだった。中でも深く議論したのは、哲学教育についてだ。日本の学校のカリスマ先生と小学生たちの一年を捉えたドキュメンタリーを観て、日本の先生の団結力を重要視するところや、生徒同士が協調し合って友情を深める姿に圧倒された。また、最近日本で社会現象とまでなっている「ひきこもり」についてのドキュメンタリーを観て、何が彼らをそうさせるのか、また教育によってそれは変えられるのかを考察した。

4. フォーラム

１ヵ月を通して学んだ日米の教育の様々な要素や違いを、一つのテーマを軸にまとめることにした。結果、一つのモデルができ上がった。



このモデルは、個人と、個人を取り巻く共同体の関係を表しており、家族、コミュニティ、国家、世界が連帯して初めてバランスの取れた教育が実現できることを示している。

総括

当分科会は、日米の教育の根本的な違いや、教育によって引き起こされる諸問題を見つめて、その原因や解決策について議論してきた。初めのうちは純粋にお互いの教育の違いにショックを受けていたが、議論を重ねていくにつれ、両国の教育問題の本質がうかがえるようになった。結論として、両国の教育内容や教育方式は全く異なり、それぞれの抱える問題も全く違うが、両国とも社会との連帯や協力体制をより深める必要がある点でコンセンサスが得られた。今、子どもたちに求めるべきものは単なる学力や成績ではなく、自分を取り巻く社会・世界に対して包括的な視点を持ち合わせた、バランスの取れた個人なのである。

それを実現するためには、先生が生徒に知識を“spoon-feed”、つまり一方的に与える現状を変え、生徒が自分から知識を求め、生徒自らが教育の「コンシューマー」になる必要がある。具体的方策としては、哲学教育、宗教教育、障害者のためのユニバーサルミュージックやコミュニティ・サービスの充実化が挙げられる。

我々は１ヵ月間お互いの教育制度を勉強することによって他者の教育について学ぶことができたと同時に、自らの教育を見つめ直すこともできた。それまで当たり前と思っていた自国の教育が一転して不合理に思えたり、逆に自国の教育に感心することもあった。この１ヵ月の経験は、我々が今後の教育について考える上で非常に示唆に富むものになった。

グローバル経済システム

Global Economic Systems

分科会メンバー

荒島由也　（慶應義塾大学法学部政治学科）
海野慧　（立命館大学国際関係学部）
中村恵理　（東京大学公共政策大学院国際公共政策コース）
白雲　（早稲田大学大学院アジア太平洋研究科国際関係学専攻）
Jeff Hutchins*　（上智大学比較文化学部）
Chieh-Ting Chen　（University of North Carolina at Chapel Hill）
Morris Cornell-Morgan　（Earlham College）
Anna Franekova　（Harvard University）
Elspeth Spransy　（Eckerd College）
Aziza Zakhidova *（University of Pennsylvania）
（*はコーディネーターを示す）

分科会設置の目的

日本と米国は、自動車、半導体を巡る経済摩擦など、時には衝突しながらも経済的に良きパートナーとして現在に至るまで共栄してきた。その強固なパートナーシップが両国の成長に与えた影響は計り知れない。しかし近年、日本経済は長期の不況に陥る一方で、中国、ASEAN などの新たな経済市場の成長は目覚ましく、日米の経済は新たな局面を迎えている。また、WTO などの国際機関が目指している市場の自由化や、AFTA、NAFTA など各地域での域内貿易、さらにアジアでも顕著になった二国間レベルの自由貿易協定の締結など、今日の重層的な経済の枠組みが築かれている。しかし、そのような枠組みの中で、米国が鉄鋼セーフガードを発動するなど、各国の利害が一致しない場合もみられ、それは

今後の課題といえよう。

当分科会では、このような自由貿易体制の大きな転換期において、日米両国が歩み寄ることのできる国際経済システムとはどのようなものなのかを模索した。また日米両国は現代の国際経済システムにおいてどのようにあるべきなのか、つまり、これまで世界経済を牽引してきた経験を踏まえ、直接投資を含め、日米両国がどのような役割を国際社会において果たさなければならないか、どのような行動が求められるのかを模索する。さらには、このように日米間の経済関係に留まることなく、世界経済の諸問題や現代世界におけるグローバルな経済構造に着目し、それらの問題点の解決方法を模索していった。

ここで、我々分科会のメンバーが考えたソフト面と言える目的も記したい。それは、お互いがもっているグローバルな経済構造への問題意識や興味、関心、知識の共有と、これらの共有により、更なるメンバー間での相互理解を図ることである。日本人同士でさえも1ヵ月という期間だけではなかなかお互いを知り、信頼を醸成することは困難であるが、ましてや日米それぞれの学生間になれば、これはより一層困難であると考えられる。この困難を言語の壁を越えていかに克服するかは、分科会内で十分に大きな目的となった。

活動内容

活動内容としては、分科会内のディスカッション、フィールドドリップを中心に行われた。ここでは主に、この二つの中でどのような活動を具体的に分科会として行ったのかを記していきたい。

1. 分科会内の主なディスカッションテーマ

1.1. 日本のバブル景気について

日本においてバブル経済はいかにして起きたのか、その構造と原因を探った。日本において代表的な経済事象といえるこの問題の原因を、日米両国学生の視点から模索した。

1.2. アメリカの日本への直接投資

現在、アメリカから日本への海外直接投資が過去に比べて増大してきている。その直接投資が日本にもたらす経済的影響と効果、さらには世界にもたらす影響や効果について模索した。

1.3. 現代多国籍企業の構造

前述した1.2.の直接投資の話題から始まり、世界各国に展開する多国籍企業は一体どのような構造をもっているのかという、知識の共有を行った。そして日米両国に多く存在する多国籍企業の利点、欠点を模索した。

1.4. 東アジア地域の経済統合の可能性

現在、世界では東アジアにおける地域統合が大きな話題となっている。初めは、アメリカ側の関心が希薄な傾向にあった東アジア地域の問題意識を共有した。そしてこの地域統

合の是非とその可能性について、近年増加傾向にあるFTAによる自由貿易体制といったハード面や、国内産業などのソフト面を踏まえて議論した。また、地域統合の先駆者であるEUとの比較を行ったり、東アジアにおける日本とアメリカのプレゼンスについて模索を行ったりした。

1.5. 国際社会の労働市場

グローバリゼーションがもたらす労働力への影響や、労働市場における差別の問題について取り扱った。我々が見落としがちになるグローバリゼーションの負の側面を取り扱うことで、広い視野を保つように心がけた。

2. フィールドトリップ

2.1. International Finance Corporation（以下IFC）

世界銀行グループに属するIFC（国際金融公社）は、開発途上国の民間部門への投資を促進する機関である。「持続可能な民間部門投資への支援による貧困の削減」を目指しておられるこの機関について、Mehmet Can Atacikさんからお話をうかがった。

2.2. JP Morgan Chase

ニューヨークではJP Morgan Chase本社を訪問し、James E. Glassmanさんにお話をうかがった。グラスマン氏には、主に世界の金融情勢についてお話していただいた。世界の主要な通貨であるドル、円、ユーロの為替が世界に与える影響などについて、現場の生の声を直接聞くことができた。

総括

グローバルな視点から経済の仕組みを捉えることは、近年一層重要視されつつある。そういった意味でも、第56回日米学生会議において、世界経済を捉える視点を持って、その問題や構造を考える当分科会は重要な位置付けにあったと考えられる。また、経済という分野は様々な他の分野とも少なからずリンクしている点が多い分野であるため、全ての分野の基盤としての意味を成さなければならなかったと考えられる。

こういった意味から、我々は議論を分科会内のみに留めるのではなく、積極的に「南北問題」、「国際政治と日米」などといった他の分科会とも、合同で議論をする機会を設けるべきであったと考える。南北問題は一種の経済問題であるし、政治と経済の関係は切っても切れない関係であろう。こういった機会を逃してしまい、より多くの視点からの問題意識を共有できなかったことが、今になって悔やまれる。

しかし、その分我々は分科会内での議論を多くすることができたため、メンバー全員の関心や問題意識をなるべく広範に議論することができた。議論が浅く広くなってしまった傾向は否めなかったが、こうすることで、全員が様々な事象を様々な視点から捉えることが可能になったといえるであろう。そして、当初ソフト面の目的としていた知識や関心の

共有、相手を知ることでの信頼関係の醸成はなされたと考えられる。

最後に、分科会内の活動を通して我々が得た考えを示したい。それは、「我々学生がまず行わなければいけないことは、問題意識を持つことではないだろうか」ということである。これは経済という分野に留まることではなく、すべての分野にいえることである。様々な問題意識を持ち、共有し、さらにはそれを多様性のある視点から分析する。こうすることが私たち学生にとって最も大切なことといえるのではないであろうか。学生だからこそできること。それは、多く与えられた時間を自分の興味のある問題意識に割き、学生を経た後に、それらの問題意識についてより具体的に対処していく。これは学生にとっての、大きな「市民参加」の一つではないかと考える。

国際政治と日米

International Politics

分科会メンバー

佐藤智紀* （東京大学経済学部）
下斗米紀子（一橋大学法学部）
新目久美子（聖心女子大学文学部歴史社会学科）
村上裕子　（京都外国語大学外国語学部）
森上翔太　（東京大学教養学部）
Hanna Lee　（University of Chicago）
Hunter McDonald (Harvard University)
Reiko Mizutani　（Keio University）
Maiko Nakarai*　（Harvard University）
（*はコーディネーターを示す）

分科会設置の目的

戦後、日本は自由、民主主義、市場経済などの基本的価値観を米国と共有し、日米関係を基軸に歩んできた。日米安保体制の下、日本は復興と経済成長を遂げ、経済力に至っては、米国に次ぐ地位を占めるまでになった。そして現在、日本と米国はこれまでになく強固な関係を築いている。しかし、集団的自衛権や米軍基地問題、日米同盟と国際協調の両立など、様々な課題がその背景に存在していることも事実である。

また、近年国際社会は新たな局面を迎えたといえよう。米国が圧倒的な軍事力と政治的影響力を有する唯一の超大国として、単独行動主義を強めつつある中、イラク戦争が勃発し、世界はテロの脅威にどう立ち向かうかという課題を抱えることになった。そして日本は、憲法の理念に沿った活動としてイラクへの自衛隊派遣を決定し、日本の安全保障政策は大きな転換点を迎えることとなった。同時に、これから日本が国際社会とどう関わるか、今後の日本の国際貢献とは何かが問われている。当分科会では、北朝鮮問題、国連のあり方などにも焦点を当てながら、日米両国を取り巻く国際情勢について包括的に考えていく。

活動内容

1. 事前活動（日本側）

1.1. 事前勉強会

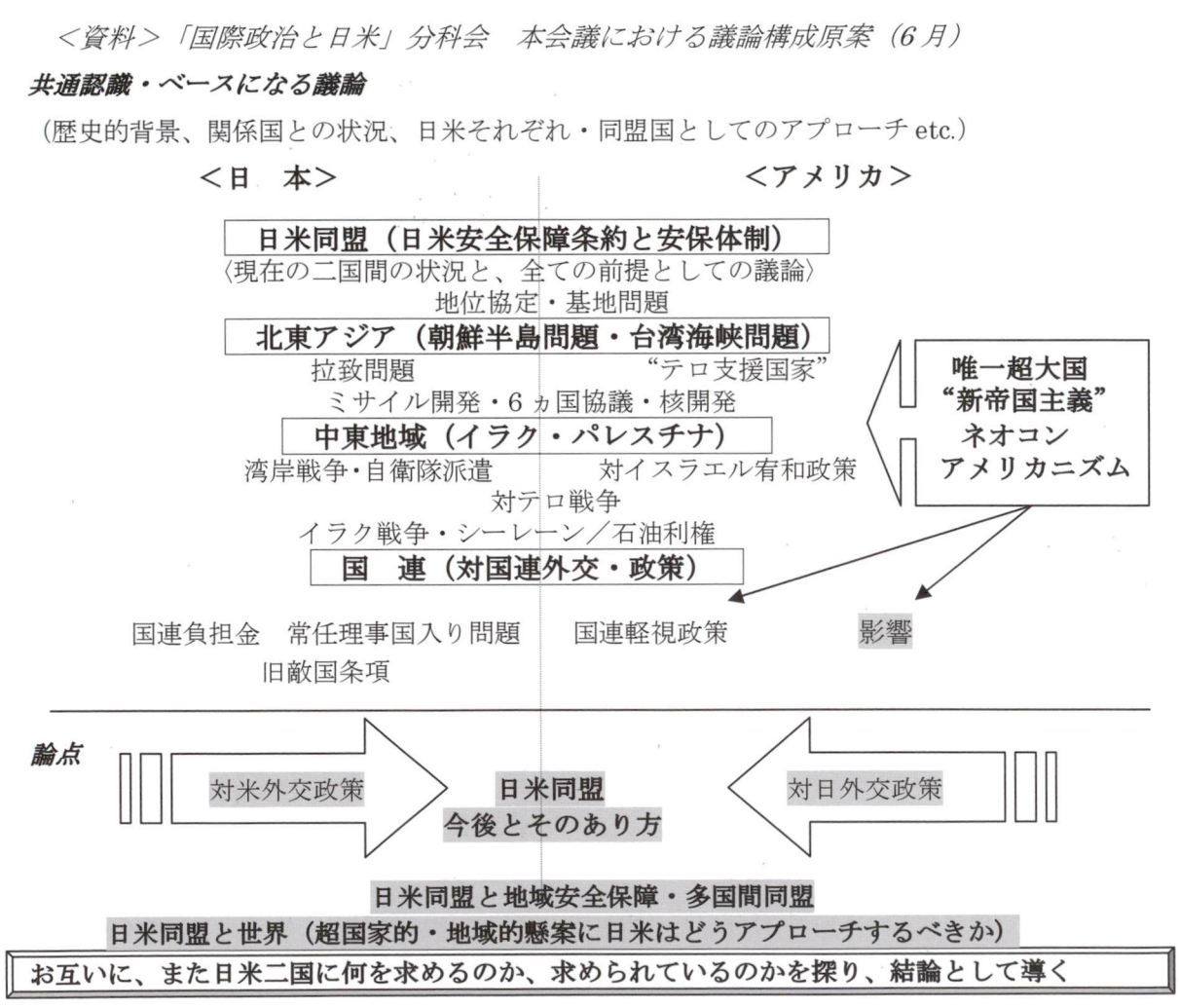
７月４日、日本経済新聞社論説委員兼編集委員の伊奈久喜氏をお招きし、当分科会主催の勉強会を行った。現在のアジア、環太平洋地域における日本の立場や日米関係の重要性について再認識し、また本会議での議論の方向性を見出す上で、参考となるたくさんのヒントをいただく機会となった。

1.2. 分科会ミーティング

春合宿から１ヵ月が経過した６月中旬、分科会ミーティングを行った。このミーティングは、事前に担当を決定した、日本と米国を取り巻く案件について、それぞれがどのような視点で事前勉強と小論文の執筆に当たっているかを確認し合い、また本会議においての議論の進め方や論点について、日本側の統一案を導き出すためのものであった。

その段階で私たちが考えていた議論の流れは以下のようなものであった。

＜資料＞「国際政治と日米」分科会　本会議における議論構成原案（6月）



2. 本会議中の分科会における議論内容

本会議を迎え、分科会としての活動をスタートするにあたりミーティングを行った。私たちは、各自が書いた論文はあくまで事前準備のものとし、それに関するプレゼンテーションなどは行わずにディスカッションを進めることとした。日米両国および国際社会が抱える懸案に関して重要と思われる事柄について問題提起を行い、順次議論していった。

ここでは問題の解決策など「答え」を見つける議論はあえて行わず、問題の提起と認識、そしてその懸案に対する個々の意見を交換し、両国が今後とるべき方向性を探るという形態をとった。私たちが扱った主な懸案並びに問題点は、以下の通りである。

2.1. 中東地域およびイラク戦争

・9.11 はアメリカに何をもたらしたのか。
・イラクに大量破壊兵器は存在したのか。
・アメリカがイラク攻撃に踏み切った本当の理由とは何か。
・正当性は証明されるのか。
・石油利権と先進国
・国連決議の重要性、国連の影響力低下への対策とは。

2.2. 自衛隊とその海外派遣

・自衛隊の成立経緯と自衛隊が担う役割とは。
・アメリカの対日占領政策と日本国憲法、自衛隊の関係とは。
・自衛隊は軍隊なのか、軍隊ではないのか。
・なぜ自衛隊派遣が問題になるのか。（日本の国内と国外の認識と反応とともに）

2.3. 日米安全保障体制

・日米安保条約の歴史について。
・日本の安全保障体制とは。（自衛隊問題についての議論を踏まえて）
・在日米軍基地問題と在韓米軍基地問題について。
・日本（および韓国）に米軍が存在することは、どのような意味を持つのか。
・日本の自衛隊が正式に「軍隊」になる日…その必要性と可能性、影響は。
・日本の核武装の可能性と是非について。

2.4. 対北朝鮮政策

・経済制裁等の措置は問題の解決につながるのか。
・拉致問題、特に曽我さんの問題は日米間にどのような影響をもたらすか、またどのように解決を図るべきか。
・イラク攻撃に踏み切ったアメリカ…同じ「悪の枢軸」である北朝鮮を直接的に武力攻撃することはありうるのか。
・日米両国にとって、果たして北朝鮮は脅威なのか。
・北朝鮮の現政権が崩壊する可能性はあるのか。そのシナリオとは。

2.5. 対中外交

・中国は日本にとって脅威なのか。それは経済的側面だけか。
・歴史問題の解決をどう図るべきか。
・台湾海峡問題…中台有事の際、日米はどう関わるか。
・アメリカの対中政策について（ニクソンショックなどの歴史的背景を交えて）

3. フィールドトリップほか

3.1. 映画『華氏 911』（ハワイサイト）

注）この映画鑑賞は、当初から分科会のフィールドトリップとして企画されていたものではないが、後日分科会においてリフレクションと議論がなされたのでここに挙げておく。

3.2. CNN『Cross Fire』スタジオ観覧（ワシントン D.C.サイト）

3.3. 米国司法省"Providing Appropriate Tools Required to Intercept and Obstruct Terrorism"（通称　PATRIOT ACT「愛国者法」）に関する勉強会（ワシントン D.C.サイト）

総括

本会議中の分科会の活動状況においても述べたが、当分科会における議論の大半は広く浅い議論であったといわざるを得ない。今回の会議全体のテーマである、"Civic Commitment"に、分科会としてどう関わるかについては最後まで結論が見えず、試行錯誤の連続であった。議論の根拠となるものはいずれも書籍やインターネットなどから得た知識であり、結局のところ多くの政治家、研究者や有識者たちが唱える意見の二番煎じを、それぞれの意見として交換しているに過ぎなかったからである。それぞれの持つ情報量の差も、時として議論発展の妨げとなった。

しかしながら、何度も「議論のための議論」を繰り返しながら私たちが導き出したのは、国際社会における懸案には多くの多義的要素が複雑に絡んでおり、その解決には様々な視点からの分析と考察が必要であるということ、また姿が見える「答え」を出すことは、私たちが扱った懸案に関していうならば短絡的になりがちであり、かつ誤解や錯誤を起こしやすいということであった。「答え」を求めることは非常に重要である。しかしながら、その「答え」を出そうと試みる度に、誰かに問題点を指摘されるという状態が続き、議論の膠着を招いてしまうという現実があった。

明確な「答え」を導き出すことができなかったということに対し、私たちが一種の焦燥感を抱いたことは否めない。しかしながら、これらの数々の案件に対し、真剣に向き合い、「答え」を求めて奔走できたそのことこそが、この分科会に集った 9 人のメンバーそれぞれが得た「答え」であり、道筋なのではないだろうか。

そのような中、私たちが導き出したもの、それは、日米両国の友好関係のもとに東アジア地域、環太平洋地域さらには国際社会の平和と安定があり、その構築と維持のためには両国が、それぞれの外交努力とともに二国間の同盟関係を有効に利用することが重要である、ということである。

第56回日米学生会議「国際政治と日米」分科会としては、現在の日米関係の今後、および国際社会が抱える案件に、日米両国がどう取り組むべきか、という大きなテーマに対し、明確な「答え」を打ち出すことはできなかったかもしれない。しかしながら私たちが、学生という立場を理由に消極的な関与を望むのではなく、問題意識を持ち常に議論を継続していくことこそが「私たちの使命」なのではないだろうか。

アイデンティティと市民活動

Identity and Social Activism

分科会メンバー

久保田豊乃（青山学院大学国際政治経済学部）
坂口紋野*　（慶應義塾大学商学部）
袴田隆嗣　（東京大学教養学部）
久野愛　　（東京大学大学院総合文化研究科地域文化研究専攻）
山田悠花子（愛知淑徳大学文化創造研究科国際交流専攻）
Monique Gilliam　(Cornell University)
Tony Kingsolver　(Indiana University)
Sarah LaFleur　(Harvard University)
Michelle Lee Jones　(University of Chicago)
Torin Martinez*　(University of North Carolina at Chapel Hill)

（*はコーディネーターを示す）

分科会設置の目的

グローバル化および複雑化する社会の進展に伴い、アイデンティティに対する意識が高まってきている。だが、いまだ「マイノリティ」という境遇に置かれ、アイデンティティの追求に葛藤を抱える人々がいるのも事実である。よって、当分科会では、日米両社会が抱える民族、宗教、ジェンダー、固定観念による差別や偏見の実態とその社会的要因とを具体的事例をもとに探求していく。そして、マイノリティらのアイデンティティが社会一般に認知されるために、いかなる手段をとり活動していくべきかを模索する。また、本分科会の根本的問題である「アイデンティティとは何か」ということについても議論を行った。

活動内容

1. 事前勉強

1.1. 東京朝鮮中高級学校

日本国内における朝鮮学校の掲げる教育方針や、直面している問題などを具体的に把握するため学校訪問を行った。当学校は、北朝鮮から経済的援助を受けており、授業は全て朝鮮語で行われる。生徒の家族の経済状態、使用言語、卒業後の進路、日本社会の受け入れ態勢や差別など数多くの問題を抱えている。

1.2. 日米コミュニティ・エクスチェンジ（JUCEE）

1996 年に設立された NPO 団体で、事務局長のセラジーン・ロシートさんよりお話をうかがった。JUCEE は日米両国の NPO や市民団体の、スタッフやボランティアをインターンとして派遣するなど、NPO 間また NPO と他セクターとの「仲介役」を担っている。日本でもボランティア活動が活発になり NPO も認知されるようになってきた。そうした状況の下で、日米間の NPO の活動の違いや、市民参加（Social Activism）とはどういうものか理解を深めた。

1.3. 多文化共生フォーラム

名古屋市立大学にて開催された、名古屋多文化共生研究会主催のフォーラムに参加した。愛知県では、2003 年に「愛知県国際化推進プラン」が策定されており、今回は行政担当者らも交え、外国人住民と日本人住民がともに暮らせる社会の構築に有効な政策とは何か、ということをテーマに講演会およびパネルディスカッションが行われた。

1.4. 同性愛者との懇談

20 歳代の同性愛者 1 名と対談する機会を設け、日本社会において同性愛者であるということはどういうことか、そしてそれに伴う問題点などについて学んだ。また、日本およびアメリカ国内における同性愛者らの社会運動についても、幅広く説明を受けることができた。

2. フィールドトリップ：Office of Human Rights (OHC)

OHR は、ワシントン D.C.において差別撤廃、就労の機会均等、人権保護を目的とし、特に人種問題や移民に対する活動を行っている。労働力の搾取に対しては、企業に対する教育なども行っている。また、問題が発生した際には、その調査や当事者の保護、支援をし、一般住民に対して法的措置や不当な差別に関しての教育も行っている。

3. 講演

3.1. 武田興欣氏

青山学院大学の武田興欣助教授より、アジア系アメリカ人に関するお話をうかがった。合衆国内におけるアジア系アメリカ人のアイデンティティの問題を始めとし、アジア系アメリカ人の人口増加に伴う現象を詳しく学ぶことができた。また、政治に関与するアジア

系アメリカ人が増えることの意味についても話し合った。

3.2. Peter Britos 氏

ハワイ大学にて映画やメディアの授業を教えている Britos 氏より、ハワイにおけるメディアと表象についてお話をうかがった。1959 年より放映された"Hawaiian Eye"など、いくつかの映画を参考にしながら、ネイティブハワイアンやハワイ文化がいかにメディアで取り上げられ、また再構築されてきたかについて学んだ。

3.3. James Kawika Riley 氏

Northern Colorado 大学に在学中の Riley 氏は、ネイティブハワイアンとしての権利擁護運動に努めてきた。今回は、ご自身の経験をもとに、ネイティブハワイアンが合衆国内でいかなる立場に置かれてきたか、そしてそれを打破するための取り組みについてのお話をうかがった。そして、ハワイアンとしてのアイデンティティの問題についても言及された。

3.4. Joe Yasutake 氏

第二次世界大戦中に強制収容された経験を持つ Yasutake 氏からお話をうかがい、ディスカッションを行った。「我慢、仕方がない、一生懸命」といった言葉が象徴的に用いられていた強制収容所での生活や、当時の日系人に対するアメリカ社会の対応などについて詳しく説明していただいた。また、日系人の家庭内における世代間の対立なども含め、実際に強制収容を体験された方からのお話は大変貴重なものであった。

3.5. John Killy 氏

Center for Immigration Studies より Killy 氏をお迎えし、「9.11 以前と以後の移民政策」というテーマでお話をうかがった。CIS は、1985 年に設立されたシンクタンクであり、合衆国内での移民に関する問題の調査や政策分析などを行っている。9.11 以降、移民受け入れの規制が厳しくなる一方、非合法移民は変わらず増大傾向にある。こうした状況の下、「新しいアメリカ人」とは何なのか、また移民が生活するための基盤作りなどについても示唆していただいた。

4. 分科会での議論

主にディスカッションでは、各メンバーのペーパーをもとに議論を進めていき、日米における問題の相違点や解決方法、またいかなる市民参加が可能であるか、ということを話し合った。ただ、それぞれ出し合ったテーマは、マイノリティグループという観点では共通しているものの、様々な要素を含んでおり、各回のディスカッションをいかにつなげていくかが課題であった。そのため、当分科会の根本的テーマである「アイデンティティ」と「市民活動」というキーワードを軸として、日米両国において我々が取り組んでいくべき事柄を結論とし、フォーラムで発表した。

総括

当分科会は、日米両社会においてマイノリティという立場に置かれている人々に焦点を当て、彼らのアイデンティティを巡る諸問題に取り組んできた。時代や社会的状況により、そうした問題のあり方や解決策は変化し得るものである。だが、常に留意すべき点は、そうした弱者は常に存在してきたという事実であり、また社会内部での力関係が均衡ではないということである。こうした状況を打破するために、まず、マジョリティとマイノリティという二項対立による捉え方を改めるべきであろう。この二つのグループは、人口構成や社会的影響力など様々な要素によって支えられている。だが、日米両国ともに、今後ますます複雑化していくであろう社会において、そうした二項対立では対処し切れない状況が生まれてくるのではないだろうか。

次に、新しい社会の構成員となり得る人々、例えば移民などの人口が増加している。この状況を踏まえて、受け入れる側の社会が果たすべき役割とは何であろうか。分科会の中で出された議論の一つが、「同化（assimilation）」ではなく「統合（integration）」を進めるべきだということである。様々な民族がともに生活していくためには、一つの文化や慣習を強制するのではなく、お互いに個々の違いを認めつつ一つの社会としてまとまっていく必要があるだろう。

最後に、「市民参加」または social activism という観点からであるが、よりよい社会を目指し何らかの変化を起こすため、一人ひとりがなすべきことは無限に考えられる。我々一人の力では、社会に大きな変化をもたらすことは難しいかもしれない。だが、身近なところから問題意識を持ち、そこから何らかの働きかけを行うことが、第一段階となるのではないだろうか。社会にはあらゆる問題が溢れているが、そこに少しでも個人的接点を見出すことができるならば、その問題の解決に向けて何らかの手段をとる糸口となるであろう。

以上のように、様々な要素が複雑に絡み合う社会構造の中では、個々のアイデンティティもただ一つの側面からなっているとは言い難い。したがって、一つの問題、また一個人を見る際には、あらゆる角度から考察することが不可欠であり、不当なステレオタイプや偏見を排除するためにも、「自己」と「他者」や「マジョリティ」と「マイノリティ」といった対立関係で社会を捉えることを見直していく必要があるだろう。

南北問題

North-South Issues

分科会メンバー

伊東孝哲　（慶應義塾大学総合政策学部）
佐藤陽子　（津田塾大学学芸学部国際関係学科）
中田牧　（国際基督教大学教養学部）
能見駿一郎　（東京大学法学部）
福家雄大*　（立命館大学国際関係学部）
Julia Bartlett　（Guilford College）
Portia Hunt　（Rutgers College）
Tina Toal　（Widener University）
Nicholas Topjian　（Harvard University）
Kristen White*（Kansas University）
（*はコーディネータを示す）

分科会設置の目的

現代社会は、各種の技術革新により世界各国で人々の生活水準の向上をもたらした。だが同時に、北半球に集中する先進国と、過去において植民地主義政策の犠牲になり続けてきた南半球に位置する途上国との間に大きな隔たりを生んできた。前者に暮らす人々が資源の 80%以上を利用している一方で、後者に位置する人々は十分な食料や清潔な水すら得られずに１日１ドル以下で暮らしている。こうした南北間のギャップは、経済的、社会的、そして環境的側面で広がっており、貧困問題も深刻化している。

この分科会では、グローバリゼーションに伴う南北間の対立構造と開発の問題について取り組むと同時に、この論題に対して日米両国はいかなるアプローチを取るべきか、また両国の市民は何をすべきか、現状を踏まえて批判的に追究することを目的とした。そして途上国が、責任ある持続可能な開発から利益を受けられるようにするにはどのような対応が必要なのか―途上国が直面している問題に対して、市民参加の視点を取り入れた多様な解決策を模索した。

活動内容

当分科会では、参加者が各々の問題関心に基づいて事前にリサーチし、本会議のために用意した論文について議論し意見交換を行う形で進められた。以下に記すような論文テーマを、およそ現状把握に関するものと解決策を提示するものに分けた上で、まず開発問題を含む南北問題の現状を把握し、南北間に様々な格差をもたらしている原因を突き詰める作業を行った。そして、それらの原因を解消するためにはどのような措置が考えられるのかを話し合い、分科会内で見出した解決方法を社会発信することを目標とした。また、本会議中のフォーラムでは、いくつかのアプローチを、日米学生会議の略称である「JASC」を頭文字とするキャッチフレーズとして掲げた。

【分科会メンバーのペーパートピック】
HIV/AIDS、緑の革命、京都議定書、中国国内の経済格差、IMF と世界銀行、マイクロクレジット、フェア・トレード、政府開発援助（ODA）、開発教育

①現状把握

現在、途上国において、1 日に 5 歳以下の子供およそ 3 万人が、先進国であれば治療可能な感染症などで死亡している。一方、先進国では年間およそ 130 億ドルが人々の基本的な健康管理のために費やされ、およそ 40 億ドルがペットフードに費やされている。また、2000 年の世界全体の年間平均所得は 7,350 ドルであり、先進国における約 9 億人の平均所得は 27,450 ドル、途上国に住む約 51 億人の平均所得は 3,890 ドルとなっている。1990 年から 1999 年の間に平均して世界の経済成長率が＋2.5%を示したにもかかわらず、貧困層は 1 億人増加した。

グローバリゼーションに進展に伴い、市場は自由化されていく傾向にある。そのような中で、かつての途上国の中には、目覚しい勢いで経済発展を遂げている国も存在する。しかし、その波に乗ることができなかった国々は、いまだ低成長と貧困に苦しむ状況が続いている。一方、発展を成し遂げたといわれるかつての途上国の内部、あるいは先進国の内部でさえ、貧富の格差は広がりつつあり、拡大する貧困層は社会の周辺に追いやられている。

以上のように、様々な次元における貧困と不平等は、現代世界に内在する最も深刻な問題の一つといえよう。

②貧困削減の障壁

経済

・貿易格差

現在多くの途上国は、価格の安定しない一次産品の輸出に依存しているため外貨が得られず、開発のための資本が蓄えられない。

・助成金

先進国は、GATT や WTO を通じて貿易関税の削減撤廃を制度化し、途上国の一次産品に

も補助金を注入しないように迫り、自由貿易を求めてきた。先進国はそれにもかかわらず、自国の農産物を保護するために補助金を導入しているケースが多く見られる。

・国内の情勢不安と国際経済機関によるコンディショナリティ

途上国の中には、資本、金融の自由化のための基盤が磐石でない国が依然として多い。そうした状況の中で、例えば、IMF や世界銀行の構造調整融資政策にしたがって急速に市場の開放を進めると、国内で情勢不安などの問題が生じた際、資本が国外に流出してしまい国内経済が立ち行かなくなる恐れがある。

社会

社会的な側面では、水と食糧の不足、HIV ウィルスなどによる感染症、教育の問題が挙げられる。基礎教育は貧困を再生産させないための重要な要素であり、読み書きは、就労、病気の回避、避妊など、人生の多くの場面で不利な状況を強いられないために不可欠な能力である。基礎教育を受けなかった子どもたちの多くは、親と同様の貧困生活を送ることになり、次世代にわたって貧困が「再生産」されていく。そこで、その悪循環を断ち切るために、基礎教育を実施するための援助と自助努力が必要である。

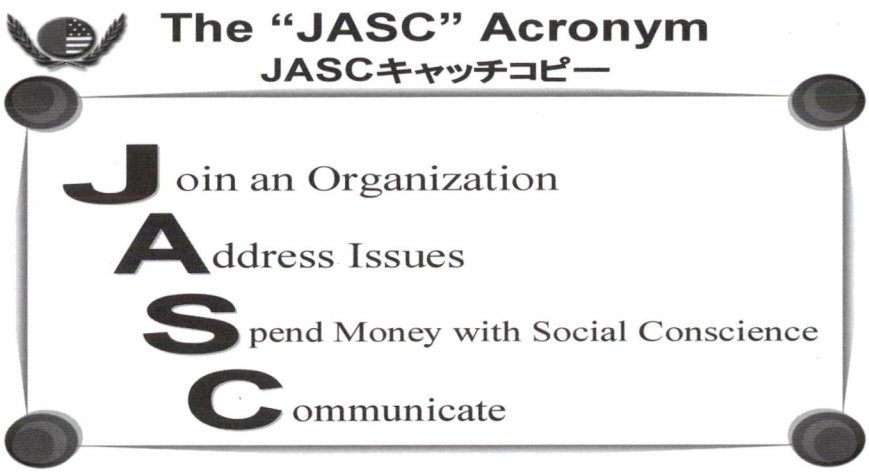
③解決策

様々な解決策の中で注目すべきものの一つに、バングラデシュのグラミン銀行の開発したマイクロクレジットという融資システムがある。マイクロクレジットは貧しい人々の経済的自立を支援するために、少額の資金を無担保で融資するシステムであり、先進的な開発モデルとして世界的に注目されている。返済率は 98%に達し、特に女性のエンパワーメントを大きく促していることが特徴である。

また、当分科会では、一次産品の価格安定のために実施されているフェア・トレードや、先進国の開発教育をさらに普及させることなどが解決策として挙げられた。開発教育とは、開発を巡る諸問題を構造的に理解し、より公正で望ましい開発について考える、参加型を重視した教育活動である。それは、貧困削減に対する社会的関心を醸成し、国際協力を展開するための環境を整えるという重要な役割も担っている。

さらに、世界の様々な地域、様々な分野に展開する各種の NGO が、個々に培ってきたノウハウや知識などを持ち寄った形で連携し、互いの影響力を高めることも有効であると考えられる。また、NGO がもつ優位性は、第一に、援助を必要としている貧困層を始めとして、現場に密着して活動してきたこと、第二に、受益層の参加によって民主的かつ効果的にプロジェクトを運営していることにある。これらは国家中心の開発や国際機関による開発において、従来から弱いとされる点である。政府と NGO がそれぞれの優位性を発揮し、足りない部分を補い合う形で連携し、開発に取り組むことが重要である。

個人レベルでは、NGO に参加すること、貧困開発問題に関する意識を広めること、フェア・トレード商品を購入することなどが提案され、次のようなキャッチフレーズが生まれた。



総括

社会主義体制の崩壊とともに訪れた冷戦の終結は、同時にグローバリゼーションの一層の進展をもたらし、世界は変容し続けている。それは、「南北問題」についても同様である。既に、従来の「北」と「南」それぞれに位置する、国家対国家という狭い視野で世界に拡大する不平等を見る時代ではなくなった。従来から継続する「先進国－途上国」という構図とともに、「途上国間、途上国内部における格差」、そして「先進国間、先進国内部における格差」が複雑に入り組む世界地図を見なければならない。このような現状は、自由主義経済とグローバリゼーションがもたらす負の一側面であるといえる。しかしながら私たちは、自由主義経済の拡大とともに進展するグローバリゼーションを、全面的に否定することはできない。それは先進国に住む私たちがその恩恵を受けているからという単純な理由からではない。グローバリゼーションが、途上国の多くの人々にとっての「悪」だとはいえないからである。私たちが直視しなければならないのは、世界の多くの人々が幸せに暮らしている裏で、それよりもさらに多くの人々が貧しさに喘いでいる状況である。多くの人々が富める方向へ向かい、世界に拡がる格差を縮小していくことは、極めて困難なことである。このことは国連を始めとするあらゆる国際機関、あらゆるNGOが貧困削減、格差是正のために活動しているものの、際立った成果が短期的なスパンでは容易に確認できていないことからも理解されることである。

当分科会は、果敢にも1ヵ月弱という短い期間で、このようにますます複雑な様相を呈する「南北問題」に挑んだ。ここに示された当分科会の活動内容は、これまでの歴史や事実、また開発や貧困問題に携わってきた諸団体による根気強く息の長い活動の、ほんの一部分に触れたに過ぎないことかもしれない。しかし、短期間集中的に様々な問題意識と関心分野をもって「南北問題」にアプローチし、日米の学生同士で議論を展開することができたという経験から、参加者個々人が得たものは大きかったに違いない。この経験が参加者の未来に確実に花開くことを期待して、当分科会の活動報告の結びとしたい。

メディア倫理

Media and Communications

分科会メンバー

杉田道子　（国際基督教大学教養学部）
坪田裕美子（九州大学 21 世紀プログラム課程）
砥上明子　（早稲田大学政治経済学部）
原奈央*　（関西外国語大学外国語学部）
三谷佳孝　（立命館大学国際関係学部）
Jill Kunishima*　(Mills College)
Ashley Neeley　(University of Maryland)
Eric Shelton　(University of Redlands)
Yukie Takeda　(University of South Alabama)
Mika Yasuo　(University of Puget Sound)
（*はコーディネーターを示す）

分科会設置の目的

メディアは、政治、経済、教育など、社会を映す要素として、私たちの日常と密接に関わっている。世論の集約や権力との対峙、個人の間における情報交換など、メディアの影響力は国家レベルから個人レベルまでと幅広く、その可能性は計り知れない。しかし最近では、メディアから引き起こされる問題が、顕著に取り上げられるようになった。そこで、世界でも最新の技術を有する日米のメディアの現状を、学生の視点から比較することにより、より多角的にメディアの社会における役割や機能を模索していく。9.11 米国同時多発テロ事件からイラク戦争に至るまで、盛んに行われたアメリカのメディアによる戦争報道。そして、それに対する人々の反応に注目し、報道のあり方、また市民のメディアとの関わり方について考察する。さらに、互いの国のメディアによって映し出される日本、アメリカ像を発見することによって、日米関係を新たな側面から再考することを試みる。

活動内容

1. 事前活動

本分科会は、参加者が関東・関西・九州と広範にわたっていたため、フィールドトリップや、メンバーが集まっての勉強会などの事前活動を行うことはできなかった。

2. 本会議中の活動

2.1. 討論内容

・Comparison of American and Japanese Media

ハワイサイトで行われたこのディスカッションでは、日米両国間のメディアを比較した。その中で日本がアメリカのメディアでどのように描かれているか、またアメリカが日本のメディアの中でどのように描かれているかなど、メディアを通した両国の印象を話し合い、お互いの国に対して抱いている印象を共有した。また、メディアがイメージを形成していくことによる、社会への影響についても話し合った。

・Discussion: Media Ethics

ディスカッションは、3 名の OB/OG を交えて行われた。主なトピックとして"War Ethics"、"Crime"、"Human Rights"の 3 点を取り扱ったが、中でも"Crime"に焦点を当て、今年 6 月に長崎佐世保で起きた小学校 6 年生の殺害事件をもとに、メディアの役割について議論を交わした。メディアの持つ教育的役割に話が及び、改めてメディアの影響力の大きさを実感したディスカッションだった。

・Discussion: War

戦争報道については、特に 9.11 以後やイラク戦争を扱った。やや広いテーマではあったが、米国側学生の 9. 11 についての体験やその後のメディアに対する感想、愛国心、アラブ系メディア、でっちあげ報道、戦争報道一般などについて自由に議論でき、非常に興味深い意見交換ができた。情報の受け取り側ができることとしては、限られた意見しか挙げることができなかったが、戦争報道は報道の中でも特に政治に利用されやすく、報道する視点によっていくらでも歪曲されたものになることを再認識した。

・Discussion: Media and Democracy

民主主義は表現の自由、情報へのアクセスの自由を謳うが、それは民主主義社会においてどこまで保障されたものなのだろうか。元来、権力に対峙し相対するはずの報道は、逆に権力に飼い馴らされたものになってはいないだろうか。民主主義の母国であるアメリカと、そのアメリカによって民主主義をもたらされた日本両国におけるメディアのあり方を検証した。

2.2. その他の活動

・Honolulu Advertiser 訪問

ハワイサイトでは、Honolulu Advertiser という地元新聞社へのフィールドトリップを行った。社内を案内していただき、情報収集、記事の執筆、レイアウト、印刷…と新聞ができるまでの工程を一通り見ることができた。新聞が作られる様子を間近で見ることができ「社会科見学」としては有意義だったが、新聞社の方とお話をする時間がほとんどとれなかったのが心残りである。

・「アイデンティティと市民活動」分科会との Joint Round Table

ハワイサイトにて行われたこのセッションでは、ハワイ大学教授でいらっしゃる Peter

Britos 氏からレクチャーを受けた。レクチャーは「メディアの中でどのようにハワイという表象が作られてきたのか」というテーマで行われ、少数民族や植民地化などの視点を採り入れながら、メディアやマイノリティといった問題を考えることができた。

・CROSSFIRE

ジョージ・ワシントン大学構内にある CNN のスタジオに行き、"CROSSFIRE"という番組の生放送を見学した。CNN はアメリカ国内でも定評のあるニュース専門のテレビ局であり、中でもこの番組は政治的なトピックについてその名の通り、激しい議論が交わされるというものであった。内容がアメリカ国内の政治問題である上、非常に速い英語で議論されたため、十分に理解するのは難しかったが、アメリカのメディアにおいて政治問題がいかに取り扱われているか、その一端に触れることができた。

・「メディアと女性」についての講演

American Women in Radio and Television (AWRT)から弁護士でもいらっしゃる Melody Virture さんをスピーカーとしてお呼びし、お話をうかがった。アメリカにおいて女性を中心としたマイノリティの人々は、いまだマスコミの世界に多くは進出していない。女性を含むより多様な人材の発想がメディアに生かされることによって、新たなアイディアが社会に発信される可能性がある、という力強いコメントをいただいた。

・JASC Shimbun の発行

「何らかの形でアウトプットができないだろうか」、「情報の受け取り手ではなく発信する側の視点からメディアについて考える必要があるのではないか」といった思いから始めたのが、本会議中に会議参加者向けに発行された JASC Shimbun である。新聞の主な内容としては、各分科会の活動内容、パネルディスカッションやフィールドトリップの感想、評論、参加者へのインタビューなどである。ユニークな発表ができ勉強にもなった反面、多忙な本会議のスケジュールの中で新聞を発行することは非常に困難であり、会議の最後にたった一度だけ発行するということになってしまい、反省点も多い。

総括

どの分科会もメディアと何らかの関わりをもっている―それは「アイデンティティと市民活動」分科会との合同セッションや、メディアの教育的役割についてのディスカッションを通して、改めて感じたことだった。“media”という言葉は、「媒体」「媒介物」といった日本語に訳される。「媒介物」であるがゆえに私たちの分科会のテーマは広範にわたり、議論の焦点を絞ることが難しかった。

この分科会は、比較的自由度の高い分科会だった。それぞれの興味について書いたペーパーを大きく重視はせず、各メンバーが話し合いたいトピックを自由に選び、ディスカッションを行うという方法をとった。この方法は、広範にわたる分科会のテーマをカバーするのには役立ったが、その一方で、一つ一つの内容について深い議論ができないという問

題点も生じた。

ラウンドテーブルでは回数を増すごとに活発な意見交換が交わされ、両国のメディアに対する見解を伝えることができた。またフィールドトリップとして、ハワイサイトでHonolulu Advertiserへの訪問、ワシントンD.C.サイトでCROSS FIREの見学を行い、アメリカのメディアの一端に触れることができた。しかし、どちらも専門家に直接お話をうかがうことができず、十分に満足できるものだったとは言い難い。

今回私たちは試みとして、本会議の中でJASC Shimbunを発行した。この試みは、第56回日米学生会議のテーマの一部である"Civic Commitment"の初めの一歩だったという見方もできよう。しかし、本当の意味でのCivic Commitmentとは、会議を終えた私たちがこれから行っていくことではないだろうか。

メディアという大きな力の前では、何も行わなければ市民レベルの力は無力である。しかし、市民レベルでもそれぞれが「伝えよう」という気持ちを忘れなければその活動は大きくなり、やがてメディアは我々を助けてくれるだろう。メディアを冷静に見る力と、「伝えたい」という強い意志。この二点が重要である。これらを伝えることによって、社会に貢献することに繋がるのではないだろうか。

社会と科学技術

Scientific and Medical Practices

分科会メンバー

安藤彩*　（お茶の水女子大学文教育学部言語文化学科）
大地悠子（山形大学医学部医学科）
黒田佳代（兵庫県立大学大学院応用情報科学研究科）
高瀬哲郎（東京医科歯科大学医学部医学科）
広田愛　（関西学院大学社会学部社会学科）
Lyndsey Garcia　(Mount Holyoke College)
Leah Mullen*　(Mills College)
Kay Negishi　(Harvard University)
Nicholas Perkel　(Rutgers University)
Linda Zhang　(Harvard University)
（*はコーディネーターを示す）

分科会設置の目的

現代社会において、科学技術は非常に大きな意味をもっている。科学技術が日常生活から切り離せぬ存在であるのはもちろんのこと、日本政府が社会の活性化に向けた具体的政策として、科学技術創造立国の達成を掲げていることから見ても明らかだ。

当分科会では、日米両国における科学・医療技術の現状を把握し、研究や教育の現場、および産業など様々な面で両国が直面している問題と、問題解決のための日米の協力体制について、文系理系を問わない斬新な観点から考えていく。

活動内容

1. ディスカッション

1.1. DNA フィンガープリント

アメリカ連邦政府は、犯罪者の DNA プロフィールを記録する CODIS という膨大なデータベースを所有している。近年は、重罪だけではなく軽罪や少年犯罪に至るまで、すべてを記録する動きが出ている。現時点で既に 1500 万人のデータが CODIS に入っているが、

さらに対象を拡大し、社会の秩序を守るためという理由で一般の人々のDNAデータも取り入れるようになれば、プライバシーの問題が出てくる。例えば、保険会社などがデータベースにアクセスできるようになれば、個人のDNAを調べ、将来何かの病気が発症する可能性のある人を保険に加入させないという問題も出てくるだろう。

また、このDNAフィンガープリントは裁判などで絶対的な証拠と見られがちだが、人間が操作していること、DNAが変性してしまうことがあること、など決定的な証拠として使うには危うさがある。

1.2. バイオテクノロジーのベンチャー企業および産官学連携

日本のバイオベンチャーの市場総額は、1999年におよそ1.3兆ドルだったのが、2010年には25兆ドルまで上昇すると予測されている。アメリカの場合は7.4兆ドルから2025年に300兆ドルに上昇するという予想から、日本とは全く桁が違う。アメリカ国立衛生研究所（NIH）の予算だけでも日本全国のバイオ関連予算を上回っているが、日本もその規模を増大させる努力をしており、北海道を新しいバイオ工場や研究施設の拠点とする見込みだ。しかし、日本のバイオ産業の発展を妨げる問題がいくつかある。利益を上げるためには企業間で情報を共有しないのは当然のことであるが、日本全体としてバイオ産業を発展させるには効率が悪い。また消費者の立場からみると、新製品に特許を認めることで新薬などの商品の値段が高くなり、貧しい人が最新の医療を受けられないという医療格差が生じてくる可能性もある。開発の正当な評価として特許制度は必要であるが、技術の独占は避けたい。

これらの問題点を解決するために、産業界・大学・政府の三者間の連携が円滑に行われる必要性があると思われる。日本は民間企業から研究機関へのサポートは、アメリカと比較した場合まだまだ少ないが、平成16年4月に始まった国立大学の法人化と企業との結びつきに注目した。

1.3. クローニングと胚幹細胞（ES stem cell）の倫理問題

クローニングには二種類あって再生医療用（クローンの臓器をその本人の移植に使う）と生殖医療用（新しい個体を生み出す）とがある。前者の目的で許可される国もあるが、個体との境界線を引くのが難しい。現在、日米両国はヒトのクローニングは許可しないが、日本では胚幹細胞の研究が認められている。ただし、研究者は具体的な研究内容・胚細胞の使用目的を報告しなければならない。アメリカでは胚幹細胞の研究は許可されるものの、ブッシュ政権はあまりこの種の研究をサポートしていないことがわかる。また、キリスト教やユダヤ教の信仰が強い地区では、クローニングやES stem cellの操作が神の意思に反するとして、宗教上問題とされることもある。堕胎細胞を使う胚幹細胞研究もあるが、胚がまだ細胞の塊の段階でもヒトとみなしたら殺人行為に当たるか、それとも代わりに、不妊治療で余った受精卵を使えばこの問題に触れないのではないだろうか、などについて話し合った。

これらの研究に関する倫理問題は、宗教や国々の文化背景も絡んでいるので国際的に簡単に是非を決めることはできない。だが、信仰などは国の政策から切り離すべきであり、

倫理学者、科学者、政府の専門家などが多面的にこの問題にアプローチし、将来の方針を決める必要があるだろう。

1.4. 医者と患者の関係およびその文化的背景（特にターミナルケアや臓器移植の問題）

医者と患者の関係について、その文化的背景を考えながら日米の現状を比較した。具体例として、癌の終末期医療（terminal care）と臓器移植の問題を取り上げた。朝日新聞によると、日本の医師は末期癌患者の 80%には何も情報を与えないか、別のことを言い、アジア太平洋 10 カ国の中で患者の信頼を最も得ていないと報告されている。このことは情報公開、訴訟社会で生きているアメリカ人にとっては理解し難い。アメリカでは患者の“My life”を考えてすべてを本人に告知するが、日本ではいまだに家族に先に告知して、本人には言わないようにすることがある。日本人の国民性であろうか、本人に告知しないのは倫理に反していないのか、自分の体のことを知る権利は当然あるのではないか、患者にとって「ベスト」とは何か、などの問題がたくさん出てきて、日米それぞれの文化の立場で議論を進めた。次に臓器移植について、なぜ日本では自分の臓器提供や、家族の臓器を提供するのを、欧米に比べ拒む傾向があるのかについて話し合った。日本では、脳死判定の際に本当に死んでいるかどうか疑問に思う家族の人が多いためか、臓器提供が少ない。また、宗教的、文化的背景もあって、神道や仏教の考えで死後の世界に行くために、死体をなるべく損傷したくないというのもあるかもしれない。

1.5. 代替医療

代替医療とは、現在医学の世界で主流の西洋医学以外のものを指す。西洋医学は細胞レベルで病気を理解し、病気の根本的な原因を突き止め治療するもので、抗生物質や手術療法はその代表的な成果である。しかし、専門的な細分化が進み、小さな病変だけに注目して患者の全身を見ない傾向がある。

代替医療には様々な分類がある。骨や筋肉を矯正する肉体に焦点を当てているカイロプラクティック（整体）から、精神面に焦点を当てる瞑想や催眠療法、体のエネルギーに注目する針灸、磁場、中国のハーブなどである。また、ホメオパチー（体が本来持っている治癒力を刺激する）という概念をもつ代替医療もあり、イギリスではホメオパチーが国の健康方針の一つに含まれていたり、フランスでは局にホメオパチー用の薬を置くように義務付けられたりする。多くの代替医療の効果が今日の科学では証明されていないため軽視されがちだが、西洋医学より古い歴史をもち、長きにわたり人々に用いられてきたことから、効果があると考えられよう。うまく両者を併用できたならば、よりよい医療を提供できるのではないだろうか。

2. 事前勉強会

2.1. 文部科学省座談会

文部科学省科学技術・学術政策局の上田智一さんを招き座談会を行った。

2.2. 野元克彦氏

野元氏はバイオベンチャー企業の有能な起業家で、三井物産などの顧問を勤めておられ

る。バイオが私たちの身近なところに既に入り込んでいるということから話が始まり、バイオベンチャー企業を起こす視点から議論がなされた。日本と海外ベンチャー企業の現状と将来、および政府のサポートや今後の政策についても、統計的なデータを使って日米の現状を比較した。

2.3. DNA チップ研究所

日立と提携したバイオベンチャー企業で本社は横浜にある。創設間もないが、全国で唯一 DNA チップを研究・製造・販売している会社である。DNA チップはバイオ研究に不可欠な役割を担っているが、近い将来、遺伝子疾患の診断のため臨床現場で一般的に使われるようになるだろう。アメリカに比べたらこのような新しいビジネスを始めるベンチャー企業は日本ではまだまだ少ない。松原謙一社長よりヒトゲノムプロジェクトへの日本の取り組みや特許問題、アメリカのパテント乱用などの話もうかがった。

3. フィールドトリップ

3.1. 米赤十字社本部

長い歴史のある米赤十字の本部はワシントンにある。昔の主な活動は戦争現場での米軍の支援だったが、現在の役目はエイズやマラリアなどの感染病や災害と戦って、世界の人々の健康を守ることだ。今回の見学で米赤十字が発展途上国の人々、特にアフリカの子供たちの健康のためにいかに貢献しているのかがよくわかった。

3.2. National Institute of Health (NIH)

NIH はアメリカ政府の、健康に関する最大の研究機関である。主要施設はメリーランド州 Bethesda にあるが、全国に数多くの関連研究施設を持っている。政府の援助金が本施設内の研究 (Intramural research) で使われるほか、関連研究室に割り当てられるものもある。また、NIH には世界各国から研究者が集まってくるためバイオ研究のメッカといわれている。日本人の研究者も 378 人在籍しており、中国 (414 人) に次いで 2 番目に多い。日本で同じような環境を提供できる研究施設を作り、世界各国から優秀な研究者を呼び集めることは現実的に難しいだろう。

3.3. アロマセラピー

ニューヨーク・マンハッタンで開業しているイギリス人の代替医療の専門家を訪ねた。参加者の一人が重症のアレルギーを幼い頃から患っており、ある時さらに髄膜炎にかかったため、母の紹介で様々な代替医療 (Alternative medicine) を試した。アロマセラピーとは、香りを使う治療のことである。術者の手に植物油を塗って患者の背中や額をゆっくりマッサージする。患者をリラックスさせるという精神的な効果のみならず、油が細胞表面を通過しやすいことから、生理的に体の病気を改善してくれる効果もあるらしい。

総括

当分科会で扱った内容は多岐にわたり、一見すると相互性がないように思われるが、どの技術も社会をよりよくするために用いられる、という共通点がある。技術は人が用いるのであり、人が技術に振り回されるようになってはならない。科学や医療が万能なわけではなく、解明されていないことも数多くある。ところが、現状を見てみると科学技術だけが先行し、人々の理解や倫理に関する議論が追いついていない。まずは、多くの人々が科学や医学についての正しい知識を持ち、積極的に社会と科学技術、医療が抱える問題点に注目し、理解することが大切である。

問題解決のために私たちにできることは何かを議論した結果、プリンストンでのフォーラムでは、科学技術や医療に関する問題を知ってもらう、ということに重点を置いたプレゼンテーションを行った。身近なところから社会と技術の関連について問題提起を行い、社会全体の意識を高めていくことが私たちの使命だと考える。今回の分科会やフォーラムは、科学技術や医療全体を改善していくには小さな一歩かもしれないが、よりよい技術との共存ができる社会をこれから創っていきたい。

社会問題と制度

Public Policy and Society

分科会メンバー

飯田智紀* （慶應義塾大学法学部政治学科）
田中珠理 （慶應義塾大学大学院政策メディア研究科）
寳一博 （三重大学医学部医学科）
福田愛奈 （お茶の水女子大学生活科学部）
女鹿智恵 （早稲田大学大学院アジア太平洋研究科国際関係学専攻）
Lasantha Gunasekara (Cornell University)
Lauren Moss (Randolph-Macon Woman's College)
Megumi Nakamura (Princeton University)
Nicholas Napalo (Wesleyan University)
Kristine Tyson* (Cornell University)
（*はコーディネーターを示す）

分科会設置の目的

着実に人口減少社会に突入している日本。しかし、その社会保障制度はいまだ人口構成の変化に対処できておらず、対応不十分なうちにより深刻な少子高齢化社会を迎えようとしている。またアメリカでも、エスニシティ問題を筆頭に人口構成の変化が原因で様々な社会問題が表面化しつつある。また凶悪少年犯罪が日本でもアメリカでも多発している。当分科会では、これら人口構成の変化や少年犯罪、さらには女性の社会進出なども含め、現代社会特有の諸問題に着目した。そして、日本とアメリカの文化、社会制度を比較しながら、両国が抱える社会問題の解決策について考察していく。

活動内容

1. 分科会スケジュール　（主な討論のトピック）

7 月 25 日　自己紹介、具体的なテーマやスケジュール設定

7 月 27 日　導入：高齢社会　Introduction: Aging / Aged Society

7 月 28 日　医療保険　Health Reform

7 月 29 日　フリーター　"Freeter" or "Job-hopper"

7 月 30 日　移民政策　Immigration Policy

7 月 31 日　同性結婚(*アルムナイとジョイント*)　Legal Issues Behind Same-Sex Marriage

8 月 5 日　移民政策(*Center for Immigration Studies からスピーカーを招いての対談*)

8 月 9 日　反テロ愛国法(*スピーカーを招いての講演および対談*)　USA Patriot Act

8 月 10 日 am　少年犯罪　Juvenile Crime

pm　*法務省の Office of Juvenile Justice and Delinquency Prevention 訪問*

8 月 14 日　児童虐待　Child Abuse

8 月 15 日　フォーラム「人口構成の変化からみる社会問題と制度」

2. 討論内容

2.1. 高齢化社会

アメリカにおける 4000 万人を超える無保険者、実に GDP の 14%を占める医療費、7 割が社会保険や医療費に充てられる政府予算、定年者の増加について統計をもとに考察した。また、予算の割り当てなどの選挙攻略が、相対的に投票率の高い高齢者層に影響されることの問題なども取り上げた。

日本ではアメリカ以上の速さで少子高齢化が進み、労働人口は激減している。人口置換値が 2.08 である合計特殊出生率が、今年は全国平均では 1.28 を記録し、東京都では 1.0 を下回った。このような問題の原因や解決策について話し合った。

次に、少子高齢化に伴う、労働力不足、市場の縮小、経済の停滞、貯蓄減少による先進国の後退など、日米を始めとする先進国に共通する問題について議論した。また、医療制度や教育の充実、女性の社会進出に伴う労働と育児のあり方、社会や家庭の問題といった本分科会の方向性について話し合った。

2.2. 医療制度

日米の医療制度の違いについて話し合い、現存する問題点を確認、分析した。高齢化社会、医療費上昇、相次ぐ医療ミス、臨床医育成に不向きな医学教育など、日本の医療は多くの問題を抱えており、国民の強い関心も加わって、近年医療改革の気運が高まっている。しかしその一方で、日本が今後の改革において目標と位置付けるアメリカもまた、深刻な問題を抱えている。アメリカは世界一高い医療費にもかかわらず国民皆保険制度がなく、実に 4400 万人にも上る無保険者が存在する。医療という特殊な領域においては、市場原理が必ずしも最善の選択ではないということを示唆している。本分科会では両国が抱える種々の医療問題の原因を分析し、改善策を模索した。

2.3. フリーター

「フリーター」とは、定職に就くことを希望しているにもかかわらず、パートタイムや無職といった状況にある 15 歳から 34 歳の若者のことをいう。その数は増加する傾向にあり、現在その数は日本において 417 万人に及ぶとするデータが存在する。不景気による会社の正社員の削減、いわゆる「パラサイトシングル（free-loaders）」の増加など、若者を取り巻く環境は厳しく、フリーターの増加を助長している。フリーターの増加から、将来の日本の生産力低下、低収入の家庭が増えることによる出生率の低下などが懸念される。本分科会では、これらの解決策を模索すべく、議論を深めた。

2.4. 移民政策、CIS のスピーカー、反テロ愛国法のスピーカー

移民問題については、アメリカの移民制度と日本に入国する移民という二つ視点から話し合った。ワシントン D.C.では Center for Immigration Studies より John Keeley 氏（Director of Communication for CIS）をゲストスピーカーに迎え、アメリカ国内において違法滞在者が年々増加していること、2001 年の同時多発テロ事件以降の移民政策についてなど、移民とその政策の現状についての説明を受けた。現在は移民への積極的な対策が練られていないが、これからはこの問題を無視することはできない。一方、日本国内の移民制度としては、長時間低賃金労働が問題となると同時に、労働内容にも注目した。過酷な肉体労働や、いわゆる 3K といわれる職業の請負口として移民が利用されること、そのことから生じる差別、人権問題などが挙げられた。

同時多発テロ事件の 6 週間後に成立した反テロ愛国法(USA Patriot Act)に関しては、Laura Flippin 氏（Special Assistant to the President and Executive Secretary)をゲストスピーカーとして迎え、この法律が誕生した経緯とその影響力を説明していただき、積極的に意見交換を行った。

2.5. 同性結婚

2004 年 5 月、米国で初めてマサチューセッツ州が同性結婚（Same-Sex Marriage）を認めた。同性結婚を合法としている地域があるのはアメリカを含め、世界で 4 ヵ国のみである。日米における同性愛に対する考え方の違いとして、「仏教国」と「キリスト教国」という宗教的な要因やメディアにおけるイメージについて話し合った。一方、子どもの健全な育成にとって両親の性別よりも、むしろ両親の関係の安定が重要であるという研究結果などを取り上げ、家族という概念そのものについても議論した。

2.6. 少年犯罪、法務省（Office of Juvenile Justice and Delinquency Prevention）訪問

今日、日米両国で少年犯罪は増え、またその手口が凶悪化していると言われる。日本では「被害者の視点」に重点が置かれ、少年法改正が議論されている。アメリカでは教育に統一水準がなく、少年犯罪も地域や学校によって一概に論じることはできない。メディアにおける暴力的な描写、いわゆるギャンググループの存在、親および学校教育の不足、学校での処分など、少年犯罪の要因として考えられる問題について考察した。また、実名報道、未成年者の死刑制度、更生プログラム、アメリカにおける実験的量刑制度（Scared-Straight, Revolving Doors）について議論した。

2.7. 児童虐待、CASA プログラムのスピーカー非公式訪問

家族という私的空間に公権力がどこまで介入することが許されるか、公権力の権限を強化すべきか、どのような政策が必要となるか。アメリカにおいては、1960 年代後半にはほとんどの州で児童虐待に対応する法整備がなされていた。一方日本では、児童虐待が「社会問題」として関心を集めるようになったのは 1990 年代以降であり、対策は十分とはいえないだろう。日本では被虐児が適切な処置を受けていない。例えば親権を一部分や一定期間だけ制限するという決定がなく、親権争奪の抑止力になっている。両国における養子制度や諸施設の問題、また法整備と社会的啓蒙といった対応について議論した。

総括

本分科会では、日米参加学生が双方に対応する内容の事前ペーパーをもとに論点を共有してきた。このため、両国の制度や政策まで比較検討を加えることができたといえよう。

グローバル化や社会の構造変革のただ中で、日米両国は多種多様な社会問題を抱えている。両国の市民はこれらの社会問題のために、先が見えない不安を抱きながら生活している。その不安を打破しよりよい社会を構築していくために、現行の社会制度や政策の問題点を分析し、迅速に制度を改善していく必要があるだろう。そのために、本分科会ではまず現状を客観的に把握し、環境の変化に応じた対策を模索した。

またこの種の社会問題は誰もが少なからず当事者となり得るため、本分科会ではテーマごとの専門知識の有無にかかわらず、全員が様々な体験や意見を共有することができた。

この夏、私たちは現実社会に関してどれだけ具体的な解決策を提示できたのだろうか。一つ言えることは、両国がそれぞれ抱える諸問題についてテーマごとに考察を加えていった場合、文化的背景や社会構造について、日米が異にする点が自然と浮き彫りになるということである。例えば、一方の国が抱える「問題」について議論を始めようとした際、一方の国の学生がキョトンと「それは問題なのか？」と言い出すことさえあった。具体的な政策提言以前に、私たちは無意識にも抱いていた固定観念や既存の枠組みの存在に気付かされた。ここにこそ、次のステップである政策策定への重大なヒントが隠されているのかもしれない。

第5章

40人の夏、40人の声

会議参加者の感想

五十音順に掲載

40人の夏、40人の声

会議参加者の感想

安藤　彩

会議中に撮影した集合写真。皆あふれんばかりの笑顔でそこに佇んでいる。遠い昔に経験した淡い思い出のような、不思議な感触がその一枚に漂う。なぜ私たちは集まったのだろう。

昨年の夏からこだわってきたことがある。それは、大きな世界に住む小さな自分が、世界に対してできることは何なのか、その答えを模索することである。昨年の模索の結果、結局自分にできることは、一学生としてあらゆる問題にアプローチすることをやめず、考え続けることであるという結論に至った。おそらく誰でもたどり着き得るであろうこの結論を自らに確認するために、私は昨年のひと夏をすべて費やした。そして、たどり着いた結論を実行に移すための一手段として、私は日米学生会議の実行委員になることを選んだ。日米学生会議の経験を自分以外の誰かに味わってもらい、その中でそれぞれの社会における役割を考えてもらいたい、そのためだけに私は一年間、実行委員という肩書きをいわば利用し続けた。そしてそのことが自分にとって、第56回会議のテーマである「日米関係と私たちの使命」に対する私なりの答えのひとつであり、実行に移す糸口であった。大きな社会に対して自分ができる、草の根だが、しかし確実な行動であると確信していたのである。

日米学生会議をどのように位置づけ、その中でどのような経験をするかは、一人ひとりそれぞれ異なるものである。そんな日米学生会議実行委員の一員として自らに課した役目はただ一つ、第56回日米学生会議という、絵の枠組みを作成することであった。その枠組みをどのように色づけ、どのように飾り付けるかのすべての判断は、それぞれの参加者に任せられて然るべき。もちろん自分も、参加者の一人としてその枠組に、自分なりの嗜好を凝らしたペイントを施さなければならなかった。

私は、自分に課した実行委員としての役目を十分に果たせたのであろうか。今年の会議に参加した総勢79名の学生一人ひとりの中で、今年の日米学生会議はどのように色づけられたのであろうか。彼らの、そして自分の今後の人生の中に、今年の日米学生会議はどのように飾り付けられてゆくだろうか。それだけがただ気になり、不安で仕方がない。皆の色づけた絵が鮮やかだろうがモノトーンだろうが構わない。絵の位置づけが各人にとって大きかろうが小さかろうが構わない。ただ、私たち実行委員が未熟ながらも作り上げた枠組が、それぞれの個性の中で確実に色づ

けられ、それぞれの心のどこかに確実に飾り付けられているのをすべて見ることで、いつか、自分の実行委員としての役目に納得したいと願う。もちろん、すべて見ることなど到底できないということを知っているから、自分の役目をきちんと果たせたのかどうか、不安がなくなることはないだろことも、わかっている。

学生であり、大勢いる一般市民のたった一人にすぎない自分が、何をどのように考えても、何をどのように発信しても、大きい社会はそう簡単に変わるものではない。それを残念ながら認めなければならないということを、私は知ってしまった。それぞれの分科会の中で議論した内容、フィールドトリップで感じたこと、そしてそれらを通して見出した結論はあまりにありきたりで、1ヵ月を集団で生活することがなくても見出し得るほどのものだったような気もする。しかし、内容や結論がどんなものであれ、また人種的にも、言語的にも、精神的にも日本とアメリカの狭間とも言えるであろう空間の中で、1ヵ月間の集団生活をしたということ、世の中の問題を考え抜き、また相互理解に挑むべく仲間と過ごした夏が存在したということは、確かな事実である。そこに生まれた感動、友情、その他あらゆる感覚を79名で共有できたことが、自分にとってはこの夏の最大の意義であったと感じている。自分という存在の無力さを心の底で理解していながらも、自分そして自分たちにしかできない役割がどこかに必ず存在すると信じ、全身全力をぶつけ、何かに取り憑かれたかのように時間と体力をそこに捧げる者がいる。大きな社会はそれを笑い飛ばすかもしれないが、こうして毎年夏に学生たちが集結してくる事実こそ、日米学生会議の存在する意義であり、ここまでの70年間、会議が継承されてきた理由なのではないだろうか。

集合写真の中で、アメリカ側学生と日本側学生の79通りの笑顔がランダムにそこに並び、曇天の暗い空を彩っている。その笑顔の一つ一つが、未熟ながらも実行委員として1年間活動を継続してきた私の、最大の誇りである。第56回日米学生会議をご支援下さったすべての団体、企業の皆様。主催団体の担当の方々。OBOGの皆様。実行委員の活動に対する深いご理解と、合宿やミーティングへのご協力を下さった飯田家、坂口家の皆様。第56回会議の基盤作りへの協力、発送作業や選考試験の手伝い及び第56回会議への多大な応援を下さった第55回会議参加者のJASC MATESの皆さん。日米学生会議に応募してくれたすべての皆さん。そして第56回会議という空間をともに過ごしたすべての仲間たち。第56回会議を支えて下さった数え切れぬ程たくさんの方々に、心からの感謝を届けたい。そして話し合いの中で言い争いを繰り返しながらも、私に家族のような心地いい空間と刺激を与えてくれた実行委員の仲間たちに、面と向かっては口にできなかった言葉をここに残したいと思う。アメリカにも届きますように。

「ありがとう」

荒島　由也

あれは夢だったのか･･･とも思えるような非日常空間。夢は突然覚め、気がつくといつもの日常にポンと押し戻される。大量の写真は記憶を鮮明にするのは手伝ってはくれるものの、あの夏に出会った人々、あった出来事すべてを決して眼前に再現してはくれない。時の流れはいつだって一定方向に流れるだけで、戻りはしない。そうして時が経ってこのすばらしい夏もアルバムも見ながら思い出されるだけになってしまうのか。ああこんなこともあったね、といつのまにか自分から切り離されたモノになってしまうのか･･･

「ソンナノイヤダ。」

自分がこの夏を通して、得たものはなんだったのか、と自問自答してみるが分かれば苦労しない。感じたことはたくさんあった。英語好きだった自分が時に英語がいやになってみたり、日本側参加者を見て「日本もまだまだ捨てたもんじゃないなぁ」と感じてみたり、アメリカ人もイロイロいるなぁと思ってみたり。人好きの自分が１ヵ月も24時間だれかといることでフラストレーションを感じたのは特に発見だった。しかし、

「ニチベイガクセイカイギどうだった？」

という質問にはいつも答えに困ってしまう。これは参加者がもっともよく受けるだろう質問で最も答えにくい質問である。すごくよかったよ、といった後になんとも言いようがない感覚を覚える。確かに「よかった」のだが、そのあとにどういう人がいてどういうことをして・・と熱心に説明を続けたところで、そのよさが伝わるどころか、逆に「共有しているモノ」が違うことに気がつかされる。よさが伝わらないといっているわけではない。会議自体のことは伝わっても、自分が会議から得たことは伝わっていないという歯がゆさを覚えるのである。だから私は最近こう答えることにしている。

「うーん説明するのは１ヵ月かかるな、
何があるのか自分の目で確かめておいでよ。」

なんとも無責任な言い方ではあるが、いまの自分にとっては適切な答え方なのであろう。なぜなら、会議で得たものがまだ見つかっていないから。しかし見つかってないからといって特段あせっているわけでもない。会議を通して大量の刺激を浴びて、いろいろと考えたのは確かだ。だからこれからの生活の中でひとつひとつ血となり肉としていけばいいのだろう。そうすれば、この夏は単なる思い出ではなく、私の更なる行動に活かされて、私の一部となる。そこにこの会議の最大の意味もあるのだろう。私のそんな答えに唖然としている友人にもう一言必ず付け加えていることにしている。

「人がすごく魅力的だった。」

私が得たと確信できるのはひと夏を過ごしたワンダフルな仲間たちである。初めて顔を合わしたそのときから、まるで前から知っていたかのような感じで、話が弾

むのは不思議でならなかったが、それが日米学生会議なのだろう。この夏に会ったステキな仲間たちを私は忘れない。

私はこの特殊ですばらしい空間をもっと多くのひとにも知ってもらうため、そして自分が忘れてきたものを探すため、実行委員としてもう一年日米学生会議に関わる。会議を創っていけることに心から感謝し、興奮している。精一杯取り組んでいくつもりだ。

「そんな会議いいなあ、できたら参加してみたいなぁ。」

こう言う友人への私の言葉はもちろん決まっている。

飯田　智紀

第56回日米学生会議に参加しての感想を書く前に、とても個人的な内容で大変恐縮であるが、2004年5月25日に私が56回実行委員宛に書いたメールの一部を紹介したいと思う。

Dear JEC,

関東のJECは知っている人もいると思うけど、実は祖父が白血病で今入院しています。で2日前、ちょっと体調が急変して緊急入院し、三途の川に片足つっこんでしまったような状態になっています。医者が言うには…大変危険な状態にあり、今週が山場だとか。まぁ昨日は体調が少し改善し、川から足は出せたのだけどね、まだなんとも言えない状態です。白血病という病気は最近調べて色々と分かってきたのだけれども、とっても複雑なもので、特に祖父のケースは慢性白血病だったのが今末期の状態にあるらしく、そうすると急性白血病と同じ症状になるらしいのです。だからそこまでなってしまうとなかなか難しいものがあるらしく、苦しい状況です。昨日、実は英語勉強会の前に病院に行きました。自分が祖父に最後に会ったのはまだ比較的元気であったお正月だったので、ベッドで寝ている祖父の姿の変わりように最初は正直ちょっと戸惑いました。覚悟はしていたし、親にも言われていたから想像はしていたけど、うん、残念ながら想像していたより悪かったです。でも意識は凄くはっきりしていて、呆けてもまったくいないのでビックリしました。なんだか孫というのは不思議な力があるらしく、どうやら俺の登場がカンフル剤になったらしく、1時間半ぐらい一緒にいる間にどんどん元気になってしまいました。心配していたのが馬鹿らしくなるくらい、笑。若さの力ですね、うんうん。主治医の先生からは「お孫さんの前だからって頑張らないで下さいね」と注意されていたけど、痛みに耐えながら体をベッドから起こし、俺を見つめる視線は元気な頃の祖父と全く同じかそれ以上の力を感じました。オーラがあって安心した。

陸軍のエリートであった祖父はあまり多く語らない寡黙で威厳のある人です。個人的には老いたらなりたい祖父の理想像ですね、まさに。そのせいか、彼の影響力が実は大きく、今日会って改めてそれを感じました。そんな口数少ない祖父が今日お見舞いに行ったら「日米学生会議の調子はどうだ？」と聞いてきました。驚きました、本当に。大学の調子じゃなくて、JASCの調子だからね、笑。しかもこんな状態でも覚えていてくれた事が嬉しかった。祖母が言うには（看病のために祖母も同じ部屋にいたので）「智紀の会議の成果を聞くまでは死ねんな」なんて事を入院前は言っていたそうです。なんて答えていいか分かりませんでした。嬉しさ・悲しさ、なんだろうな。あとは8月帰ってくるまでもつのか…という現実的な不安が混ざり複雑な心境になりました。とは言っても感動して本人の前で涙するのもおかしいからね、笑っていました。その後担当医の人が部屋に来て、挨拶を俺がしたら祖父が「孫です。日米学生会議の委員長をやっています。」といきなり紹介してくれ、正直涙を堪えるのが大変でした。なんだろうね、あんまり人前では孫の自慢とかをしない人だからか、凄く嬉しかったと同時に認められた気がしました。はじめてかも、こう感じたの。そのせいか、そのシーンが何をやっていても頭から離れません。JASCの意義っていうのを祖父は俺が第55回会議に参加するのが決まったと話した時から高く評価してくれていたらしく、その委員長になった今、どういう会議をするのかを凄く楽しみにしていたらしいです、祖母曰く。この期待、なんとしても裏切れません。そもそも自分のためにも全力を尽くす事が当たり前だと思っていたけど、今はその思いがより強固になった気がします。本会議前2ヵ月という今日にこういう機会があったのは、本当に良かったと思った。

帰国して数日後、私は第 56 回会議の報告をするために祖父の墓に行った。しかし実際墓の前に立つと、何を報告していいのか分からなくなってしまった。第 56 回日米学生会議は成功したのか。1 ヵ月間何をしたのか。何をアメリカ人と議論したのか。日米学生会議の意義を見出すことは出来たのか。回答しなければいけない質問はどんどん頭の中に浮かぶのであるが、その回答をうまく言葉にする事が出来ない。そこで今回の会議に参加して私が一番強く思った事を報告した。

“ I was born to be a JASCer.”

このセリフは第 56 回日米学生会議で私が実行委員長として参加者全員の前で行った最初のスピーチの最後に言ったセリフである。今思えばよくこのようなくさいセリフを自分は言ったなと恥ずかしくも思えるが、これは決して当時日本で流行していたドラマの主題歌を意識したりしたわけではなく、心の底からそう思ったため自然と出てきた言葉であった。本会議が終わり、第 56 回日米学生会議の実行委員長としての仕事も残りわずかとなってきた今、自分が日米学生会議と出会ってから今まで何をしてきたかをしばしば回想する。そして私が日米学生会議と出会ったの

は偶然ではなく、運命だったのではないかなと本気で感じている。第 55 回日米学生会議に参加出来たのも、第 56 回日米学生会議の実行委員長に選ばれたのも、心強い 15 名の実行委員とともに本会議の準備を出来たのも、素晴らしい第 56 回会議の参加者達に出会えたのも、すべては偶然のようにも思えるが、運命だったのだと思う。私はこの様な運命にめぐり合えて、大変幸福である。

おじいちゃん、会議は無事終了しました。こんなキザな孫ですが、どうか今後も見守って下さい。日米学生会議は…私の誇りです。

伊東　孝哲

日米学生会議・・・。参加してからもう 1 ヵ月以上が経ってしまった。しかし、僕にとってそれは、つい昨日のようにも思えるほど、力強い思い出となっている。

そもそも、日米学生会議の選考に通ると思っていなかったというのが本音だ。英語が特別に出来るわけではない自分が、1 ヵ月間英語のみで会議をすることは、全くもって想像できなかった。だからこそ、自分が日米学生会議に参加できると分かったときは、喜びとともに、多くの不安に襲われた。本当に自分でいいのだろうか、自分に何ができるのだろうか、という思いに駆られながら日々は過ぎ去っていった。

春合宿も正直周りのみんなに圧倒され、自分の不安感をより増大させるだけであった。しかし春合宿で感じたのは、みんなの英語の能力以上に、みんなの人間としての面白みであった。40 人の日本側代表は、40 色の独自の光を目映いばかしに解き放っていたのだ。

そんな春合宿が過ぎ、大学が忙しく日米学生会議の事前勉強会などに全く参加できず、焦りだけが募り、出発日になっていた。集合場所に集まる途中、幾度も「帰ろうかなぁ」「帰りたいなぁ」という思いに襲われたのも今思うと懐かしい。
しかし、実際にみんなと会った瞬間にその思いは消えうせた。彼ら彼女らは、最高の笑顔で僕を迎えてくれた。

アメリカに行ってからは、本当に毎日があっという間に過ぎていった。しかも、その毎日は、本当に濃すぎるほど濃い日々だった。もちろん辛いこともあったし、色々な場面などで懐疑的な思いをしたこともあった。しかし、そうであったとしても、すべてが本当に充実したものだったと自信を持って言える。
特に、今回の学生会議を通して感じたことは以下の三点である。

○英語はコミュニケーションそのものではない

⇒日米学生会議中は英語を使ってコミュニケーションを取る。もちろん、話せるにこしたことはないのは事実である。しかし、英語がコミュニケーションそのものになるのではないのだ。すなわち英語はコミュニケーションを支える役割以上にはなにも果たさず、より深い友情関係やより深い議論などを進めていくためには、人間的魅力やその人自身がより重要になってくると感じた。

○相手の意見を聞く力と自分の思いを言う力の必要性

⇒『アメリカでは自分の意見を言わないとやっていけない』とよく言われる。もちろんこれは事実であろう。しかし、この1ヵ月間を通して感じたのは、最も大事なのは、しっかり相手の意見・考えを聞き、その上で自分の意見・考えを述べることであると実感した。そういう人が議論の中でもより多くの敬意と支持を集めるのだ。

○最高の仲間に出会えた

⇒日米学生会議で最も感謝していることは、これに尽きるだろう。1ヵ月間の間ずっと仲間と寝食をともにする。これは本当に大きなことであったし、今までの自分の人生の中でこんな経験はなかった。1ヵ月間の中で仲間の嫌なところももちろん垣間見るが、でもそれ以上にこの濃密な時間をともに過ごすことで、本当に最高の仲間になることができた。それは、日本やアメリカなどといった国境を越えたものである。

以上が、僕がこの第56回日米学生会議で感じ取ったものである。現在僕は、この56での思いを胸に第57回日米学生会議の実行委員を務めている。多くの仕事と毎日格闘しており、他に割ける時間が本当になくなってしまったというのが現状だ。しかし、そのことに対して全く持って苦だとは思っていない。それは、僕が経験することが出来た日米学生会議という土壌に、僕たちの新しい色と光を織り込んで次の参加者に提供できるからだ。

最後に、みんな本当にありがとう＆これからもよろしくね♪

海野 慧

今からちょうど70年前、日米関係を危惧した学生たちが、日米関係改善という目的を、相互理解という手段を用いることで、達成しようとした。しかし、70年という時の流れは日米関係を良好なものへと変えていった。気がつけば本来目的であった「日米関係改善」が達成され、今までは手段であった「相互理解」が、現在は目的へと摩り替わっているのである。

日米学生会議は今転換期にいるのではないだろうか。

動態的な国際関係において大変重要な位置づけにある日米関係を、今後どのように変えていかなくてはならないのか、どう変わっていくべきなのかを考えることはできても、実際に何かを成し遂げようとすることは非常に困難である。

では、日米学生会議を経験した人間に、将来を託し、日米関係を変えてもらうとするならば、どのような経験をすることが、人々に大志を抱かせ、世界へと羽ばたく人間へと変えていくのか。つまりは、どのようにすれば「日米学生会議」においてでしか経験できないことを確立していくのか。そういったことを模索していかなくてはならない時期にきているのではないか。

この答えが絶対的に正しいとは少しも思わない。しかし、「日米学生会議」のあるべき姿を、もう一度再考してみるべきではないかと感じた。

大地 悠子

本会議が終わってからおよそ1ヵ月が経過したが、私は未だにこの夏の体験をうまく説明することができない。ただ1つ、確かなのは「JASCは私にとってとても良い経験だった」ということ。会議中に書いていた日記から抜粋しながら、私の本会議を振り返ってみる。

7月25日　～直前合宿 @検見川～
それまでアメリカに行く実感があまりなかったのに、急に本会議がスタートすることへの不安が大きくなった。朝ごはんがあまり食べられなかったが、スキット練習をしたら、お昼は腹ぺこだった。

7月25日　～Hawaii到着～
日差しが強く夏らしい。風が気持ちよかった。Amedele と合流。ルームメイトのTina はとっても優しいし、日本語も話せるのでかなり安心だ。でも、甘えることなく英語で話しかけるように努力して、練習しなきゃ！

7月28日　～Hawaii～
明日行くPearl Harbor について、小グループでディスカッションをした。私は歴史についてあまり詳しく知らなかったのだが、アメリカ人が意外にたくさん知っていてビックリ。「アメリカの歴史は短いから、深くやるのよ」と。なるほど。話は、現在の戦争介入や戦後処理にまでおよび、新しい発見もあった。戦争は嫌なことだけど、人間の歴史の中でなくなった時はない。動物同士が殺しあうのは、human nature なの？？

8月1、2日　～移動 Hawaii to San Francisco～

コナ島で見た夕日がきれいだった。サンフランシスコに早朝に着いてから、Amedeleの到着を待つために空港の床に横になって寝ていた。すごく寒かった。午後のセッションでは、これまで知らなかったアメリカの移民政策について知ることができた。いろんな民族が集まったアメリカで、特定の人種を差別するのはどうしてだろう？それにしても、どうしてたくさんの人がアメリカに惹かれて集まってくるのかな？ホームステイ先では、おいしい中華をごちそうになり、あったかいベッドで眠れた。みんなと離れて、普通の家庭でゆっくり過ごせて幸せ。

8月5日　～アメリカ赤十字見学 @Washington D.C.～

分科会で、赤十字の展示を見に行った。赤十字は中立の立場を取り、戦争の現場では兵隊も一般人も分け隔てなく援助をする。助けを求める人がいたら、手を差し伸べる。単純なことではあるが、議論をしているよりも実際に行動を起こすのは大変なことだ。私は何かをする前に考えすぎて、実際には何もしていないことが多いので、改善したいものだ。JASCでもそう。部屋に戻ってからルームメイトのJuliaと話して、私のJASCでの疑問をぶつけた。私は、ここWashingtonで一体なにをやっているのだろう？なんのためにJASCに参加したのだろう？初めに持っていたvisionはどうなった？なんだか、つらい…。

8月7日　～Joint Round Table～

本会議の半分が過ぎ、全体でのreflectionがあった。みんなの前でこれまでの感想、改善点、フラストレーションなど、なんでも話したいことを話す。私は自分が何をしにJASCに来たのかわからなくてつらい、ということを伝えた。大勢の前で泣いてしまってかっこ悪かったけど、このJASCのメンバーなら分かってくれる、聞いてくれるという思いがあったから言えたのだと思う。他の人が抱えている悩みだとか、JASCの良い点、悪い点についてshareできて良かった。気持ちが楽になった。

8月8日　～夜のフリータイム～

夜、Hannaと話をして楽しかった。彼女の話で、emotionとlogicはどちらも必要だが、気持ちの方が大切、という話に共感！！"Have fun"がいちばんだね。私はただJASCがおもしろそう、参加してみたいと思って応募したのだった。楽しむためには、私の疑問について向き合う必要もあるが、笑顔でいることのほうが重要だ。ここまでが私のJASC前半である。私は本会議が始まる前から、英語でのコミュニケーションに対する不安があった。これまで受けた英語教育は、書くことが中心で英会話となるとまったく自信がない。春休みの選考時の英語面接でも、自分自身が何をしゃべっているのか分からなくなったほどだ。日本語だったら楽に話せて、積極的に話し合いに参加できるが、英語となるとついつい聞き役に回ってしまう。話題が大学で勉強している医学分野とは違う、ということもあるが、世の中に対してあまりに無知な自分が嫌になった。本来のなんでも首をつっこみたがる自分と違う

ような気もするが、英語のディスカッションで静かに聞いている自分も自分である。なんだか、「私」という存在がよく分からなくなり苦しくなってしまったのだ。自分の求めている理想像が、現実とかけ離れていたのだろう。

しかし、JASC の前半でとことん自分に向き合うことができ、何かが吹っ切れたような気がする。心に余裕ができ、後半は（疑問は完全に消えなかったが）楽しい気分で、笑顔でいられることが多かった。会議のまとめであるプリンストンのフォーラムでは、全員の前で英語のスピーチをし、私の気持ちや夢について伝えることができてよかった。私の夢は"keep smiling ^o^"、いつでも笑顔でいられる生き方をすることだ。

最後に、日記の最後のページ。これが私の JASC に対する率直な感想である。

8月20、21日　～帰国 @山形新幹線つばさ～
プリンストンをバスで出発したが、やはり"JASC time"で遅かった。Amedele との別れは、想像していたより簡単にできた。生きていて、会いたいという気持ちがあればいつでも会える！日本に到着、成田ではゆっくり別れを惜しむことなく流れ解散。JASC らしい。Japadele はまたすぐに会えるので、ずっと簡単にバイバイできた。そして今、私はひとり山形に向う新幹線の中にいる。がらんとした新幹線の中に一人で座っていると、これまでの 1 ヵ月が夢のようで不思議だ。それでも、私は"keep JASC-ing"、JASC 中のように、ものごとの意義や目的を考え無駄に苦しむことを続けるだろう。JASC 中のように外の世界に対して常にアンテナを張り、新しいことをキャッチしようとする姿勢は変わらないだろう。JASC 中のように、人の話をじっくり聞いてそこから何かを学ぼうとする姿勢も変わらないだろう。JASC を振り返ってみようと書き始めたが、いろんなことがありすぎて自分の中でうまく消化しきれていない。とりあえず駅弁でも食べて、ごはんを消化しよう♪久しぶりの米だぁ～！

大宮 貴史

"The color of JASC"

この会議の参加者は色である。その色は様々で、濃さ薄さもいろいろである。そして、その色を用いて一枚のジャスクという大きな紙に思う存分、それぞれの色が個性を思いっきり発揮し、ひとつの大きな作品が出来上がった。

日米両国から 40 人ずつ、生まれた場所も、物事の考え方も、生活環境も全く違

った学生が1ヵ月という期間生活をともにした。79人の異なった学生が、お互いを否定し合わずに受け入れ、尊敬していく。この空間はどこか心地が良い。宗教や文化の違いから相手を軽蔑し憎み、自分の主張のみを通そうする風潮からは程遠い世界である。

今、この日米学生会議を振り返ろうとする自分がいる。どこまで振り返ればよいのだろうか。きっと始まりは、この会議を初めて知り参加しようと思った瞬間から、終わりは今回の会議が終了した時点までだろうか。いや、まだ終わっていないのではないか。

この期間を通して自分自身、何を得たのかを表現するのは難しい。また、この1ヵ月で人間として大きく成長するとは思っていない。この会議がゴールだとも思わない。むしろ、この期間をきっかけとしてこれからの人生の何かヒントになったのではないかと思う。何か自分のこれからの方向性に役立ったというべきだろうか。

"There is no one way to describe this conference"

会議を通して何かを獲得したというよりかは、何かを感じた、触れたという抽象的な言葉しか表現方法が見つからない。五感を最大限に使って何か感じ取ったのである。それは、今回訪れた土地であり、空気であり、人々であり、文化であり、そして学生会議の参加者である。

ジャスクという大きな絵は、世界にただ一つの"第56回日米学生会議"という額縁に永遠に保存される。そして、それぞれの色はまた新たなの紙へ、またひとつの色として描かれていくのであろう。

最後にこの会議に携わっていただいた多くの方々、そして誰よりも私の活動に理解し、サポートをしてくれた家族に感謝の意を表したい。そして、JECのみんな一年間ありがとう。そして、JASCERS!!!本当にありがとうございました。

尾形 樹穂菜

「日米学生会議」その存在を知ったのはちょうど2年前くらいのことである。英語資格試験の受験会場でたまたま手にしたパンフレットに書かれていたそのメッセージを目にした瞬間、なんだかよくわからないけど「これだ！」と直感で思った。今思えばそれが始まりであった。そしてその年行われた「ポスト9．11」に関する日米学生会議シンポジウムに足を運んだ私は、会場で真剣に繰り広げられる参加者

のパネルディスカッションを前にし、衝撃を受けた。第 55 回日米学生会議実行委員をはじめとする彼らの戦争やテロリズムといったことに対する意識の高さに圧倒されたのである。当時通学社員として働きつつ通学していた私は毎日大学と職場を往復するのが精一杯の毎日で、正直言って他人のこと、社会のことを考える余裕を持っていなかった。そしてそんな中、私の中ではテロリズムに対する脅威、アメリカに対する脅威は高まるばかりであった。しかし、かといって今の自分に何ができるのかさっぱりわからなかった。そこで私は、悩んだ。何のために大学に通い、何故に勉学を続けているのか、そんな疑問ばかりが渦巻き、ビジョンを見失う日々。そんな中出会った日米学生会議のメンバーは刺激的で、その姿はまぶしすぎるほどまぶしかった。そんな彼らに触発された私は、その日、心に決めた。「絶対に日米学生会議に参加したい。」しかしながら、そのときは残念ながら仕事などの諸事情により、応募を見送ることにした。

そして迎えた一年後、ついに応募の時期がやってきた。そして「テロリズムの背景にあるものは何かアメリカ人とともに考えたい」そう面接官に緊張しながら答えた私は、「日米学生会議」に参加することになった。しかし春合宿で出会った仲間たちとさまざまな場所をフィールドトリップとして尋ね準備を進める一方、事前に提出するレポート（ペーパー）作成に苦戦し胃の痛い毎日が続いた。執筆を始めたものの、実際に自分がどうアプローチできるのかということや、素朴に身近に感じている疑問からどんどん離れ、理論のみで進めてしまい、ついには筆が止まってしまったこともあった。そんなこんなで何とか自分の納得のいくものを書き上げることができたのは締め切りからだいぶ経った頃であった。その時点で、自分のあまりの情けなさにがっかりした。それと同時に何とか原点を思い出し、自分のレポートをアップロードできたことが嬉しかった。

そして迎えた本会議。「今、再考のとき一日米関係と私たちの使命」その大きなテーマを追求する前に、私はまず自分の中にある壁を打ち破らなければならなかった。英語がわからない。そのことでまず劣等感を感じた。これまで片言の英語で留学生と交流を持ったりしてきた経験上、「話す」ということに「英語力」はさほど障壁とならないと信じてきた私であったが、そんな信念は一瞬にして崩れた。これまで準備をしてきたことの十分の一くらいしか伝えることのできない自分に腹が立ち、最初の三日間くらいは、分科会の時間が苦痛で仕方なかった。また私のような英語力不足の者に気を使ってくれるアメリカ側参加者もいたが、全員がそうというわけではない。容赦せず速いスピードで話し続ける参加者もいて、わからないと意思表示する間もないことも多々あった。しかしそんなとき、「わかる？」としきりに気遣ってくれるアメリカ側参加者、わからないことを通訳してくれる英語に堪能な日本側参加者が助けてくれた。そして次第に私は分科会のメンバーとも打ち解けることが出来た。

私がこの１ヵ月、日米学生会議で学んだもの－それは「やさしさ」である。もちろんアカデミックな話し合いやパネルディスカッションの中で学んだことも多い。しかしこの１ヵ月どうだった？と問われれば、私は間違いなくこう答える。時差ぼけがなかなか直らず居眠りしがちな私に、「つらいよね？」と声をかけてくれた仲間。支給された飲み物を飲み干してしまい、喉がカラカラになってしまった私に、「私もう一本飲み物持っているから、これあげる。全部飲んでOKだよ」といってジュースを差し出してくれた仲間。英語力のなさに自信を失いかけていたとき、「You can do it!」と声をかけてくれたルームメイト。分科会のフィールドトリップ中、時間を勘違いして一時間以上も遅刻してしまった私に「心配してたわよ。とにかくじゅほなが無事でよかった。大丈夫よ。」と声をかけて優しく抱きしめてくれた分科会のメンバー。そして私のつたない英語をフォロー、理解してくれた仲間。そして朝まで語りそのままだらしなくロビーで座ったまま寝てしまったとき、そっと毛布をかけてくれた仲間。誰がかけてくれたのか実は今もわからないが、その朝あったかい毛布の中で目を覚ました私は幸せでいっぱいだった。

１ヵ月間ほぼ24時間共同生活をするということは大変なことである。第56回日米学生会議参加者一人ひとりが異なるパーソナリティを持っているわけであり、それはよくも悪くも時にはぶつかることもあろう。しかしながら、そんな参加者であり仲間であるJASCers(“Japan America Student Conference参加者”の略)一人ひとりのやさしさに支えられ、私の中で何かが解け出した。

頑固な性格で昔から融通性のない私だが、会議参加後少しソフトになったような気がする。いろんな人に出会い、毎日語り合ったことで、「さまざまな考え方の人がいて、みんな違ってみんないい」ということを実感したからかもしれない。ありきたりかもしれないが、１ヵ月間（約24時間×30日間）をともにした仲間の、一日ではわからない良さをたくさん見つけることができた。そしてありのままの自分でいることができた。世の中には本当にいろんな考えを持ち、さまざまな活動をしている人がいるということを肌で感じた瞬間であった。

「世界情勢が悪化する中、自分が何をしたらいいのかわからない」そんな心境で参加した私だが、もっと大切なことを忘れていた。それは今自分にできることから実行していくこと。すなわち社会へコミットしていく道はいくらでもあるということだ。それまで私は自分と社会との間に壁を感じていた。どうせ学生だからと、「学生」という身分に甘えていた。しかしながらこの会議に参加して多くの仲間たちと出会い、学生だからこそできることがあるということを痛感した。確かに社会的に見れば最も無力な位置にいるのは学生かもしれない。しかしながら、最も未来への可能性を有しているのも学生であるといえよう。私がこの会議でみんなからもらったもの、それは目の輝きである。会議中真剣に語り合い、考える仲間の瞳は澄んで

いた。美しかった。ハワイの海に負けないくらい!!

最後に会議中私を支えてくれたすべての JASCer たちに感謝の言葉を送りたい。「ありがとう。」そして今回の参加に当たっては、IEC、スポンサーの方々の支援や家族の了解、バイト先の仲間や友人の助力に感謝の気持ちでいっぱいである。そうそう、とんでもないくらい早口で恋の相談をしてきてくれた某アメリカ人学生にも感謝したい。確かに始めはわけもわからず聞いていた（笑）。しかしながら、彼女がいなかったら、私のリスニング力に変化はなかったのかもしれない。
これからこの中身がギュッと詰った1ヵ月間の体験を活かすも活かさないも私次第。今後も宗教や文化差にとらわれずさまざまな人たちといろんなことを語り合い、ビジョンを持って生きていきたいと思う。そして「世界は広い」、人間の瞳は本来「澄んでいる」ということをいつも忘れずにいようと思う。

久保田 豊乃

「1ヵ月、アメリカどうだった？楽しかった？」

日米学生会議が終わって帰ってくると、周りの友達に聞かれる。そして私は複雑な気持ちになるのだ。

「楽しかったけど・・・・・、色々大変だったよ」

これが私の答えだ。楽しかったけど、大変だった。1ヵ月、ほぼ毎日つけていた日記を読み返すと、毎日毎日が私にとってチャレンジであったことがわかる。行く前から、私はスピーキング力がないから、絶対向こうに行ったらしゃべれない自分に落ち込むのだろうな、とわかっていたが、これ程までに自分がどうしたらいいのかわからなくなるとは思わなかった。わかりたいのにわからない、自分がわかっているのかがわからない、日本語だったらレクチャーの理解も深まるのに、日本語だったらもっとうまく自分の意思を伝えることができるのに・・・・・。いくらコミュニケーションの手段は言語だけではない、と言っても、私の前には言語の壁が大きくそびえ立っているように毎日感じていた。そして周りと比べては、劣等感を強く感じている自分がいた。

自分の考えていることをアウトプットする機会が欲しい、アメリカの学生や日本の他の大学生がどんなことを考えているのかを知りたい！というのが私の参加動機だった。参加が決まり、私は本会議前、つまり事前勉強の時からワクワクしていた。これからどうなるのだろう、アメリカに行ったら何か得ることがあるはず、何かしらの成長ができるはず、という期待感があった。自分の出来ることは何でもやってみよう、そんな気持ちで本会議を迎えた。しかし、フタを開けてみてどうだろう。

自分の劣等感の強さにこんなに苦しめられたことはない。私は自分自身と向かい合い、考え続けていたと思う。そんな自分の周りに、仲間の優しさや気遣いがあったことを今、痛感している。誰もがopen mindで自分を受け入れてくれるのが当たり前であったが、大学に戻ってみると、そんな空間は夢だったかのように思える。日米学生会議は「異常空間」である。ネガティブなストレスもポジティブなストレスも一気にやってくる。ひと夏を振り返ると、やはり一言では言い表せないのだ。

ハワイの美しい空と裏腹に感じてしまう不安や緊張。Diamond headで見た深い海の色。サンフランシスコで受けた温かいもてなし。ホストのChrisが作ってくれた豪華なランチ。ワシントンで見たホワイトハウスと黒人の住むコミュニティ。ぽっかりなくなってしまった世界貿易センタービルの跡地。分科会のみんなとこれでもかというくらい一緒にいたこと。プリンストンでのフォーラム。そしてたくさんの笑顔とhug。

「楽しかった」もしこの言葉だけで、私がこの56回日米学生会議の感想を言えたら、どんなに簡単か。その言葉で一見本当に「楽しかった」んだなと他人に感じさせることは簡単だと思う。しかし、私はむしろ「大変だった」と言えることで、本会議を締めくくれることが嬉しいと今は感じている。

黒田　佳代

「第56回　日米学生会議」は、私にとって充実した1ヵ月であった。これほど多様な人に囲まれながらの集団生活、これほど多彩なトピックについて真剣に考えることなど、すべてが私の人生において初めての経験であった。

出発の数日前から、熱を出し倒れてしまった。普段、めったに風邪などひかない私が、よりによって今風邪をひくなんて…と恨めしくも思ったが、とにかく元気になることに専念した。事前活動にあまり参加できなかった上、体調不良となった私は、かなりの不安を抱えての会議スタートとなった。しかし、一旦会議が始まると、月日はあっという間に過ぎていった。

ハワイでは、初めてのアメリカ側参加者と出会い、これからの会議に大きな期待を抱いた。パールハーバー訪問を通じて、日米間での戦争観について話し合った。互いの認識の違いに大きな発見を見出し、今一度歴史を学び直す必要性を感じた。

サンフランシスコでは、第二次大戦中での日本人キャンプ収容の話を、体験者の方から直接お話を聞くことができた。恥ずかしながら、その事実すら知らなかった私は、大きな衝撃を受けた。歴史教育の偏りを感じるとともに、もっと真実の歴史

を知りたいと思った。また、ホストファミリーとの心温まる交流。2泊3日ではあったが、家庭の中で一緒に過ごさせて頂いた経験は、何よりも貴重なものになった。私がステイさせて頂いた家庭は、なんと「ボートハウス。」ボートの上で生活するなんて、考えたこともなかった私には、毎日驚きの連続であった。ホストファミリーとの交流を通して、生き方の多様性を学ぶことができた。私たちを受け入れてくれたホストマザーには、とても感謝している。

ワシントンＤＣでは、たくさんの主要機関訪問を通じ、アメリカという国の、世界に対する役割の大きさを改めて感じた。ただ、ワシントン滞在中に、風邪をぶり返してしまった。ひどい咳と体のダルサが私を襲った。そんな中、周りの皆が親身になって私の事を心配してくれた。皆の優しさが心に響いた。本当にありがとう！

最後のサイト、プリンストン。自然と歴史的な建物が共存するキャンパスを歩きながら、アメリカにおける大学の位置づけ、学問を学ぶことの意味を、考えさせられる機会となった。ＮＹでは、高層ビル、忙しく歩き回る人々、次々と走る黄色のタクシー等、テレビで見かける光景が目の前に広がり、街の大きさを感じることができた。グラウンド・ゼロは工事中であり、この現場で9・11の大惨事が起きたという実感がわかなかった。それでも元気に復興してきているＮＹの街を見て、前に進むことの大切さを学んだ。

会議の中で、何度も行われた討論の場。参加者のレベルの高さにただ圧倒されるばかりであった。何かを言いたい、でも言えない、自分自身との葛藤の連続であった。いつも一生懸命な周りの人に支えられ、少しでも私にできることは何かと考えるようになった。少しでもいいから、自分のできることから始めようと思えるようになった。周りと自分を比べるのではなく、自分自身が少しでも成長できるように努力することが大切だと学んだ。

日米学生会議を通して、たくさんのことを学んだ。日米関係に対する知識や興味が広がり、もっと知りたいと思うようになった。広い視点から、物事を考え判断できるようになりたいと思うようになった。そして何より、他の参加者との出会いは何物にも代えられない宝物だ。日本全国、アメリカ全土から集まった個性豊かな人たちとの交流は、刺激に満ちた貴重なものだった。これからも、この交流の輪を大切にしていきたいと思う。

最後に、会議を支えてくださった関係者の方々、OB. OGの方々に感謝の気持ちを記したい。たくさんの方々に支えられている、貴重な会議に参加できたことを、本当に感謝している。これからの”日米学生会議”がますます発展することを願っている。

坂口　紋野

がむしゃらに駆け抜けた一年間だった。学校の勉強、サークル、友達との生活で既に忙しく動き回っていた私が、JEC という重責を務めることを決意したのも、55 回会議の終盤での熟慮の末である。常に挑戦者でありたいと思っている私を大いに奮い立たせたのが、JASC という場を提供する EC への挑戦であった。

何のために、第 56 回日米学生会議の実行委員をやっているのか。55 回会議が終わって、この大役を引き受けてからというもの、自問自答を繰り返していた。想像以上の雑用が私の目の前に立ちはだかっていたし、青空に大きく描いている本会議が実現できるのかも分からないまま、一年をかけてひたすら事前準備を重ねた。正直に言うと、いったい何のために、目の前の膨大な仕事をこなしているのか、本会議とどう関連があるのか、分からなくなるときも多かった。

そんなとき、私を支えていたのは、第 55 回日米学生会議の思い出と、先輩の支えと、JASC に対する情熱を持ってともに汗を流している実行委員のメンバーであった。日米学生会議の意義を信じ、そして、それを次世代へ伝えていきたいという強い思いのみで、自分を奮い立たせていたように思う。

本会議のことを話し出すときりがないのでここでは割愛するが、とにかく本会議は 2004 年の夏に終了した。もちろん、本会議への反省は尽きない。連絡の不徹底や時間厳守の不徹底や、EC 同士の連絡ミスの場面があったことも否定できない。しかし、言語の壁を越え、文化を越え、アイデンティティが異なる 79 人が偶然同じ場所にいて、互いを理解しようと努力した事実は誰にも変えられないと思う。ジグソーパズルは、ワンピースだけでは絵の全体像がどのようなものか皆目検討もつかないが、時間をかけてピースとピースを組み合わせることで一枚の絵が出来上がる。それと同じで、第 56 回日米学生会議に参加した 79 人のそれぞれが、手を取り合い、どこかしらで繋がっていることによって、56 回日米学生会議という全体像が完成したのだと強く思う。誰かが欠けていたら、その絵は完成の日を迎えることがなかったはずだ。

本会議が終わって、独り JASC について振り返ることも多くなる。「参加できて良かった！ありがとう！」という多くの参加者からの手紙。分科会のメンバーの贈り物。かけがえのない 16 人の実行委員たちと撮った数少ない集合写真。それらを見る度に、一年間、JASC に携わってきたことは、今の私にとって『自信』となっていることを感じる。知識面はもちろんのこと、問題解決能力としての知恵、そして私らしい感受性はいつまでも磨いていきたいと改めて感じている。また JASC で得た友情、高い志、熱い思いなどは、今後の私の生活の原動力になるだろう。
最後になりましたが、会議の運営・実行を支えて下さった国際教育振興会（IEC）、

賛助してくださった財団法人、企業の方々、そして私を一年間支えて下さったすべての方に心の底から感謝しています。ありがとうございました。日米学生会議の運営に関われた幸運を、未来の人生に活かしていきたいと思います。

佐藤　智紀

この夏を振り返るとき、決まって夢であったかのように思う。本会議が行われたこの夏の1ヵ月の経験、思い出が、心の中にきれいに収まらず、宙に浮いているような感覚。そのような感覚がつきまとって離れない。なぜだろうか。

無理もない。日米学生会議での経験は、あまりに日常からかけ離れているからだ。全国、全米から集った仲間とともに過ごす日々。英語が飛び交い、真剣に語り合い、議論を尽くす空間。バックグラウンドを異にする者と、同じものを見聞きし、意見を交わし、友情が育まれていく場。そもそも、この夏立っていた場所はアメリカという異国の地である。この夏を取り巻くすべての環境は、自分にとって非日常性に満ちていた。そのような非日常的な日々を、普段の生活に戻ったいま振り返れば、咀嚼しきれず、心の中で宙に浮いたように感じるのはごく自然なことだろう。そしてその経験を、宙に浮いた状態から落ち着かせ、心の引き出しに収めようとしてもうまくはいかない。その経験はとてつもなく大きく、様々な要素で複雑に絡み合い、今まで想像もしなかったようないびつな形をしているのだ。これまでに自分が形作ってきた、どの心の引き出しの形状にも当てはまらない。この夏がまるで夢のように感じられると同時に、それをうまく飲み込めない日々が続いている。

第55回会議に参加したときにも、このような感覚を覚えた。第55回会議が、自分にとって初めての国際交流の経験だったことから、まさにそれは、初めて体感する非日常的な、強烈なインパクトをもった世界だった。そして、そこから「何か」を得たと感じていた。そこで出会った仲間たちは明白だったが、それ以外の「何か」を。第56回会議の実行委員として奔走し続けたその後の一年間、その「何か」とは何なのか、さらには、「何か」をもたらした日米学生会議とはそもそも何なのか、どういう意味をもつのだろうかと、自身に問い続けることになった。

実行委員になった当初、第56回会議は私にとって当然意味をもつものだった。一年間の準備活動に、持てる限りの力を注ぎこむ器としての第56回会議が、意味のないものだなどと考えるはずはなかった。大学に入学してから、何か一つの活動に集中してこなかった自分にとって、第55回会議で出会った仲間とともに、次の新たな会議を創りたいという強い思いが私を動かしていた。他の実行委員とともに、

一つのものに向かってともに活動すること。それだけで十分だった。自分にとって、第 56 回会議は前提としてそこに向かっていくものであり、連綿と続く一つの国際交流の事業として成し遂げなければならないものだった。

しかし、それでは第 56 回会議の、ひいては日米学生会議の意味づけとしてあまりに弱いということを、以降の準備活動の中で感じることとなった。というのも、自分にとって意味のあるものが、社会にとっても意味のあることだとは限らないからである。特に、財務活動を通してそのことを痛感した。今日の社会にとって、中でも日米学生会議にこれまで関係のない人々や団体、企業にとって、この会議そのものに意味を見出すことができなければ、支援するインセンティブなど起きないのだ。70 年の伝統があろうが、そのようなことは社会にとっては関係ない。長く続いてきた会議だからといって、引き続き開催していかなければならない理由などどこにもない。所与としての第 56 回会議ではなく、その意味を一から考えること。「会議ありき」ではなく、なぜ 2004 年に第 56 回会議を行わなければならないのか。その根本的な理由を考えることが必要となった。

それに答えるための糸口が見つかったのは、第 56 回会議への応募が始まった 2 月頃だった。秋から準備を進めてきたこの会議に対して、その趣旨に共感し、ぜひとも参加したいという熱い思いが全国から集まった。私たち実行委員が形作ってきたものに対し、共感してくれる人がいるという事実、自分たちが企画してきた会議に参加したいという人が少なからずいるという事実が、素直に嬉しかった。新たにこの会議に集う仲間がいること。当たり前のことであり、事実としてはわかっていたが、応募の文章が何通も送られてくるようになってから、次第に実感をもって理解できるようになった。そして、第 56 回会議を開催する意味を、姿が見え始めた参加者を含めて考えるようになっていた。

その問いに対する答え、すなわち第 56 回会議の意味を自分なりに見出せたのは、日本側参加者が初めて一堂に会した、5 月の春合宿のときだった。それまでは頭で理解していた「新たな仲間が集う」という事実が、目の前で具現化したときである。思わずはっとした。それまでは、会議のために実行委員が準備活動をし、参加者がそこに集うという認識だった。しかし、新たな仲間を目の前にしたとき、実行委員を含めた、会議に参加する学生のためにこの会議はあるのだと痛感した。「会議のための会議」ではなく、「参加者のための会議」だと。この機会を通じ、参加者が「何か」を得て成長するために、第 56 回会議を開催するのだと。それこそがこの会議を開催する目的であり、参加者の成長こそがこの会議の目標であると悟った。

それでは、この会議から得る「何か」、そして成長とは何を指すのか。そしてそれは、いま日米学生会議を行わなければならない理由に足るものなのか。

自分に関していえば、二度の日米学生会議を振り返って、そこから私が得た「何か」とは、「自分をより深く知った」ということである。そして、それを内面的成長だと捉えている。二度の学生会議を通して、本当に様々なバックグラウンド、個性をもった仲間と出会った。自分とは違う意見、考え、感覚をもった仲間たち。そしてその半分は、異国のアメリカの学生である。そのような仲間たちとともに過ごした夏は、まさに自分とは異なるものに囲まれ続けた1ヵ月だった。私にとって日常的な言語ではない英語を使って議論し、同じものを目の前にしていながら違う意見や考えにぶつかる。自分を曝け出し、そして違うものに曝され続けることによって、自分が徹底的に相対化されていった。ましてや、第56回会議では、自分が立っていた場所自体が日常とは異なるアメリカという地だった。自分にとって当たり前ではないもの、自分とは異なるものに常に対峙したことによって、自分がどのような意見をもっているのか、自分がどのように考えているのか、自分がどのように世界を見ているのか、つまり「自分とは何か」を考え、より深く知ることができた。さらには、実行委員としての一年間の活動を通して、その苦楽を常にともにした他の実行委員を理解し合ったこと、つまり、それぞれがどういう人間なのかを理解し合ったことによって、「自分をより深く知る」ことができた。以上のような経験が、いまだ心の引き出しに収まりきらないものの正体である。

参加者一人ひとりにとって、第56回会議から得た「何か」は異なるだろう。しかしながら、その中の一つとして—個人的な経験の一般化を恐れずにいうが—誰もがこの会議を通して、「自分を知る」経験をしたのではないだろうか。アメリカという異質なものと常に向き合わねばならず、そしてまた、日本側の参加者の中でさえ、互いに刺激を与え合える仲間が集まっている。そのような環境の中では、誰もが、自己が相対化される経験をしたのではないだろうか。日米学生会議を通してそのような経験をし、様々な「何か」を得て参加者が成長すること。いまや、日本とアメリカが友好的な関係を築き、日米学生会議が創設当初担っていたような政治的意味は薄れてしまったのかもしれない。がしかし、「学生が成長するための場」としての意義は、決して薄れることはないだろう。

ただし、ここで留意しなければならないのは、この会議は参加者が成長するための「機会」なのであって、成長させる「主体」ではないということである。ある折、「花は春が来たことをきっかけとして、それまでに蓄えたエネルギーを使い自ら花を咲かせる。春が花を咲かせるわけではない」という言葉を耳にしたことがある。この会議にも同様のことがいえよう。この会議を機会として、参加者自ら成長することが本質なのだ。そして、第56回会議がそのような場所になったのだとしたら、実行委員になって本当によかったと心から思う。

心の引き出しに収まらないこの経験をどうしようか。既成の引き出しに押し込ん

でしまうのではなく、日米学生会議用の特別な引き出しを作ることとしたい。そのような新しい心の引き出しを作り、広げていくこともまた、「成長」と呼べるのかもしれない。一年間ともに奔走し続けた実行委員の顔ぶれ、この夏をともに過ごした仲間たち、何度も何度も通った四谷、自分の部屋のように感じられる事務所。今、自分にとって当たり前であるものは、いつか当たり前ではない非日常的なものになってしまうのだろう。将来何かの折に、例の引き出しからこの思い出をそっと出してきて、振り返ることとしたい。きっと、色褪せてはいないはずだ。

最後に、一年間苦楽をともにした実行委員のみんな、第 56 回会議に集まってくれたみんな、そしてこの会議を支えてくださったすべての方々に対し、心から感謝したい。本当にありがとうございました。

佐藤　陽子

「右を見てください。
左を見てください。
隣に座っている人は、将来の夫もしくは妻かもしれません。」
そういうと、その OB の方は最高の笑顔を見せた。

『結婚斡旋団体だったのか？？？？』
日米学生会議歴数日の私には、言葉はその一般的な響きでしか伝わってこない。
そうなるとだ。
次から次へと OB、OG がやって来ては、
自らの日米学生会議の収穫を報告してくれる。
「僕と僕の妻も日米学生会議で出会いました。」
目を見合わせて、くすり。
「僕らの分科会では、カップルこそできませんでしたが、一生の友達ができました。」
7 月末にハワイで行われた 70 周年記念式典での出来事である。
すごい。あの集団を取り巻く空気。集団間ですべてが完結しているのである。
言葉では説明なんてできない。
Elaborate なんて、そんな野暮なこと聞くべきではない。

私にとって日米学生会議は、以外な衝撃とともに始まった。
あの、就職試験のような面接で、日米学生会議に参加する意義、南北問題分科会に対する熱い思いをぶつけていた自分をぼんやりと思い出す。

日米学生会議は、さまざまな要素からできている。

会議、シンポジウム、レセプション、夜遊び、フィールドトリップが私の記憶の中では、1.5：1：1：2：1くらいの割合で押し寄せてくる。怒涛の1ヵ月である。
それから、である。
まず、アメリカ側の目的意識は、日本側のそれとは違う。
「なんで、日米学生会議に参加したの？」と聞くと
「日本語を練習したかったから。」と。
時代は変わったのである。
日米学生会議が設立された頃の、あの切羽つまった日米関係はもはやない。
56回のテーマでも明らかであるが、最近の日米学生会議のスタンスは、グローバルイシューに、日米がどうコミットしていけるか、というものである。
その辺を理解しておくべきである。

何にせよ。
私の夏は終わった。
会議中のことは、他の39人の誰かが書いていることを期待して省かせていただくと、日米学生会議が終わって私に残ったものは、日米学生会議という居心地のいいコミュニティーとしっかりと結びつけられた、俗に言う、”友情”という絆である。

日米学生会議90周年記念式典にて私は胸を張って言うだろう。
別に、第57回の新しい日米学生会議のメンバーでもいい。
「日米学生会議とは、これ絆であります。
全く面識のないもの同士を出会わせ、ぶつからせ、感激させ、悲しませ、そして結びつける。距離や時間がおのおのを分かとうとも、一生消えない絆であるのです。」

日米学生会議歴：6ヵ月
これからも私の日米学生会議歴は続く。

島　裕貴

友人の一言「島くん、アメリカ行きたいんだってね。じゃあ、紹介するよ。1ヵ月アメリカ行ける。しかも、リーズナブル（安い）！」そこから始まった日米学生会議と自分との出会い。第56回日米学生会議の募集要項の冊子を見ていると、ドラマが始まりそうな不思議な予感にゾクゾクと胸が高鳴った。

春合宿で、過去の参加者も見ている中、壇上でスピーチをした。なぜか言葉がどんどん出てきて、一番盛り上がった。自分自身元気を分け与えてもらった気がする。その勢いで、事前活動から頑張った。夜行バスで動く、動く。5月から7月までの

事前活動期間中の週末に京都でじっといたことなど2回しかなかった。事前活動の軌跡をノート一冊にまとめてみたものがある。今改めてそれを読み返すと、5月の市会議員の方の事務所での勉強会、6月の防衛庁や文科省の方の講演会、防衛大学の訪問、養護学校や特殊学校への訪問による研修、7月上旬の京都での勉強会、大阪での大学院生の論文発表会…まだまだ沢山。一つ一つの出来事が、すべて、普段の学校生活では絶対の味わえないことばかりで、新鮮だった。アメリカへ出発する前の直前合宿では、日本側の出し物で決まったスキットで、ラストパートの主役になった（！）今までの、面接試験、春合宿、事前活動、機会あるごとに自分の殻が破れていたため、慣れない劇の演じ方（しかも英語バージョン！）にも、案外上手く飲み込めている自分を見出していた。本会議が本当に待ち通しかった。

初のアメリカで、いよいよ本会議がスタートした。自分の英語力が通用するのか。アメリカのすべてが、自分にとって新しい発見であり、きっと色んなドラマがあるんだろうと、期待と不安が交錯した。学生会議への参加によって自分の人生の彩りが大きく変わり、自分の進むべき道が指し示されているような、そんな分岐点に、今自分が立たされているような気もした。アメリカにいた時の時間は、1ヵ月近くとはとても思えないぐらい長かった。1年ぐらい海外にいたような感覚。それほど自分にとって密度が濃い体験だった。本会議中の出来事なんて、すべて書こうと思ったら1冊の本ができてしまうんじゃないだろうか。

着いてから最初の自己紹介、昼に行われた分科会の打ち合わせ。アイスクリームパーティや、スキットの練習など走馬灯のように思い出が蘇る。スキットも無事成功に終わった後ぐらいからは、英語での自己表現にも自信が付いてきた。日本にいた時では考えられないような生活、踊りや夜の談話を通して、本当にアメリカ社会であり、世界の縮図のような日米学生会議という不思議な空間と時間のなかで溶け込んでいたような気がする。日に日に時差ぼけも直り、英語圏での生活にも慣れてきたある日のこと、パスポートを紛失した。正直焦った（汗）。「帰国できんかも」それはなくても次のサイト地サンフランシスコに行けなくなってしまう。どうしようか、と思い深夜に寮のフロントに行くと「警察に電話した方がよい」と言われ、ハワイ警察に寮まで来てもらう。ハワイ州の公式の身分証明となる書類を頂く。これで明日のパールハーバーにも行けるし、国内線の飛行機も乗れると言われ、大変安心した。すると、数日後にアメリカの参加者1人から「朝サーフィンに行く時にタクシーに乗ったら、運転手から「この顔知らないか」と言われ、君のパスポートがあった」と言われた（！）。その日の夜に、やって来たタクシーからパスポートを受け取った時は本当助かった。奇跡のような出来事があるものだ。パールハーバーに行った時には熱くディスカッションした。夜にバーに行った時には、アメリカ文化の一端を本当に垣間見たような気がする。

次のサンフランシスコではホームステイ。アメリカ人と夜アニメを見ていたら笑っている箇所がお互いずれる。「これは、英語力がまだないから笑いの壷が違うのか？それとも、そもそも笑いの壷自体が違うのか？」とあれこれ考えた。

ワシントンではホワイトハウスに訪れることが出来たり、日本大使館でのパーティや、ペンタゴンにも行くことができた。ワシントンにいた時、特に充実できたのが、分科会で2時間近く自分の発表が出来たこと。資料、統計、教授から借りたビデオ。全部準備してきたから、アメリカ人からも「Excellent!!」と言われた。英語での発表が、そして自分のアイデアがこんなに受け入られるのかと最高に楽しかった。ワシントン大学の近くで迷子になったこともあった。またまた英語で警察に話しかけて厄介になる。…また、「日米学生会議とは何か？」参加者たちの中から疑問を抱いた者達で夜遅くまで、語り合った。一つ一つの出来事・思い出、この会議に参加していないと絶対にこんな短期間で経験できなかった。ディカッションの時に、「君はよく話す。Good！」と言われた。大分英語力も付いてきた。日本が恋しくもなってきた。でも、まだアメリカに居たい、このメンバーと一緒に過ごしたい、という二つの相反する感情が複雑に交錯していた。そしてステージがいよいよ最終局面へ。

プリンストンでは、プリンストン大学の式典でスピーチした時、話す前から拍手が起きた。英語で何を話すかメモを取っていたわけでもない。とにかく自分の将来への思いや、日米学生会議への思いをありのまま語った。本当にあの時が一番英語が話せた。そして、アメリカ人にも感動を心に届かせるようなスピーチが出来た。スピーチ後に「島っちはカリスマ性があるね～」と言われた。本当に最後の最後まで、楽しめた。ニューヨークのブロードウェイやメッツスタジアム。フォーラムでは、同じ分科会のアメリカ人が画用紙を切って自分のための服を用意してくれた。自分が中心になる分科会の発表の流れになり、「今までこんな自分が目立ったことあったかなぁ」と思えた。

本当に、その時、その場を愉快に楽しむ。これが日米学生会議である。自分の英語力は大丈夫なのか。ただ自分は、アメリカに行きたい、自分を試したい、挑戦したい、そういう気持ち一つで参加しているから go with the flow (流れに任せる)。それが当初からの会議参加への自分の一貫したスタンスであった。専門知識なんてあるわけじゃない、将来をアメリカで働こうと思っているわけでもない、でも今学生だから高いハードル夢ある舞台で頑張ってみたい。そんな夢が実現できた、そしてそれを達成させてくれる場であった日米学生会議。自分はもう忘れない。

そして、ここでの経験を将来に活かし、ここで育まれた友情を生涯大切にし、そしてこの会議を運営してくれた方のすべてに感謝を表したい。

下斗米　紀子

アメリカの学生とひざを交えて話し合う、このシチュエーションに惹かれて、第56回日米学生会議に参加することとなった。しかし学生会議とはその舞台そのものでしかないのであって、その参加者が何もしないでいることも可能である。それは全く当然のことであるが、実際に思い知らされる場面が多くあった。「何をどうするべきかわからない」「どう向き合うことが正解なのか誰も教えてくれない」漠然とだがそんな風に考えることもあった。限られた 28 日間という期間で何かを成し遂げなければならない、無意識にそのような焦りを感じていたように思う。

日米関係が今どうしようもない危機的状況にあるわけではなく、お互いが相手を初めて知るようなそんな遠い関係でもない。個人レベルでも政治のレベルでも「交流」や「相互理解」はずいぶん進んでいるし、そのために日々努力している人は両国にたくさんいる。ネットやマスメディアを通してでも、互いの国を知ることはできるし、メールやチャット、電話でいろいろと語り合うことだってできる。
このような状況はこの日米学生会議が始まった当初では考えられもしないことであっただろう。これは私の憶測でしかないが、だからこそ当時の参加者はこの「会議」という貴重な体験をより意義のあるものとするために「必死」になれたのではないか。そして日本の、アメリカの代表である、という肩書きも、周囲から認められるだけの説得力を持ち、それが自負につながっていたのではないだろうか。しかし私達の 56 回という世代は、参加者本人でさえ、それを確信することが難しい状況になってきている。今回の会議の途中、参加者たちから、この会議に自分が参加していることの意義が見えなくて苦しい、なぜ自分が参加しているのかその理由がわからなくなってしまった。といった声が聞かれた。これは今この時代、この世代にいる私達だからこその悩み、痛みであるような気がした。

私も、いわゆる「日米学生会議」と「自分」の間に大きなギャップを感じた一人である。自分にとっても、アメリカ側参加者にとっても、互いの国を知ることの選択肢はいまや何千と存在する。そのなかでなぜ「自分」なのか、なぜ「彼、彼女」なのか、なぜ「アメリカ」なのか、なぜ「今」なのか。それらにひとつずつ、自分が、他人が納得できる理由、根拠を見つけることが難しく、曖昧なまま参加している自分に腹が立つこともあった。しかし結局のところ、それには絶対的・普遍的な回答が無いのだ。いまや国家レベル、国家を背景にした学生同士の対話というものは、学生個人と個人同士の対話、といったレベルまで深まるにいたったということだろう。もちろん互いの国や文化や歴史を背負った個人ではあるものの、それと同等、もしくはそれ以上に各々の生まれ、育ってきた環境、そして一人ひとりが選んで辿ってきた軌跡をもつ「個人」と向き合うことが可能であった事実は、わたし達が歴史と社会に感謝すべきものなのだろう。ようやく私はその恩恵を冷静に受け止

め、そして最大限に堪能したいと思っている。もちろん歴史に対する尊敬と、社会への感謝の念を忘れずに。

会議も終わりに近づいたとき、私たちの中で「学生会議の本当の舞台はこれから始まる」ということがしきりに言われていた。これはいままでの日米学生会議の「その後」を振り返っても、そのとおりだと納得できることばである。わたしたちはこれからの日々を、偶然にもこの会議で知り合った仲間達をよりよく知り、より近しくなるという贅沢に費やせるのだ。その過程でわたし達は自分たちの背負っているもの〈国家や人種、アイデンテティや思想〉を、それぞれの人生という生きた文脈において理解することができるだろう。人間一人ひとりの中に息づくこれらの要素を実際に知ること、感じることこそが人々が求めてやまない Mutual Understanding の本来の理想系なのではないだろうか。その機会と契機を私に与えてくれたのは、この夏の 28 日間にわたる学生会議だった。

会議の期間中、他の学生達とともに過ごす 28 日間が果たしてなんからの「完成形」になるのだろうかとしきりに不安がっていた私がいた。しかし、いまとなっては 28 日間などたいした長さではないと思えるのだ。ひとえには知り尽くせないほどの個性を持ち、それぞれにバラエティにとんだ「彼ら」一人ひとりと続けていくこの先何十年という月日の長さを考えれば、それらすべてのプロセスはなんという贅沢なことであろうか、とわくわくせずにはいられない。

新目　久美子

感想文を、と言われたとき、正直戸惑った。そして「一体何を書けば？」と思った。あまりにもいろいろな思いがありすぎて、本会議が終わって 1 ヵ月が経っても、全く整理がついていなかったからである。でも自分に与えられている、限られた時間の中で、何かを書き表さなければならない。書かなければ。しかしそう思えば思うほど、書けなかった。私の稚拙な文章で、十分に自分の気持ちを表せるとはとても思えなかったし、簡単な言葉で、片付けたくなかった。それだけの想いがあった。書いては消し、を繰り返し、その作業の中で自分の心の声を探していった。
そして、今の時点で私が導き出したひとつの答えは、これである。
「JASC は私の人生を変えた。」

本会議が終わってから 1 ヵ月ほどしか経っていないのに、「人生」なんて、と思う人も多いだろう。自分でも、この言葉を使うことに抵抗がないわけではない。でも、今私が感じている気持ちを一番よく代弁してくれる言葉はこれだと思うから…あえて使うことにする。

帰国して、私はまたいつもの生活に戻った。急にJASCという枠から外れて、ひとりになると余計にその存在と自分に与えた影響の大きさに気付かされた。

確かに、JASCに参加することが決まってから、すべてが良い影響ばかり、順風満帆だったわけではない。JASCへの参加が決まってから、そして本会議が近づくにつれ、私の心中にはある思いが渦巻いていた。78人との新しい出会い。新しい自分の発見。自分は変われる。大きなイベントを前にしたステレオタイプの「成果」-そんな一種の「憧れ」を抱いて、私はJASCという場で、形ある何かを必死に探そうとしていた。「そんなものを期待してはいけない。」そう自分に言い聞かせて、でも何となく、代わり映えしない生活への大きな刺激と変化をJASCに求めていた。

確かに新しい出会いはやってきた。刺激も受けたし、活動の中で自分を見つめる機会も多かった。しかし自分と向き合うことは、同時に私自身を追い込んだ。私にとっては、忙しさにかまけて逃げていた自分自身との対面を、いやおうなしにせざるを得ない環境だった。変化を望みながら、自分は何ひとつ変わっていない。力不足の、小さな、「自分」という存在。それを思い知らされるたびに自分の無力さを突きつけられる思いだった。そして、日程が過ぎるうちに何もできずにいる自分自身に憤り、焦った。何も見つからない。毎日は過ぎていく。私は何をしているのだろう。迷い、失望…そしてそれをまわりに悟られまいとして、ますます追い詰められた。苦しかった。

大学4年にもなって、自分を見つめ直したとか、他人の大きさに気付かされたとか、答えを探して、とか、そんなことを言うと「今更何を言い出すのか」と言われるだろう。今までもそういう風に感じたことはあったはずなのに、でも今回は何かが違った。何が違ったのか。時期、メンバー、場所…舞台も、役者もそろっていた。すべては、タイミングだった、そう思う。もし何か一つでも欠けていたなら、一瞬一瞬が鮮明に頭に刻まれるほどの経験はできなかったと思う。

迷いながらも皆と毎日を過ごすうち、自分の中で何かが剥がれていった。私も苦しさを打ち明けなかったし、あからさまに誰かが慰めたり励ましたりしてくれたわけではない。でも頑なに守り続けていたいろいろな「自分」を崩された。いつもとは違う環境で、自分を知らない仲間と交わる中で、いろいろなものを与えられた。そうすることで、少しずつ私自身が変わっていった。その変化は、必ずしも最初から自分が望んでいたものではなかった。でも、今までと同じく回っている、自分を取り巻く世界が、急に違う色で見えてきたとしたら…？うまく言えないが、今私が体験しているのはこんな状況である。

もしこの夏をJASCに参加せずに過ごしていたらと考えた。考えられなかったし、

考えたくなかった。”楽しかった”とか、”充実していた”とか、そういう感想が導き出せるような夏は、別にJASCでなくても過ごせると思う。でも、人生を変える夏はそうあるだろうか。それも長いときを経ずに、こんなにすぐ結論が出るなんて。私には思いつかない。でも同時に今でも思う。”あれは何だったんだろう…”と。それほどまでに、見つけにくく、掴みにくいものだった。

形ある成果は、「望むもの」ではなかった。最初から分かっていた通り、JASCは答えをくれはしなかった。答えは自分で見つけるもの。でもこれからの自分を決める道筋は、確かに与えてくれた。

最後に、私をこの大きな輪に加えてくれたすべての人に、心からの感謝を捧げたい。そして、78人の第56回日米学生会議参加者のみんな、本当にありがとう。

杉田　道子

日米学生会議とは一体何だったのだろう。最終開催地のプリンストンでの次期実行委員の選挙で、私は生まれて初めて、愛の告白をした。”I am falling in love with you, JASC!!” 皆笑って聞いてくれたのだが、私は結構本気だった。日米学生会議があの時も今も大好きだ。第57回の日本側実行委員として、早速山のような仕事に追われ始めた今、「なぜこれほど日米学生会議に惚れ込んでしまったのだろう」とふと思うこともあるが、その度に帰結する想いがある。私にとって日米学生会議は、今後の人生においての糧であり、未来をつくる原動力であるという確信だ。

本会議直前、私は開発に関する調査実習のために、インドのカルカッタのスラムと農村に三週間ほど滞在した。インドは中国と同様、急速に発展しつつあるエネルギッシュな国であるが、カースト制度もあるせいか貧富の差は大きく、貧困層も実に多い。スラムや農村で出会った同年代の女の子は、ほとんどが中等教育以下の教育水準で、結婚しか生きるすべがないという子もたくさんいた。日米学生会議に参加するような学生の生活とはまさしく正反対である。ところが、彼女たちやそれ以下の年齢の子供たちの将来に対する考え方は、非常に前向きでたくましい。母として家族を支え、子供に教育を受けさせること、地理学者や科学者になってインドの貧しい人を教育すること、医者になって地域の人を救うこと、ソーシャルワーカーになってベンガル地方の福祉を改善することなど、明日の食事もままならないにも関わらず、自分たちで未来を変えようと生き生きと、真剣に語る姿が印象的だった。それだけに、インド滞在直後本会議に臨んだ私は、あり余るほどのアメリカの食事、それを平気で捨てる習慣に困惑し、複雑な気分だった。自分たちの置かれている状況が、あまりに恵まれており、呑気なものに思えたからである。

70年前に太平洋を渡った四人の日米学生会議創始者も、未来を、そして平和を築く必要性と情熱に駆られていたに違いない。しかし、その情熱を会議の継続という形で受け継ぐ私たちは、70年前の日本とも、私が見聞したインドともかけ離れた環境にいる。与えられた「平和」のもとで育ち、衣食住にも困らず、教育も保障されている私たちは、日常生活の中で差し迫って現状改善の必然性を感じることが、皆無といっていい。放っておいても明日が来る。明日の世代を担うものとしては、非常に難しい、そして重要な時代に生きているとも言えよう。未来に前進するためには、社会が私たちを必要としてではなく、私たちのほうから社会に働きかける形で生きていかなければならないからである。

日米学生会議では、実にいろいろなことを見聞し、話し合った。日米について、社会問題について、過去や未来について、私たち自身について・・・と挙げればきりがないが、一つだけ言えることは、私たちは学生として恐れず社会に向き合った、ということだ。もちろん、テーマであるCivic Commitmentが最後まで見えて来ず、「結局何もできないんじゃないか」と無力感を感じたことも多かったし、生半可な知識のために議論が深まらないこともあった。分科会では、各自の興味や知識、経験が余りに異なり、煮え切らない議論が続いた。やはり、1ヵ月という時間の制約や参加目的の差は大きく、日米学生会議が今後乗り越えていくべき問題だと痛感した。しかし私は、英語や相互理解の難しさを乗り越えるため、励ましあい、助け合いながら熱く語った日々を誇りに思う。何より、いろいろな才能を持った素晴らしき仲間と志を共有したことが、今後進路を決めるにあたって、大きな勇気を与えてくれたような気がする。この思いは一生忘れることはないだろう。

本会議が終わった今、第56回日米学生会議参加者として、今後の目標を掲げたい。それは、「偏見から解き放たれるための努力を怠らない」ということである。会議中、私は何度も自分が偏見や常識、社会通念にとらわれている自分に気がついた。アメリカに対する印象ひとつをとっても、ある時はニュースに登場するアメリカ政治、ある時は留学中に経験したアメリカでわかった気になっているなど、物事が一方向からしか見えていないことを痛感した。偏見は人間を縛り、真実への視界を曇らせ、人を不幸にする。「偏見から解き放たれる」など限りなく不可能に近いことは百も承知だが、そのための努力を一生続けることが、JASCerとしてのプライドなのではないかなと私は思う。

最後に、こんな素晴らしい夏を与えてくださったIECと第56回実行委員をはじめとする多くの方々に心から感謝すると同時に、第57回実行委員長として、新たな会議の成功のために全力を尽くす決意をここに表明します。

高瀬　哲郎

2004年の夏は僕の今までの人生の21回の夏の中で一番暑かった。

僕にとってこういう学生会議は初めてだった。アメリカに行くのも初めてだった。アメリカに着いて回りを見渡すと何もかもが新鮮に感じた。住み慣れた町とかなり違った風景を見るとドキドキした。5年前に日本に初めて来たときの感動とどこか似ている。他の人と同じようにアメリカ人のステレオタイプなどこの国に対するイメージを自分なりに持っていた。果たしてそのステレオタイプはどれだけ正確なのかを確かめたいというのもこの会議に参加する一つの理由だった。

僕は理系なので普段専門の科目だけでも頭がいっぱいで、あまり政治・経済のことを知らず、それらの問題を真剣に考える機会も少なかった。この会議の参加者はほとんど文系であったため、おそらくディスカッションする内容もほとんどアメリカの政治・経済・歴史や戦争についてだろうと思い、焦ってアメリカについて予習した。アメリカに関する本なども手当たり次第読んでみて、現在アメリカが抱えている問題を様々な局面から分析してみた。案の定、会議中にその知識がかなり役立ち、ディスカッションの輪に入れた。それでも、思ったよりアメリカの大学生は自国の政治にかなり詳しい。ある日の夜、ハワイ大学の寮でブッシュ大統領が取った行動の評価について4、5人でディスカッションしていた時、さすがに毎日アメリカのニュースを聞かないと話についていけないと思った。日本の大学生は？と考えていてみるとそこまで熱く小泉首相の仕事について語る機会は果たしてどれくらいあるだろう。言葉以外の問題にも発言の仕方がかなり違うという点がおもしろい。アメリカ人は自己主張が強いとよく言われるが、初めて自分の目でみた。日本人のように聞いたニュースをそのまま人に伝えるのではなく、信用できるかどうかを見極め、自分の意見を付け加える。JASCに参加することによって日米間に限らず様々な国の国際問題の重要性を感じ始めた。

日米学生会議が終わって、早くも1ヵ月が過ぎようとしている。会議中の1ヵ月よりこの1ヵ月が何倍も時間の流れが速かった気がする。会議中に築き上げた友情、というより知らぬ間に芽生えてきた友情の強い絆を一生そのまま保ちたいが、現実的にもう2度と会うことがない人の方が多いだろう。それでも良い。JASCer79人と一緒に過ごしたすべての瞬間は永遠に僕の記憶に残るからだ。

田中　珠理

第56回日米学生会議で過ごしたこの夏は、私にとって、本当に楽しい1ヵ月だ

った。私はこれまでの夏休みを、芸術の秋の舞台に向けての練習と日焼けに注意して過ごしてきた。会議出発一週間前に舞台を終えた私は、髪の毛を短く切り、日焼けも気にせずにいざ、ハワイへ向かった。1 ヵ月間に渡った日米学生会議を通して私が考えたことを、言語使用という視点を中心に述べる。

言葉が充分に使いこなせなくて、自分の意見が思ったように言えずに、フラストレーションがたまった参加者が多かったようである。しかし、言語学を専攻する者からすれば、これは、理想的な現象なのである。近年、日本での英語教育のあり方については様々な議論がなされ、一種の英語ブームが起きていると言っても過言ではないだろう。「英語が話せるようになりたい」と言って英会話学校に通う人も少なくはないが、その大半は「話したい内容」を持たずに、英会話学校に通えば英語が話せるようになるだろうという漠然としたイメージを抱いて入学するのである。しかしながら、実際に英語話者を前にした日本語話者は何を話していいのかわからずに、困惑してしまうというのが現実なのだ。それに比べて、こんなにも伝えたいことがあるのにも関わらず、言葉にならなくていらいらするという日米学生会議の参加者のすばらしいこと！

言葉は、道具である。自分の思いを伝える道具である。言葉の前に、まず思いありき、私はそう思う。言語はその思いを外に出す一つの手段に過ぎない。習得言語と言語能力に関する考え方の一つに、二言語に共通する能力の存在を主張し互いに依存するという考えがある。これは、CUP(Common Underlying Proficiency)と呼ばれるもので、底辺は同じだが頂点の位置が違う二重の三角形を氷山に見立て、海底には共通する部分もあるが、表出した部分が異なる、というモデルで説明される。この概念の提唱者は以下のようにいう：「概念はひとつの言語でできていれば、それを他言語に置き換えても理解できる。第二言語に知識を移行するためには、その意味を表す言葉がわかればよいだけである。」自分の考えがあって、それを人に伝えるための言語能力をつけていけばよいのである。その点において、今回の日米学生会議の参加者は、自分たちの考えをしっかりと持つ人たちだった。私は、この点に非常に感動したし、参加者は誇りを持つべきだと思う。母語発達が充分に完成している参加者が知りたいと思うのは、おそらく、その先の第二言語習得の方法だと思うが、それは私の大きな研究課題であるので、今後に期待してもらうことにして、このように自分の信念を持つ人たちの存在はやはり貴重だ。

英語では深い議論ができないと言って、会議中に日本語を積極的に使った日本側の参加者もいたようだ。伝えたい思いが先行してしまって、それをうまく人に伝えられない時のもどかしさは誰もが体験したことだろう。七十周年記念式典でお会いしたある日本人 OG の方と会議における使用言語についてお話をする機会があった。この方のご意見は、日米の学生が集まって議論する場だからと言って、英語を使用

しなくてはならないということはないというものだった。つまり、英語だと表面的なことしか表現できずに、込み入った議論や本音での議論ができないかもしれないが、日本語ならできる、という人は多くいるはずだから、日本語の使用をもっと認めるべきだというのだ。日米学生会議という場では議論するという形が問われるのではなくて、議論する内容が問われるのではないか、というこの方の意見に考えさせられた。日本側参加者には選考の段階で英語の能力が問われるが、アメリカ側参加者には日本語の能力は問われない。英語が世界語の地位を確立する現在、英語を習得している者の行動範囲が広がることは事実である。世界を相手にしようとするならば、英語は必須条件だろう。私は、日米学生会議はその英語の重要性を再認識するとともに、その壁を越えて、各自が持つ思いをぶつけあうところであってほしいと思う。これは、今後の私の基準にもなった。自分の考えを発信する気持ちを忘れずに、それを満足に伝えられるだけの言語能力を日本語、英語の両面から日々磨いていきたい。

切った髪はやがて伸びる、日焼けした肌ももとに戻る。しかし、私にいつまでも残るのは、会議を通して得た友情と、自分の足元を固め、将来必ず世界に飛び出していこうという決意である。

坪田　裕美子

人一倍高い交通費補助をもらって、福岡名物明太プリッツをおみやげに持って行ったゴールデンウィークの春合宿が、懐かしく思い出される。あの日から、私にとっての第 56 回日米学生会議は始まった。最初は「福岡からでもやってやるぞ」と意気込んでいた私だったが、2 泊 3 日の合宿を終えて地元に戻ってくると、周りに 1 人も JASCer がいないということに改めて気付き、寂しさを感じたものだった。その分、防衛大研修や関西での勉強会、そして本会議前の直前合宿でみんなに会えた時の喜びはひとしおだった。しかし、本会議に対する不安は最後まで消えることがなかった。

果たして自分はみんなについていけるのだろうか―という不安を胸に日本を飛び立ち、ハワイで始まった本会議。いきなり始まる英語での会話に戸惑いながらも、徐々にその雰囲気に慣れていくと、自然と居心地のよさを感じるようになった。自分が考えていることを素直に話すことができる空間、それが私にとっての日米学生会議だった。こんなに居心地のいい空間は初めてだった。そして会議の途中からは、日本語・英語を問わず参加者同士で「語る」ことを楽しめるようになっていった。分科会で、自分の考えを正直に言いながら進めたディスカッション。夜の自由時間に、どこからともなく始まるスペシャルトピック。部屋にいる時に語り合った、自

分たちの将来。どれも、私に大きな影響を与えてくれた。きっと、「語る」ということが日米学生会議における一番の醍醐味だったのではないだろうか。

こうして会議を楽しめるようになった私だったが、周りの助けなしにやっていくことはできなかったと思う。6月頃、みんなに会えないことでフラストレーションを募らせていた私の相談にのってくれた友達。事前勉強会の詳細な議事録をメーリングリストで回して、勉強会の様子を教えてくれた友達。本会議中、早口の英語で行われたパネルディスカッションの要点を急いでメモして回してくれた友達。寝過ごしてごはんを食べそびれた私を心配して、ピザを手渡してくれた友達。何も言わずぎゅっと抱きしめてくれた友達。本当に、みんなに随分と助けられた。

ところで、第56回のテーマであった「Civic Commitment」とは何だったのだろうか。私は、当初このテーマを強く意識しすぎてしまい、短期的結果を追い求めようと必死だった。しかし今考えてみれば、それは短期間で結果を出すことを求めるものではなく、本会議終了後日米学生会議での経験を糧に、個人個人で発信していくものだったのではないかと思う。限られた時間の中で数多くの出会いと別れを経験し、吸収できるものをすべて吸収した1ヵ月間。フォーラムのスピーチで、日本側実行委員長が「花となるより根となろう」という素敵な言葉を残したが、まさにその「根」の部分を作ってくれたのが、日米学生会議だったのだと思う。

第56回日米学生会議があったから、今の自分がここにいる。

出浦　寛子

会議が終わりもう1ヵ月以上経った。会議前と会議後で、私はどう変わったのか。

会議前日、私は自分の部屋でスーツケースに水着やスーツを詰めながら、漠然とした不安感を抑えられずにいた。恐怖さえ感じていた。そもそも、1ヵ月間、78人もの赤の他人と生活するなんて、私の想像を絶していたのだ。自分がこれから遭遇するであろう場面や出会う人々を脅威に感じながら、私は本会議に臨んだ。

本会議開始から1週間。私はまだ怯えていた。言語バリアの問題があったわけではない。しかし、79人もいる大きな団体の中の、自分という一人の人間がつまらなく、無意味な存在に感じられた。タレントショーで見せる芸もなければ、大勢の前で通訳する自信や勇気もない。パネルディスカッションで自分の知識の無さを痛感し、全体のディスカッションでは発言しようともしない、ぬるま湯に浸かりっぱなしの自分に不満と苛立ちを感じた。

本会議開始から2週間。参加者とはだいぶ打ち解け、あまり脅威として感じなくなっていた。分科会はユーモアたっぷりのメンバーのお陰で楽しく過ごせたし、全体的にリラックスしていることも多くなっていた。そして8月9日の夜、初めてのリフレクションが行われた。JASCの意義について真剣に問い、悩みを打ち明ける人もいれば、参加者のやさしさに心打たれて涙する人もいた。一人ひとりが心のうちを"ぶっちゃけ"ていて、私はそのときJASCのエッセンスを垣間見られた気がした。フランクな話し手と、ジェネラスな聞き手。多種多様の文化的背景を持つJASCerは、それぞれの違いの向こうに在る人間をしっかり受け止める柔軟性と包容力を持つ。その夜、私は少し勇気を貰った。

本会議開始から3週間。いよいよJASCも終盤に差し掛かり、私は哀愁を感じていた。3週間という短期間には、数え切れないほどの喜怒哀楽が凝縮されていて、そのひとつひとつの思い出があと一週間ばかりで完全に過去の出来事になってしまう気がした。しかし、物悲しさとともにこの上ない喜びも感じていた。「日米」学生会議とはいうものの、実際のJASCは日本人対アメリカ人の二項対立的な会議では決してない。むしろ、79人いれば79個の色とりどりの「文化」がそこにはあり、私はひとつの独自の文化として皆と触れ合えたのだ。

会議が終わった今、考える。会議前と会議後で、私はどう変わっただろう。何もかもが変わったと言えるし、何一つ変わってないとも言える。答えはこれからじわじわと出てくると思う。しかし、一つだけ確実に言えることは、2004年夏、素晴らしい他者と出会えたということである。

"Courage is resistance to fear, mastery of fear, not absence of fear"とはマーク・トウェインの言葉である。勇気とは、恐れに抵抗し、克服することであり、恐れがないということではない。この言葉を実感させてくれた56回JASCの実行委員および参加者の皆さんに心から感謝したい。ありがとう。

寺崎　テレサ

日米学生会議から帰ってきて、1ヵ月余りが経った。恐らく、今、この感想文を真剣に読んでいる人達は、Applicationを手元に、今にも日米学生会議に応募しようと思っている人達か、或いは、見事、選考に合格し、参加の切符を手にした人達だと、私は踏んでいる。なぜなら、私自身、応募する前と、選考を通過した後の2回、過去の報告書を食い入るように読んだからだ。その人達の役に立つような事をこの場を借りて書きたいと思う。

まず、1次の書類選考に応募する時点で重要な事は、自分が何故、この会議に参加したいのかを明白にさせておく事だ。その為には、過去の報告書を読んだり、過去参加者や実行委員過去経験者に会って話を聞いたりと、情報収集をしておく事が重要だと思う。この会議がどういったものなのか、具体的かつ現実ベースで把握しておく事で、Application や Essay が書きやすくなる。

次に、2次試験の面接だが、素のままの自分を出す事が重要だと思う。ここで、変に自分の Character を偽ると、後で痛い思いをするかもしれない。例えば、決して協調性がない性格なのに、それを偽ってイェスマンになってみたり、決して知識がないのに、知識があるように威厳を張ってみたり。もしかすると、選考側は人の本質を一発で見抜く力を持っているかもしれない。最も大切なのは、自分に正直になる事だ。その等身大の自分で勝負して選考に選ばれたなら、その後の1ヵ月間という長期に渡る会議は、決して苦痛にはならないだろう。もし自分を偽って偶然にも選考に選ばれたとしたら・・・本番は辛い1ヵ月になるだろう。

私は、特に興味もないのに、「日本の教育改革」について Essay を書き、分科会希望も「教育分科会」を希望してしまった。何故なら、「教育」が一番書きやすいテーマだったからだ。私は、特定の分野に長けている訳ではなかったので、「教育」という書きやすい分野で攻めた方が、選考に選ばれる確率は高いと思ったからだ。だが、本心では「経済」の方に興味があった。最終合格の通知をもらい、無事、アメリカへ行ける事になったまでは良かったのだが、正直、分科会は刺激のあるものとはいえなかった。「経済分科会が Field Trip で NY の Goldman Sachs に行ったらしい。」という類の話を耳にする度に、悔しくてたまらなかった。自分を偽ると、後で必ず自分に降りかかってくる、と言う事を、嫌と言うほど痛感した。

また、「アメリカに安く行きたい。国務省などの普段は行けないような所に行きたい。」などというミーハー染みた、表面的な理由だけで参加するのは極めて危険だろう。会中は、数多くのパネルディスカッションや講演がある。バカンス気分の観光ツアーがほとんど出来ない事は明白だ。しかも毎日、同じメンバーと顔を突き合せなければいけない。79人のなかに気の会う人が一人もいない、という状況もあり得る。そんな状況に陥った時の為のリスクマネジメントも必要だ。

We wish you good luck. Enjoy JASC-ing!

寳　一博

大学の先輩で JASC の参加者がいる。彼に勧められたのがきっかけだった。法学

部を中退し、医学部再受験という道を選んだその先輩は一風変わっているが、とてもアクティブで、尊敬できる人物。社会に関心があるので、医学生には珍しいタイプだ。広い視野を持っていて、中東問題にも詳しい。そして、いつも持ち歩くipodにはキング牧師の演説が入っている。

大学生活に漠然としたマンネリを感じていた私は、勧められるがままにキング牧師の演説に耳を傾け、中東について考え、JASCの報告書を取り寄せた。「キング牧師ってぜんぜん牧師っぽくない」、「今年のJASCの開催地はアメリカ」。先輩には色んなことを教わっている。

なんとか書類審査をパスし、採用面接では久しぶりの緊張を味わい、これでもかと発汗した。そう、ちょうど大学入試の後期試験で名前を書き忘れた時と同じぐらいの緊張感。胃がぐいぐい締めつけられ、粘膜は悲鳴をあげた。でも、心地よかった。いつの頃からか、私は刺激のない生活を物足りないと感じるようになっていた。一人暮らしに慣れ始めたころからだろうか。あるいは大学の人間関係がそれまでのものよりも希薄に思えるようになった頃からかもしれない。ともかく熱くなりたくて、力強い流れに身を任せたかった。JASCの試験に落ちたら、チベットかフィリピンにでも行こうかと思っていた。

そして、JASCは私の期待通りだった。まるで原始の海。濃くて、熱くて、何かの始まりを予感させる。当たり前だが、まだまだ整理できていない。それに、すぐに答えを出そうとも思わない。私の中で、ゆっくり醸造されればいい。日米の同世代の大学生と1ヵ月間にも渡って、交流できたことは本当にすごいこと。一緒に酒飲んで、慣れないダンスして、色んなこと話し合って。参加者の一人ひとりを自分の中に刻み込んでいく1ヵ月間だった。OBの方の「JASCは種まきをする場です」という言葉が印象深い。79名の参加者、みんな違う種を持つ。これから先、これらの種は私の中で芽吹き、花開くのだろうか。それは、私次第である。サボらず、育んでいきたい。

砥上　明子

朝起きたら隣で姫が寝ていた。

姫とは日米学生会議参加者の一人の愛称である。よく眺めてみたけれど、やっぱり姫だ。何故彼女が隣で寝ているのか、起き抜けの頭でよく考えてみる。昨日帰国して、時差ボケでフラフラしながら打ち上げに行って帰宅したこと・・・確かに帰ってきた。彼女がここで寝ているはずはない。

頭の整理がついた瞬間、何のことはない、見慣れた我が家の妹が寝ているだけだと気がついた。

現実とJASC世界の混同。この1ヵ月間、そんなことがよくあった。常に78人の人間に囲まれ、外側から刺激を受けているので、無意識の中にもそれぞれの存在がしっかりと埋め込まれ、毎晩78人の夢を代わる代わる見た。また、夢の中だけではなく、日常の景色の中にも彼らの姿をたくさん映し出している自分がいた。

（電車の中に座っている人、アイツにそっくり！）
（スキンヘッドとアと言えば彼！）
（このピンクの服あの子に似合いそう！）

1ヵ月間ともに生活の時間を共有すれば、なんとなく人間に共通のリズムや感情、生活の術をも共有することになる。それは国を隔てる線を越えた、全人類に共通のものだ。そういった人間の共通性こそが70年の時を越えて日米学生会議の参加者たちをつないできたのだろう。

しかし、70年前にこの会議に参加した若者たちと、21世紀の時代に生きる私がこの会議を通じて感じたことの差異についても思いを巡らす。「日米」が「日本とアメリカ」という二国間の関係でしかなかった当時。そして、国際化が進み「日米」をもはや「日本とアメリカ」という二国間からのみの視座ではとらえきれなくなった今日。私は「日米学生会議」が「日米」学生会議であり続けることに少なからず疑問を感じた。この会議は21世紀の今日においては明らかに「国際学生会議」に変貌しつつある。

グローバル化が進む現代では、それぞれの国籍やエスニシティーに関係なく、お互いに存在する共通性を見出すのはますます容易になってきている。「相互理解」とは、国籍や文化背景の枠に囚われず、人間対人間で向き合ったときに見える最も簡単でシンプルな共有感や理解なのではないだろうか。そう考えたとき、ただただ常に自分を78人の人間の中に置くところこそに、この会議の特別性や意義があるように思える。「日米」の枠を超越した様々な歴史や文化を持った人々の中で、それぞれの行動や言葉に常に影響され、感化され、心を動かされる。自分を見て、他人を見る。他人を見て、自分を見る。

78色の色が常に自分のカンバスに何かを描き続けるのだから、それはもう、身体的にも内面的にも忙しい1ヵ月を過ごすことになる。そして自分も何らかの色を78枚のカンバスに加え続ける。どのように？どんな色を？

どんな天才画家も敵わない、多様性と抽象性を兼ね備えた絵が、1ヵ月の時を経て完成された時、それはどれだけの明るさを自分の心にもたらすことになるだろう。人間だけの持つ特別な感情、優しさや他者を思いやる気持ち、共感・・・そういったものを与え合う中で、他者の、そして自己の人間性を深く見る。

"...the language of the Romans, perhaps the most political people we have known, used the words,"to live" and "to be among men"..."

ドイツの政治哲学者、Hanna Arendtの言葉だ。
本会議最後のサイト、プリンストンの老舗古本屋で見つけた『人間の条件。』その著作の中で彼女は、複数の人間の間で、何の介在をもなくして直接的に行われることこそが「活動」であると説き、「活動」を行う場こそが真に自由で平等な場を作る、と述べた。1ヵ月間、78名と活発な「活動」を行う中、私は確かに"to live"「生きること」を見た。

中田　牧

私が日米学生会議を通じて得た最も重要なものは、無限のネットワークです。日米学生議はネットワーキングのプロセスです。人と人。さまざまな知識や情報。これらが時間と空間を超えて共有されていくプロセスだと思います。80名の参加者との出会いと約1ヵ月間の生活を通じて、参加者の間には信頼と絆が形成されます。さらに、日米学生会議で出会う80名の参加者はそれぞれがさまざまなバックグラウンドとビジョンを持っています。それぞれのバックグラウンドをシェアすることは、それぞれの過去をつなぐプロセスであり、そのプロセスから時間を超えた連帯感が生まれます。そして、それぞれのビジョンをシェアすることは、それぞれの未来をつなぐプロセスであり、そのプロセスから将来の新たな可能性が見いだされます。また、一つの議題に関して、それぞれの知識や情報を交換し、意見を交わすことは新たな発見のプロセスです。そしてより重要なことは、これらのネットワーキングのプロセスが継続的なものであるということです。構築された絆や信頼が継続的なものであるのは言うまでもなく、バックグラウンドやビジョンのシェアも参加者それぞれの新たなステップアップの原動力となります。また、会議中の内側のネットワークのみならず、日米学生会議という共有された経験と価値観を媒体として、新たな外側のネットワークを構築することも可能です。外側のネットワークは、参加者それぞれが受けた恩恵を社会に還元するという意味でとても重要だと思います。私は参加者の一人として、内側のネットワークをより深化させると同時に、外側のネットワークを拡大させていくつもりです。最後になりましたが、日米学生会議を作りあげてくださったすべての方々と、私が参加者の一人として新たなネットワー

クを構築する機会を与えてくださったすべての方々に、この場をお借りして感謝したいと思います。

中村　恵理

イラク戦争の正当性が問われ、「テロとの戦い」の出口は見えないといった国際状況の中、アメリカで開かれた第 56 回日米学生会議。私が専門としている国際政治の分野ではもちろんのこと、テレビや新聞、本など日本中至るところでアメリカに関する議論で溢れている。しかし、私は今回アメリカに行って初めてアメリカの学生と日々の生活をともにし議論することによって、当たり前の事実、それは、アメリカは大きな国であり実に多様性に富んでいるということに改めて気づかされたのである。そこには、私たちと同じようにイラクに兵を送ることについて悩み、一方で人権を不当に侵害されている人々を放っておいてようのかと自問自答する学生もいるのであり、とても「アメリカ」という一言で言い表すことのできるようなアメリカはそこにはなかった。私は会議に参加する以前は、イラク戦争の正当性を主張し、アメリカの価値を信じて疑うことのない、ブッシュが大好きなアメリカの学生に出会うことを「期待」していた。しかし、良い意味でそれは裏切られたのである。

日米学生会議それぞれの開催地にたくさんの出会い（人との出会いだけでなく、場所や出来事、ものを含めた出会い）と思い出があるのだが、ここでは私自身が興味関心があり、日米学生会議中も私自身の探求テーマであった「戦争と平和」の問題について、会議中にどのようなことを行い、何を考えたのかに焦点を当てながら、日米学生会議を振り返ってみたい。

ハワイで訪れた真珠湾では、日本の自衛隊の船艦を目にした。たまたま日米の共同訓練のために真珠湾に来ていたのである。それを見てとても不思議な感じがした。60 年前日本の戦闘機は真珠湾に戦争に来たのに、今は船艦が訓練に来ているのだから。同じような気持ちになったことが日米学生会議の事前勉強会のときにあった。それは、大阪大学でエルドリッヂ教授の話を聞いたときである。教授の父親は沖縄で戦ったアメリカ兵だったそうなのだが、私の祖父は沖縄戦の生き残りだ。その子孫たちが一緒に同じ教室で日米関係について学び議論したのである。祖父たちは 60 年前このようなことを想像もできなかっただろう。「未来」は変えられるのだ、と真珠湾で日本の戦闘機に沈められたアメリカ船を見ながら感じた。

私は 9.11 の事件と真珠湾攻撃がアメリカで同列に扱われることに対して以前から違和感を持っていた。これらの事件は世界情勢、攻撃主体、被害地、被害者、攻撃に対する予測可能性が全く異なる。それにもかかわらず、ただ「アメリカへの攻

撃」というだけで両者を同列に扱うというのはあまりにも短絡的過ぎると感じたのだ。それについて会議中に議論で取り上げたとき、アメリカからの参加者が「それは世論を喚起するために用いたレトリックだろう。」と冷静に応え、その冷静さに私は逆に驚かされた。そう、日米学生会議に参加しているアメリカ側の学生たちは冷静でよく世界を知っていて他人に対して聞く耳を持っていた。日米学生会議といった国際交流の場に参加している学生ならばそういった傾向を持っている人が多いのは当然といえば当然なのかも知れない。しかし、このような仲間に出会え嬉しさを感じる半面で、次のようなこともふと頭をよぎった。「日米学生会議に参加しているアメリカ側の学生というのはどれだけ‘アメリカ’を代表しているのだろうか。」そしてこれは私たち日本側参加者にも同様に言えることなのであり、自問自答し続けなければならない問題だろう。私たちはこのことに充分注意しなければならない。

サンフランシスコでは太平洋戦争中にアメリカで収容されていた日系アメリカ人の方の話が興味深かった。太平洋戦争中彼らはアメリカ社会からは「日本人」として扱われ、しかし一方では太平洋のあちこちでアメリカのために「日本」と戦った。帰属先がはっきりしていない人たちにとって、戦争は自らの帰属意識が試される試練でもありチャンスでもある。彼らは日本の敗戦をどのように受け止めたのだろうか。「移民」のアイデンティティーの複雑さを彼らを前にして垣間見たような気がした。日米学生会議にも、様々なバックグラウンドを持つ参加者がいた。日本人とアメリカ人のハーフの子や、日系アメリカ人の子、ヨーロッパや南アジア出身の子、日本人の両親を持つけれどアメリカで長い期間を過ごしてきた子。そのような人たちを前にして私は「何人ですか」という質問があまり意味をなさないことに気づかされた。「アメリカ人」とは一体誰なのだろうか、これはアメリカ自身も直面している大きな問題である。

ホームステイではステイ先の高校生と夜更けまでイラク戦争について議論をした。彼女は9.11の事件はアメリカを一つにしたが、イラク戦争は一つにまとまっていたアメリカを分裂させてしまい、その事実がとても悲しいのだと話した。私が「イラク戦争のはじまりのときはこの戦争に対して賛成だったか」と聞いたときに彼女は、(イラク戦争がはじまった当初の立場を言うのは難しい)‘Because things are not black & white.’と言ったのだが、それがとても印象的だった。そのあとに、「イラク戦争を開戦する正当だと思われる理由もあったけれども、戦争は嫌いだから…」と彼女は補足したのだが、これは一市民としての当然の答えだろう。そこには妙に納得させられた私がいた。

ワシントン D.C.では第二次世界大戦のモニュメントを歩いて見て回りその意味するところをみんなで話し合った。アメリカの首都ワシントンの中心になぜ今頃アメリカの勝利を表すためのモニュメントを作ったのか。この展示の持つ政治性に

ついて議論した。私が「まぁでもこんなモニュメントもあってもいいんじゃないの」と言ったことに対し「アメリカ政府は私のことも代表しているのであって、その私の意にそぐわないようなモニュメントがワシントンの中心に建てられるなんて許せない」と熱く反論するアメリカの学生には圧倒された。これは民主主義に対する思い入れの違いから生じる温度差なのだろうか。他にも、アメリカ兵の戦死者の名前がすべて彫られた黒い壁のベトナム戦争記念碑、そして、戦争中のさまよえる兵士たちがブロンズで形どられた朝鮮戦争のモニュメントもあった。それらは戦争の不気味さ、恐ろしさ、死者の数の多さなどを身をもって実感させるところで、アメリカの展示（見せ方）のうまさに真珠湾のときと同様感心させられた。

ワシントンD.C.で設けられたスペシャル・トピックでは、私は「イラク戦争」の分科会に参加したのだが、アメリカの学生は一人だけしかそこにはいなかった。もうイラク戦争は過去のものになってしまったのか、それともイラク戦争について議論することに対しすでに飽き飽きしているのか。イラクでは復興はめどが立たず、毎日多くのイラク人が、そしてアメリカ兵も殺されている。だから、今こそこれからのイラクについて考えなければならないし、それこそ日米学生会議に求められていることの一つのような気がしていただけに、「イラク戦争」の分科会に人が集まらないのは意外であった。この後も、イラク戦争について話し合う場は必要だと訴える学生は数人いたが、関心を示そうとする学生は少なかったように思える。このことは私にとっては少々残念だった。

ニューヨークではみんなでグラウンド・ゼロを訪れた。亡くなった方たちの名前が刻まれているプレートの一番上に"The Heroes of September 11"とありそこにアメリカらしさを感じた。アメリカを変えたと言われている9.11の現場を直接見ても、私は何も感じることができず、そこは私にとってはただの工事現場だった（それは私がツインタワーを知らないからなのかもしれない）。不思議なもので写真の方がずっとリアリティーを感じられるのである。しかし、本当に9.11でアメリカが、そして世界が変わったのだとしたら、私たちはそこに何度も立ち返る必要があるだろうし、そこには「象徴」以上の意味を見出さなければならないだろう。

このように振り返ってみると、日米学生会議は私の興味関心を十分に満たしてくれるものだった。これが、私が日米学生会議を心から楽しむことができたひとつの大きな理由である。しかし、もちろんこれだけではない。日米学生会議への参加者との出会いは何にもかえがたいものであった。驚いたのは、アメリカの学生の人前で自分を表現することを楽しむ姿勢や、パフォーマンスのうまさ。そして、いろいろなことに興味を持とうとする姿勢である。そして、日本側参加者に対しては、はじめにみんなの自己紹介ペーパーを見たときにはあまりにみんなが普通ではなくてどうしようかと思ったのだが、みんなを知るにつれて「こういう子達が日本にいるの

だったら日本の未来も明るいかもなぁ」と感じるようになった。日米学生会議で出会った彼らは、これからの私の人生にいい意味でのプレッシャーを与え続けてくれるだろう。

もちろん、お楽しみもたくさんあった。初めて体験したボディーボード、飲みながらしたアメリカのゲーム、一つの部屋を暗くしてみんなで踊った夜、憧れのブロードウェイ体験など数え上げればきりがない。一方で言葉の壁や自分自身に足りないものを痛感することもあった。語学を上達させるコツは度胸と社交性だなと、まわりのみんなが英語力や日本語力を日に日に伸ばしているのを目の当たりにしながら思った。早起きで睡眠時間が短い団体での生活に、初めはなかなか慣れなかった。しかし、帰ってくるころには日米学生会議のメンバーは家族のような存在になっており、別々に暮らす方が不自然なぐらいになっていたのだから不思議である。

これらのことがびっしりと詰まった日米学生会議。この歳でこの夏にこのメンバーと一緒にこの会議に参加することのできた偶然に、私は感謝するばかりである。

能見　駿一郎

日米学生会議。

その経験から自分は何を得たのか。日本側とアメリカ側、合わせて 79 人もの学生が 1 ヵ月に渡って生活と苦楽をともにした本会議は、様々な意味で疾風怒濤と形容するに足るような濃密な日々だった。私たちは、随所で歴史と対峙し、相互の文化を体感し、それらについて深く考え、分科会ごとのトピックに留まらず幅広く意見交換した。そして、寝る間も惜しんで遊んだ。それは最高に濃密で、もの凄い経験に満ち溢れた非日常の日々だった。それは間違いない。しかし、そのような本会議を終えて早や 2 ヶ月、依然その経験を咀嚼し切れないでいる自分がいるのである。

本会議も終盤に差し掛かった頃、素晴らしい言葉が生まれた。「JASC-ing」日米学生会議の略称(JASC)を動詞に見立てた言葉である。そして、私たちは本会議の残り日数が少なくなるにつれ、より頻繁に「Keep on JASC-ing！」と言い合うようになっていた。それは半ば私たち 56 回日米学生会議参加者の間での合言葉のようでもあり、1 ヵ月に及ぶ共同生活を通して追求した相互理解の集積を表象しているかのようでもある。しかし、そのような、1 ヵ月に及ぶ生活と苦楽をともにした私たちだからこそなんとなく通じ合う「JASC-ing」という言葉も、どのような精神状態に基づくどのような活動状態を指し示すのか、その意味するところはよく分からないし、個々人によって違っているのだろう。また一方で、それは、個々人の問題を

離れた日米学生会議の存在意義は何なのか、という点にも結びつくように思う。個々人にとって「JASC-ing」という言葉が意味するものから個々人を捨象するとき、必然的に‘「JASC」とは？’という問いにぶち当たるからである。そして、近年の日米学生会議では必ずと言っていいほど議論の俎上に載っているようであるが、今回の本会議でも同様に根本的な問いが投げかけられていたことが想起される。「これまでになく日米関係が良好である中においての日米学生会議の存在意義とは何なのか」「自己目的化した相互理解に意義はあるのか」etc...

さて、ここまで本会議で自分が経験してきたことについて考え、その悶々とした心境を吐露してみて思うことがある。それは、誤解を恐れずに言うと、確かに日米学生会議に参加してこれまでになく濃密でもの凄い経験をしてきたし、本会議以前からそうなることを想像していたのだが、もしかして自分はそのもの凄い経験からそれに見合うだけのもの凄いものを得るであろうことを無意識的に期待し、半ば幻想を抱いていたのではないか、ということである。そして２つのことが想起される。１つは、事前活動に際して実行委員の一人が言っていた言葉である。「今を抗おう！」今となっては後の祭りではあるが、確かに事前活動の段階でもっとその時を抗い、複数あっても自分の目的意識をより明確にしておけば、本会議を経験して得たと言えるものもより明確であったのかもしれない。そして、もう１つ想起されるのは日米学生会議に参加するにあたっての自分の志望動機である。私の志望動機の１つは、「あらゆる問題を自らのものと捉え行動し、その一翼を担おう」という日米学生会議設立以来の精神に共感し、その精神と併せて、事前活動から事後活動に至るプロセスに魅力を感じるということだった。その点からすれば、今敢えて本会議での経験を咀嚼し切れなくとも、事後活動を通じて、またその先も自分が得たものを模索し続けようと思う。そして、それこそが自分にとって「Keep on JASC-ing」の一端なのだろうと思う。また、日米学生会議の存在意義についてであるが、一時的な中断期間を余儀なくされたとは言え、まず‘継続していること’に意義があるのではないだろうか。それは文化に似たようなもので、もちろん存在意義は時代背景とともに変化するものであり、逆に言えば修正も必要なのであろうが、それが長期間存在していればいるほどその存在自体に意義が増してくるように思うのだ。そして、今回もそうであったように、本会議において参加者の間で存在意義が問われるとき、過去の時代背景における過去の日米学生会議とその精神が回顧される、そこにも大きな存在意義があるように思う。そして、そう考えるとき、日米学生会議の創設者の方々に対してはもちろんのこと、以来日米学生会議を継承されてきたアルムナイの方々に対する敬意を表せずにはいられない。

若干蛇足ではあるが、今回日米学生会議に参加して、各サイトでそれぞれに異なる街の雰囲気、人間性を通してアメリカの多様性を実感した一方で、D.C.サイトの宿泊先で保守系の学生グループと遭遇したときの経験が非常に印象深く思い出され

る。彼のグループと特に交流があったわけでもなく、非常に感覚的なものに過ぎないのだが、日米学生会議とは対照的なオーラがあったように思うのである。それは、私たちの帰国後にあったニューヨークにおける共和党党大会に際して「二分されるアメリカ」ということが盛んに報道されたのが記憶に新しいが、その「二分されるアメリカ」を身をもって感じたかのような印象深い経験であった。

最後に、改めて本会議での経験を振り返って、自分は本当に素晴らしい人たちに巡り合ったんだなぁと感慨深く思う。依然本会議での経験が咀嚼し切れていないとは言え、その濃密な経験を通して他者理解と自己理解の織り成す相互理解の世界に身を置けたことは、本当に一生ものだと思う。そのような場を提供してくれた日米学生会議と56回参加者の一人ひとりに感謝したい。

白　雲

このあいだ、中国の京滬（北京―上海）高速鉄道建設をめぐり、日本の新幹線技術の採用に反対する声が中国のインターネット上で盛んになっていました。投稿者たちはみんな反日感情を高めており、一日も早く日本を打倒しようとしています。まだ戦争の謝罪問題などにこだわり、日本を攻撃しつづけている中国人はごく一部であろうと私は思いました。が、国へ帰って知人友人に聞いたら、このような反日感情は"日本製のものは買わない""日系企業には行かない"といった形を通して表面化しつつあります。

この反日感情は何処からきたのでしょうか。第56回JASCで学んだことを思いだしてみると、まず中国の学校教育の内容とメディアによる宣伝のことが思い浮かびます。

私は小さいときから社会主義の愛国教育を受けています。中国の近代史教科書には、日本が中国に対して戦争ばかりしてきたと書かれています。日本が侵略者であるイメージはあまりにも深いのでなかなか消えません。56回JASCでワシントンDCを訪れたとき、どこか自分の国がかつての被害者という目線で、私は各処の戦争記念館から自分の愛国心を確かめたいと思いました。いくつかのリフレクションまたスペシャルトピックを通して、多くのJASCERと話し合えた結果、中国の愛国教育の行き過ぎが私の中で狭隘なナショナリズムを生み出そうとしていることに気づきました。

さらに、この反日感情にはもっと深い原因があるはずです。それは、中国人の強い国に対するコンプレックスにあるのではないかと思います。戦後、中国と日本は

ほぼ同じ出発点に立っていました。しかし、30年後日本は世界の先進国の仲間入りを果たしましたが、中国は繰り返された政治運動により発展のチャンスを逃してきました。面積が日本の25倍、人口が日本の10倍もある大国の経済は日本より何十年も遅れています。この負けず嫌いの発想に励まされ、中国経済の急激な発展が遂げられたともいえます。しかし、一部の中国人は自国の遅れを冷静に直視できず、謙虚に勉強していくこともできないでいるのです。自分のことを被害者と思い込んで、いつまでも相手に謝罪を求めつづけています。最近、経済産業研究所の関志雄上席研究員は「『中華思想』それとも『被害妄想』」の中でこれについて鋭く指摘しました。中国と日本は一衣帯水の隣国です。歴史上ではいろいろなことがありました。しかし、ひたすら歴史の問題にこだわり続ければ、中日の友好関係はいつまでも陰りに覆われたままでしょう。

では、この反日感情はいつまで続くのでしょうか。90年代のグローバリズムの拡大により、一時は強大な世界市場の統合さえも可能に見えました。しかし、実際にはそれにより、富める者と貧困に喘ぐ者との格差は広がり、民族紛争や文明観の対立が明白となりました。その限界を露呈しているのは、アフガニスタンやイラン、パレスチナ、そしてアフリカの例などです。中日友好関係の構築はこのようなグローバル化の流れに任せてはいけません。もちろん、お互いに非難を繰り返すところからは友情は生まれません。

まず相手の懐へ飛び込むくらいの度量を私達は持てばいいのではないのでしょうか。そうすれば相手も忠告へ耳を傾けてくれると思います。これもまたJASCから頂いた宝です。

袴田　隆嗣

感想文とは感じたこと、想ったことを文として記述することです。しかしながら、感じた事、想ったことを文として記述するということは、一方で、記述されないものを必然的に生むことにもなります。これは、かかれない出来事に対しては感じていない、想っていないということに即つながるわけでは毛頭ないのですが、少なくとも記述されない部分へのネガティブな印象を与えることは間違いないと考えるのです。このようなことを私は意識していたのかしていなかったのかは分かりませんが、生れてから私がこれまでに書いてきた感想文は「いかにすべてをもらさず書くか」とういう努力がみられるものばかりでした。もちろん、「記述というエネルギーの要る行為を通してまで人に伝えたいことがある」ということを強調すれば、ある対象を切り取ってくる感想文というのは非常に有効な方法かもわかりません。しかしながら、日米学生会議の感想文を書くという行為は私に対して見逃す事のできぬ

ほどの違和感を覚えさせるのです。なぜなら、私が過ごした672時間の中で起こったできごとは一つ一つの個別の出来事の集合ではなく、ある統一された一つの出来事だったからです。よって私には日米学生会議へ参加したということは書くことができても、日米学生会議の個々の事柄をとりあげてそれらへの自分の感情、想いを書くことはできないのです。いや、できるかもわかりませんが、そのような努力をするのがどうか適切かどうか現在の私には判断しかねます。

このように書くことが、最も強烈な私の日米学生会議の記述となることを信じてかんそうぶんとさせてもらいます。

ジェフ　ハッチンズ

Three years ago, sitting quietly in my Japanese class, I first heard the name Japan-America Student Conference. I was intrigued by what I heard of its rich history, prestigious nature, student led structure, and influential leaders who had come from the program. Yet little did I know the next years of my life would be marked and shaped by JASC; leading me across several nations, over ten cities, and into the hearts and lives of hundreds. Between my time at the 55th and 56th JASC I feel I have lived a lifetime; a lifetime full of defining experiences, a lifetime of friendship and love.

JASC has been about many things for me. About being given extraordinary opportunities to grow and learn in countless key areas of life. Through roundtables, late night discussions, fields trips, guest speakers, and daily interaction I expanded my understanding of the world in an assortment of diversity ranging from gender issues to economic development. Every day during JASC my thoughts and ideas were challenged, guiding me down the path to developing myself and my opinions on life and the world. My experiences with JASC greatly expanded my academic interests and gave me a new fervency for learning and education. The people I met challenged me to be a better person, to push myself towards greatness – moving past good things and into the realm of great. Each friend I made through JASC left a piece of themselves in my heart. I carry these with me on my journey through life; allowing the pieces to guide me and give me strength during the storms of life.

Sometimes I have difficulty sorting the last few years out in my mind. Sensory overload generally occurs when I try to take it all in at once. Each JASC

conference is packed so tightly with events, discussions, receptions, and mostly personal interactions that the risk is run of losing out on what is really taking place. Blink and you might just miss how all the experiences were softly growing you in new directions. During the conferences I could hardly sleep at night, for I knew that people were discussing something somewhere, and I wanted to be part of it. I wanted to live as much of life as possible, to live in a place of no regrets.

People often ask me what JASC is, or what I did during my year in Japan when I worked with seven other incredible students on planning the 56th JASC. I have difficulty explaining it, for I do not think that JASC is a "thing" or "it" that can be explained. What makes JASC amazing? The people. How can anyone take over seventy unique, gifted, beautiful human beings and shape them into any one "thing" and describe "it"? I know I cannot, nor would I want to. You see, those pieces in my heart are ever expanding, they grow with me, and I never want to place them in a box with a label. Perhaps one day in ten or twenty years I will be able to fully explain, but for now I will continue to share my experiences, giving others the same opportunity which I was given. Here's to the journey.

原　奈央

第 56 回日米学生会議実行委員を 1 年間やり終えた今、去年の夏の終わりからすごした一日一日が私にとってどんなに意味のあったものであったかと改めて実感している。そして何より、私を喜ばせることは、日米学生会議を 2 度経験できたという事実である。

まず、最高の"仲間"たち 7 人と過ごした 1 年間は、これまで私の過ごしたどの 1 年にも変えがたい。良き「友達」の延長線上で、ほぼ一日も欠かすこともなく連絡を取り合い、1 つのゴールをともに目指し、実行委員結成から数ヵ月後には、もはや友達以上の、そしてどこか家族とは違った強い結束を持つ 8 人になっていた。都市部を駆け回った広報活動、深夜遅くまでかかった発送作業、月 1 回行った睡眠無しのミーティング、そして、一生忘れることのない選考の日々…。学業との両立に苦しみもがきながらも、私たちを最終的にこの地点に立たせたものは、常に支え合うことによって生まれた信頼と尊敬である。そして互いに身を粉にしながら乗り越えた 1 年の間に、ひとりひとり、見事に成長したことも事実である。尊敬できる仲間と 1 年間ともに仕事をこなすことができたことに、私は心から感謝したい。

そんな大切な仲間と過ごした1年に加え、私のもうひとつの大きな財産となったものは、日米学生会議の存在意義、役割について語り、考えた時間である。同じ仲間同士でさえも食い違ったそれぞれの会議の目的意識。会議は私たち実行委員のためのものなのか、それとも参加者のためのものなのか。会議に求めるものはいったい何なのか。日米関係が今の私たちにとって意図するものは何なのか、文化交流だけでは成し遂げられないものがこの会議にあるのだろうか。実行委員になって初めて目を向けた部分も多々あった。多様な思いが混同する中迎えた第56回日米学生会議。やはり今回も参加者の間で、会議の意義への困惑、文化違い故の衝突、実行委員の役割など、前会議と同じような問題にぶつかった。私たちがちょうど1年前に出くわした問題であり、そしてその後の1年間の間に、問題解決のために取り組んできたのが私たちであった。にもかかわらず、会議に対する疑問は絶え間なくぶつけられた。複雑な思いが入り混じる中で、ふと気づいたものはこれが私たちにとって会議の成功を意味するということであった。

63名の日米両国の学生が出会い、日米関係を語り、社会問題を語り、恋愛観を語り、そしてお互いを深く理解する場を造りだす。各会議において、たったひとつの「目に見えない」目標を達成することは極めて困難であり、多くの意味を後に残さない。なぜならば、毎回生じる問題により会議は受け継がれ、世代が変化すればするほど、その存在意義を保つことができるからである。

第56回日米学生会議の成功意義は、何を成し遂げたということよりも、第56回目を開催したということである。これからもこの会議が継続されることを心から祈る。日米関係の最終的な架け橋として、この会議を続けていくことによって日米学生会議の存在意義が満たされていくと信じている。

最後に、いいとも、あやの、さととも、あやや、たか、ゆうだい、ジェフ、一年間お疲れ様、そしてありがとう。いつまでも最高の8人でいよう。

久野　愛

"April showers bring May flowers"

同じ仲間と文字通り朝から晩までともに過ごすという、大変密度の濃い「集団生活」は、これまで経験したものとはまったく異なっていた。それは、単に本会議の場所が海外で、1ヵ月という長期にわたるものであったからというだけではない。ここに集まった学生は、「日米学生会議参加者」という共通点を除いて、多様なバックグラウンドと個性を持ち、各々の興味や関心のもと将来的な方向性も様々であった。そのため、学生会議に対する考え方やゴール、またアプローチの仕方も個々人

で異なっていたように思われる。だが、それぞれの道の途中でこの会議が共通の通過地点としてあらわれたことが、多様な個性の持ち主らをつなげ、またそうした様々な世界観の集まりだったからこそ、比類のない「集団生活」となったのであろう。

我々参加者は、自らを「JASCer（ジャスカー）」と呼び、そこでは同じ会議参加者としての仲間意識が芽生えてくる。それは、「JASCer」というアイデンティティを自らに付与しているともいえるだろう。しかしながら、学生会議という場から一歩外に出ると、学校や家庭などで各々は「参加者」として以外の世界も持っている。そうした参加者たちの一面に直接触れることは、残念ながら会議中は物理的にも不可能に近い。つまり、この会議で発見されうる「JASCer」としてのアイデンティティは、個々人を構成しているものの一つにすぎない。だがそれは、相互理解がなされていないとか、お互いに偏った見方しかしていないということでは決してない。会議に参加する仲間として出会い、そこから理解し合っていくことに、我々「JASCer」としての存在意義があるのではないだろうか。そして、本会議終了後からは、参加者という枠を超え、個々の生活の中において親友として、また先輩や後輩として、より広くより深い人間関係が築かれていくのだといえよう。

「非日常的」ともいえる本会議での経験は、ともすると日本での現在の生活から切り離されてしまいがちである。実際、1ヵ月間アメリカ4都市を回ってきたのだという事実を私自身も信じられないときがある。だが、たとえ会議での経験を消化するのに時間がかかったとしても、それが自分の中に組み込まれないままでは、会議の持つ意味が表面的なもので終わってしまうだろう。非日常を日常に繋げる作業が、これからの我々の課題であり、その意味で学生会議はまだ続いているのだといえる。なぜなら、1ヵ月間の本会議は、各々が築き上げていく道の一部分であり、それは、これからの道につながっているからである。従って、「JASCer」というアイデンティティやここで培った人とのつながりは、今後も個々人の重要な構成要素であり続け、そこから新たな発展が生まれてくるのであろう。これから我々は、それぞれの道を進んでいくわけだが、それは、「別れ」を意味するものではなく、ある一点でのつながりを維持し続けながら個々人の世界が広がっていくものである。

「April showers bring May flowers」という言葉があるが、これは、上記のような学生会議と我々との関わり方を端的に表している。直訳すれば、4月に降る雨のおかげで5月には花が咲く、というものだが、日本語では「苦あれば楽あり」という意味に近い。ここで、「4月の雨」を日米学生会議（期間中）に、「5月の花」を参加者の現在および未来に置き換えることも可能ではないだろうか。つまり、会議という雨は我々に十分な力と栄養の源を与えてくれたのであり、これからは個々人がそれらを利用して花を咲かせていく時だといえよう

さらにこの言葉には、万物のつながりということが含意されていると思われる。空から降る雨は、地中に浸みこみ植物の根から吸収される。茎を通って葉まで達すると、光合成によって、空気中へ水蒸気として放出される。そして天空に上ると、雲を形成し再び雨として地上に落ちてくるのである。この自然界の一連の流れの中で、植物は成長し花が咲く。そうした大きな世界の中における一つ一つのつながりは、本学生会議において学びうるものの一つであったろう。それは、人とのつながりのみならず、各々の人生における様々なつながりをも含むものであり、そうしたすべての中を日米学生会議という目には見えない「雨」が循環しているのである。

こうした世界とのつながりを感じながら、今後私は、自分という人間をつくり上げていきたい。人は、最終的に自分自身との対話によって成り立っているものかもしれないが、他人がいるからこそ自分の世界をつくり得るのであろう。よって、自分の道を切り開くうえでも、周りの声に耳を傾け、受動的ではないやり方で、流れに身を投じていきたいと考えている。学生会議を通して得たつながりは、私が世界の一部であるために重要な存在となったといえる。

広田　愛

私が日米学生会議に求めていたもの、それは「出会い」だった。アメリカとの出会い、全米、日本全国から同じ目的を持った学生との出会い、自分のアイデンティティーとの出会い、ステレオタイプとの出会い。日米学生会議はその意味で私の期待以上の出会いを与えてくれた。

この様々な出会が始まったのは会議開始の2ヶ月前の春合宿、いやそれよりもっと前、選考の面接の時点で始まっていたのかもしれない。それからの事前勉強会、直前合宿、また会議中、私たちは日米学生会議を通し普段お目にかかることのできないような方々や自分とはまったく違う人生を歩んできた方々、また人との出会いに限らず多くの発見に出会ってきた。しかし、この多くの出会いの中でやはり私の人生に一番影響を与えた出会いといえるのが自分を含め79人との出会いだった。

私たちは確かに7月25日、ハワイで正式に出会い1ヵ月の共同生活を始めた。しかし、一人ひとりとの出会いはその後1ヵ月に渡って、時にはバスの中、飛行機の中、食堂で、シャワー室で、ホワイトハウスやミュージアムの行き帰りの電車の中で私たちに訪れた。私たちは1ヵ月で4箇所の都市を回るという大移動をしていたし、日々新しい日程にそって生活していた。従って「後でまた」といって別れた相手とその日また話す機会が与えられることはほとんどなかったし、同じ人とバスに乗ることもゆっくり話す機会も繰り返されたことはほとんどなかった。それだけ

にこの一瞬一瞬の出会いはいつも特別だった。私はこの思いがけない形で起こる一人ひとりとの出会いに毎日心躍らせていた気がする。

1ヵ月という間に全員と十分な出会いができたとはいえない。私たちはお互いまだ知り合えていないことがたくさんあった。でも、私たちは自分たちに与えられた時間がわずかなことを知っていたから、少しでもお互いのことを理解しようと常に努めたし、無理をしてでも夜更かしをした。私はこれほどまでに寝る時間が惜しいと思った1ヵ月はなかった。この1ヵ月が私の中で特別にきらきら光っているのも、このような気持ちで毎日を過ごしていたからなのかもしれない。

日米学生会議の過去の参加者はみな口をそろえてかけがえのない友人ができると教えてくれた。今、私はそれが現実となり自分の経験として人に伝えられる喜びを感じている。

私は日米学生会議を終え、今までよりもこの瞬間、この時を大切にしていきたいと思う気持ちが強くなった。私はこれからも多くの出会い、また一人ひとりとの出会いを大切にしていきたいと思う。私がこの夏学んだ出会いの素晴らしさ、相互理解の美しさをこれからも感じていくために。

福田　愛奈

日米学生会議の感想文を書くことは困難を極めている。自分に文才がないからだけではない。この夏、わたしが考え、感じたことはあまりに「強く」、「多く」、言葉にすることが躊躇われる。わたしの語彙力ではこの夏を形容できないのである。しかし、明日は締切り、今日は台風直撃で外出が非常に危険なため、感想文を書くのに今日というチャンスは逃すわけにはいかない。

私は日米学生会議の選考に通る予定ではなかった。合格を知ったときは驚愕し、同時に気分がズーンと暗くなった。自分が育った米国を今の目で見てみたい、自分探しをしたい、と応募はしたものの、いざ参加が決まると、「どうしよう…」と取り返しがつかないことをしてしまったと気付いた。そんな気持ち（が更に強くなった）まま7月24日が訪れ、成田にいた。空港ではずっと逃げ出す機会をうかがっていたのをおぼえている。

日本側参加者にとっては時差による2回目の7月24日朝をハワイで迎えた。米国側学生との初対面ではただならぬエネルギーギャップを感じたが、このメンバーと本当に1ヵ月間会議をするのか、とその時考えていたらその場で倒れていたと思う。米国に住んでいた子ども時代のわたしはこんな人たちと毎日を過ごしていたの

か、と信じられない気持ちだった。

ハワイでは日米学生会議の70周年を祝う式典が続いた。70年という歴史を経て、会議が現存しているには理由があり、感嘆に値する。しかし、OB、OGのスピーチで繰り返される「life-long friendship」や「出会い」といった言葉には実感がなく、他人事のようにしか感じられなかった。

しかし80人近い日米の学生と会議が進むにつれ、わたしの憂鬱さは嘘だったかのように消えていき、皆といられることが純粋に嬉しくなっていった。あるOBの言葉「日米学生会議はpeopleなり」を自然と思い出していた。ところが会議の中盤のリフレクションで「日米学生会議とは何か」「自分がこの会議に参加している意義は何か」と切実な思いを打ち明けた数々の参加者にわたしは衝撃を受けた。明確な目標や期待を抱かず参加し、会議では毎日をただ満喫しようとしていた自分の甘さに気付かされた。成果が求められるべきであり、それを社会へと発信、還元することを目指すのが会議であるからには必須である、という要素を忘れていたのだ。自分が場違いであることに改めて悩まされるかと思ったが、不思議とそのような思いはもうなかった。リフレクションで涙を流した人は多かったが、その涙は悔しさや不甲斐無さゆえのものだけではなかった。どんな意見もどんな個性でも長所として認め合い、受け入れられるのが日米学生会議なのだ。これがわたしにとっての日米学生会議だった。参加者79人の個性を書いたら本ができてしまうのでここでは自分についてだけ書くことにする。会議中、わたしは言いたいことは言っていたし、今まではごく1部（家族など）の人にしか受け入れてもらえず隠していた自分もここ日米学生会議では自然と接してもらえた。多くを教えられ、考えさせられ、本当に仲良くなった友達もいる。彼らとはlife-longなfriendshipを築いていくであろう。日本でも米国でもなく、時間がとてつもなくて速くまた考えてみれば遅く、現実でないようでまた24時間プライバシー無しというとんでもなく現実的な不思議な空間で、1ヵ月しか知らないはずなのにずっと前から知っているような仲間に囲まれていた。自分に足りないものがあまりにも多く、またそれらがどのようなものか気付かされたのも事実である。うまくは言えないが、自分の中で長年モヤモヤしていた何かが晴れていった。

日米学生会議とは何か、人にも話せるような説得力を持つ結論はまだ出ていない。その答えを探すためか日米学生会議にまだ残っていたい、繋げていきたい、という単純な思いからわたしは会議を続けていく方法として第57回実行委員になるという方法を選んだ。第56回参加者は1人1人異なる方法で日米学生会議を己の中で続けていくであろう。OGとして何十周年かの式典でスピーチを聞くのが楽しみである。

福家　雄大

2004年8月22日深夜の東京で、仲間とつづってきた1年間を僕は写真を見ながら振り返っていた。2004年夏、僕は人生で2度目のJASCを終えた。実は、56回会議が終わるまで、そして、終わった後も僕のなかに日米学生会議の実行委員として1年間活動してきたことに対する達成感がほとんど沸き起こっていなかった。
56回会議を創造していくための1年間の過程で、僕が貢献してきたことは、同じ仲間にとっても決して十分なものではなかったし、自分にとって満足のいくものであったとも言いえない。日米学生会議の実行委員にとって、確固たる監督者がいるわけではない。だからこそ求められたのは、自分へのなみなみならぬ厳しさと仲間へ与える緊張感であった。緊張感とは、その大部分が自らの厳しさに裏付けられる行動しだいで相手に伝わるか否かが決まる。東京にいる実行委員とは離れた場所に住み、そこから他の実行委員と同じだけの活動をすることができないという物理的状況にもどかしさを感じ、幾度となく嘆息したものだ。しかし、ときにその事実を身勝手な言い訳に利用し、自分に課せられる仕事から逃げたこともあった。自分の行動ひとつひとつが良くも悪くも全体に影響する。自らの行動を律することによって、全体の緊張感を維持するという組織力としての重要な要素を確立するために自分が十分に役立つことができなかったことは心残りである。と同時に、今後の自分には、いかに自らを律し、自らを全体に反映させるかという課題が残された気がする。
夏の本会議では、英語を通しての理解力と表現力の乏しさとともにそれを克服できるだけのパーソナリティを備え合わせていない自分に苛立ちを覚えるという去年と同じ状態に陥った。そのうえ実行委員として発揮すべきリーダーシップを発揮できていないという焦りが、自分のふがいなさへの苛立ちに追い討ちをかけるように襲ってきていた。

去年とは確実に違う立場でJASCにかかわってきたものとして、どれほどのことができたのだろうかという思いは消えることはない。けれども、僕は実際に79人の仲間の一人として存在し、他では共有することのできない経験と友情を分かち合った。彼ら彼女らの価値観から新しいものの見方を学び、あるいは同じ価値観に共鳴した。それは自分に新たなモチベーションを呼び起こすものであった。

僕にとって今回のJASCは、自分自身への課題を突きつける機会であったと同時に新たなモチベーションを与える機会でもあった。そして新たな仲間との出会いは限りない未来の可能性を示唆するものだった。1実行委員として、そして1参加者として会議をより充実させるために僕ができたことを自分自身で明確化することは、はっきり言ってできない。しかし一方で、実行委員の活動と本会議としての夏からなる一続きの1年から僕が経験したことは、測り知れない深みをもって後々まで僕

自身に影響を与えるということも事実である。

アメリカから帰ったその日の夜、夢のような1ヵ月を終え、僕は仲間と過ごした1年を振り返る。写真に写る仲間の姿と自分の姿、その一瞬一瞬に今の正直な思い、そして既に感じ始めている仲間と過ごした1年間へのせつない気持ちを閉じこんで、この文章の結びとしたい。

三谷　佳孝

「アメリカの学生とただ話がしたかった。」

選考試験の時に、日米学生会議や分科会への熱い想いを述べたが、今思い起こしてみれば動機はただ、話したかった。それだけだったのだ。

大阪に生まれ育ってきた自分は、自分の生活している地域以外のことを良く知らず、春合宿の時に初めて日本国内でもこれほど多様な学生がいるということを知り、39人とともに創り上げていく夏に期待を膨らませていった。

本会議前には事前勉強会が催された。各参加者の興味に即した勉強会は、普段自分が勉強している内容とは全く違う分野のものもあったが、参加してみて無駄であったという印象は全くない。すべて自分に、新しい見地を与えてくれる素晴らしいものであった。同時に、毎週開催される勉強会において他の参加者に会うのが楽しみであった。それ程までに、個性の強いメンバーが集まっていたのだ。約1ヵ月に渡る会議を終わった今でも、その思いは変わらない。

長い準備期間を終え遂に本会議がスタートしたが、最初のサイトであるハワイについた時には、ボロボロの状態であった。飛行機の中では一睡もできず、気分の悪いままアメリカ側参加者と対面しなくてはならなかった時は、正直言って逃げ出したかった。全く英語をしゃべる気にもならなかったが、自分のおかれている状況を見つめ直して、頑張って笑顔を作ることにした。そんな気持ちの乗らない私に対して、バディーであったハンターはまさに最高であった。なぜなら、リラックスして会議に臨める雰囲気を作り出してくれたからだ。彼に関しては色々な思いがあるが、会議を終えて素直に心から笑顔で「ありがとう」と言いたい。

ハワイに滞在していた時は純粋に会議を楽しめていたが、文化の違いと言語の壁は、日を追うごとに私の心を蝕んでいった。文化の違いは、時間厳守、食文化、生活スタイルに顕著に表れ、言語の壁は英語の能力というよりもむしろ、ディスカッションスタイルで感じられた。ワシントンで全体のリフレクションがあった時に、

何人かの日本側参加者が突然、不満や悩みを打ち明けたが、その日を境に会議の中で何かが変わったと感じた。何も伝えないと相手には伝わらない。このようなきっかけを作り出してくれた一人の多くの勇気に多くの感謝の念を送りたい。

会議中には分科会という大きな軸が存在し、ここで我々はアカデミックに迫る機会を与えられた。正直、期待しすぎていた面もあったので効率的に進行しない分科会に対して苛立つことが何度かあった。分科会は回数を増すごとに円滑に意見交換が行われるようになり、後半の分科会には満足しているものの、あれだけの時間を割いてどれだけのものが得られたのかと思うと、やはり不満は残る。分科会の成果を発表するために最終サイトのプリンストンでは、フォーラムという場が与えられた。内容的には面白かったものの、正直メインテーマにそぐわないフォーラムの在り方と最終的に自己満足で終わってしまったことを考慮すれば、改善の余地は多く見られるのではないだろうか。

来年は、実行委員として第 57 回日米学生会議を創り上げていくことになる。それは、第 56 回の会議に満足し日米学生会議というものに強く惹かれた反面、今年の会議に参加して自ら感じ取った改善できる点を実行に移していきたいからだ。そして、できるだけ多くの学生に日米学生会議でしか体験できないことを感じてもらいたいという強い意志と、使命感も感じている。そして、この私を選んでくれた多くの参加者の好意にも応えたい。

ところで、「日米学生会議とは何か？」と良く尋ねられたり、自問自答したりする。冒頭でも書いたように私の今回の参加動機は「アメリカの学生と話したかった」ということである。その点において、個人な意義と目標は達成されているが、会議中に何人かの参加者が苦悩したように日米学生会議が行われる全体的な意義を考えると、私はまだ明確な答えが出せていない。来年の今頃には、自分なりの解答を見つけ出したいが、現時点では、今年の会議で私が見て、聞いて、動いて、感じたものすべてを次の世代に伝えられるように努力していきたい。

最後に、第 56 回日米学生会議のために最大限の力を尽くしてくれた実行委員、また我々をいろんな面で支えてくれたすべての方に感謝の意を込めて、私の本会議の感想文を終わりとしたい。

村上　裕子

JASC に応募した理由、それは自分の知らない世界に首をつっこみたくなったからだ。しかも JASC といえば何かアカデミックでかっこいいイメージがあり、正直

これに行けば今までの単調な自分の人生のエッセンスとなり、さらにはハクがつくのではないだろうかというような気持ちを当初は持っていた。

しかしいざ行ってみると少々拍子抜けであったように思える。期待していたようなかっこいいアカデミックなものはあまり感じられなく、ただ異文化交流をしたい日米の学生同士が集まったサマーキャンプのように感じていた。こんなえらそうなことを書いている私はといえば専攻は英米語で分科会であった国際政治とはあまり関わりはなかったため、本音を言えばアカデミックになってしまっていれば実は困っていたところだ。ただ私のJASCに対して持っていた期待値だけが高すぎ、自分の現実とかけはなれてしまっていることにも気付いていなかったのだろう。このようなことに気付き、JASCへの考えを変えたとき、私の気持ちがパァーッと晴れた気がした。

今振り返ってみると、JASCに行くことによって私はさらに「知ること」への意欲が深まり、自分の無力さも知ることともなり、一生続くであろうかけがいのない友達とも出会い、一生で何本かの指に入るほどの、内容の濃い夏休みだったのではないだろうか。

行ってよかった、JASC。

女鹿　智恵

今年の2月、日米学生会議のポスターを大学の掲示板で見つけたとき、「ビビッ」ときた！大学院進学が決まり、2年間の大学院生活をどのようなものにしようかと思い巡らせているときだった。私はポスターを見てすぐに、日米学生会議に迷わず申し込んだ。自分を成長させてくれる何かが得られるような気がしたからだ。

日米学生会議で得たものの中で、最も大きかったもの。それは、一人ひとりとの出会いだったと思う。それぞれの個性が輝く参加者達と1ヵ月の生活をともにすることができたのは、新たな仲間と語り合う喜びとともに、自分自身を見つめなおす大切な機会を提供してくれた。

最初のハワイサイトでは、日米学生会議70周年記念をアルムナイとの方々とお祝いした。1934年、満州事変後悪化しつつあった日米関係を憂慮し、日米学生会議を創設した日本の学生たち。その意志が行動に移され、脈々と70年間受け継がれてきたことを、アルムナイの方々とお会いして実感することができた。

サンフランシスコでのホームステイ。私のホスト・ファザーは、なんと第７回日米学生会議に参加された、JASCER だった。第７回というと第二次世界大戦前。日本開催年だったため、アメリカから参加者一行が船で日本まで来たというから驚きだ。夕食のときに、当時出航する際の風景の絵画を見せていただいた。また、そのご家庭には二条城や、武家屋敷の絵画が飾ってあり、日本に旅した思い出を語ってくださった。日本を大切に思ってくださる気持ちにとても感動した。

「パール・ハーバー」「WWII メモリアル」「グラウンド・ゼロ」等、私達は「平和」について見つめなおすべき場所を訪れ、意見を交わした。私は現在大学院で国際関係学を専攻している。人々の「平和」に貢献すべく、研鑽する決意を新たにした。

第 56 回日米学生会議は終わったが、参加した私達はそれぞれのスタートラインに立ったと思う。これから社会で果たしていく役割を、会議という枠を超えても語り合える仲間を私達は得ることができた。

時には笑顔で、時には涙で語り合える、そんな素敵な JASCER 達と出会えたことを誇りに思う。最後に、日米学生会議で出会った仲間たちに「ありがとう」！！

森上　翔太

会議も終盤、いよいよ来年の実行委員を決める選挙が行われる頃、ひとりのアメリカ側参加者から、差し迫った選挙で読むスピーチの原稿を日本語に訳すことを手伝ってもらえないかと頼まれた。もちろん僕は承諾し、ルーズリーフに手書きで何度も書き直された英語の文章を、一緒に日本語に訳す作業が始まった。

もともと僕は、スピーチがおよそ「来年実行委員として私がやりたいことは・・・」といった類いの、政治家の選挙でよく耳にするフレーズの繰り返しになるだろうと漠然と予想していた。ところが、いざ文章を読んでみると、「たとえ私が実行委員になれなくても、来年の会議の成功を祈っています」とか、「私がここで得た素晴らしい経験を、ぜひ来年の参加者にも伝えたい」といった、何の飾りもない純粋な気持ちがそこには表されていた。中でも特に僕の目を引いたのは、「この JASC の良いところは、みんなが皆、安心してありのままの自分で居られる場所だということです」という一文だった。

「ありのままの自分」で居られること・・・恥ずかしながら、はじめは何を意味した言葉なのか考えが及ばず、思わず彼女に聞き返した。ところが彼女はただ困っ

た顔をして、言葉通りの意味しかない、といった返事だった。

ひとまずスピーチを完成させるため、とりあえずそれを言葉通りに訳し、ほどなく全体を日本語に訳し終えた。そこで、もう1度自分の中で繰り返しその言葉-「ありのままの自分」で居られること-の意味を考え、ふと、それがごく自然に自分が実行してきたことであるのに気がついた。

おそらくこれは僕だけでなく、日米学生会議に参加したこれまでの多くの人、これから会議に臨む数知れない学生たち、そのほとんどすべてに当てはまることだろう。自分が何を恐れるわけでもなく、どんな他人を演じるでもなく、JASC という空間でゼロから始まる人間関係を全うし、その過程において周りの数十名という他者を受け入れ、そうして自分を見つめ直す・・・。

学校や部活と違い、半強制的に集められた訳でも、1つの結果を出すために集まった集団でもない。ただ、1ヵ月という長くも短くもある時間をともに過ごし、またそれぞれの生活に戻って行く。このような特殊な環境のなかで、充実したと思えるようになるには、自分を包み隠さず表現し、互いに認めあうことが不可欠だと思う。

当たり前と言えば当たり前のこのことを、それぞれが無意識のうちに実行し、まるで共鳴しあうかのように時間とともにその輪が広がって行く。そうして会議の終盤を迎える頃には、初めて会った仲間とは思えない不思議な感覚を抱いていることに気づく・・・

日米学生会議の良さの1つに、そんな事もあるんじゃないかと思う。日常とは離れた特殊な空間だからなのか、こうして「ありのままの自分」でいられた夏は、今となってもまるで昨夜の夢のようにはっきりと、だけどどこか遠くに息づいている。

山田　悠花子

「JASC の感想かぁ。。。」

提出期限3日前。さすがにやばいと思ってパソコンに向かう。ずっと進まなかった感想文。パソコンを目の前にして打ち出すがすぐに手が止まる。Tony がコピーしてくれた rent の曲を聞きながらもう一度パソコンに向かってみる。1年は525600分なんだぁ。。。瞼を閉じると、みんなが舞台で手をたたきながらこの曲を歌っていた光景が蘇ってくる。JASC でみんなと過ごした時間は時差とか無視して、おおよそ37440分くらい（ホント?）？んー、ピンとこない。けど、1年の12分の1を過

ごしたJASC。よく考えると、よくもまぁ、あんなにいつも一緒にいたものだ。

56 回の JASC、79 人が一緒に過ごした夏は確かに終わった。会議が終了して 1 ヵ月経った今、感想と言われてもピンとこないのはなぜだろう。東京での新しい生活のおかげで振り返る余裕がなかったから？ML やメールでのやりとりはあるから？？日本にいるメンバーとは会おうと思えば会えるから？慣れないパソコンを使っているから？最後のパソコンのこと以外はおそらく理由として考えられるかもしれない。

会議中によく考えることがあった。「この会議は 22 万円（私には大金！！）を出して参加する価値のあるものだったか？」

院生での参加ということが強く影響していたのかもしれない。当初から私はこのJASC に参加することを単なる「ある夏の楽しい思い出」だけにしたくはなかった。「友情」だけで終わらせたくも無かった。会議中、これでもか、というくらいに出てきた言葉、”life-long relationship”。私はこの言葉はくすぐったくてあまり好きではない。”life-long”って、「もし、私が明日死んでしまったら、あなたと私の関係はどれくらいの長さの relationship だったことになるの？」と、意味不明なへ理屈を言いたくなる。第一、私は友達を作るために会議に参加するのではないのだから。

事前合宿の時に、「JASC は何かを与えてくれるものではない。すべては自分次第。自分達がこの会議をつくっていくんだ」と委員長他、実行委員達に言われつつも、私は往生際悪く、心のどこかでは「でも、JASC は私を変える何か大きなものであるに違いない」と思っていたし、期待もしていたように思う。事前学習の段階で遅れを取りたくないという気持ちと、JASC モードに気持ちを高めたいという理由から、東京や大阪で行われる勉強会へ可能な限り足を運び、分科会では愛知での事前フィールドワークも計画した。

会議が終わった今、素直に思うことは、JASC は、やはり何かを与えるものではなくて、そこから自分が何かを見つけるところだということ。JASC はやっぱりJASC。それ以上でもそれ以下でもなかった。

学んだこと、得たものもたくさんあった。しかし、会議を振り返ってみると、いまさらながら「・・・していたらな」ということが先に思い浮かんでくる。フォーラムや、パネルディスカッションでの英語が聞き取れず居眠りをしてしまったこと、話の内容をしっかり理解できず積極的に議論に参加できなかったこと、質問すらできなかったこと、参加者間でどれくらい mutual understanding ができているのか疑問だったこと、周りが見えず自分のことだけに集中してしまったこと、会議後半、互いに疲れが溜まってきた頃日に気が付けば日本人の近くにいたこと・・・等々。

自分に足りないもの、これから身に付けていきたいものを数多く教えてもらったように思う。

また、JASC はこのうさんくさい"life-long friendship"を信じてみようと思わせてくれる仲間達に出会えた場所でもあった。帰国前、やはり、1 ヵ月あれだけ一緒にくっついていているのだから日本に帰ったら寂しくなるだろうな、と思っていた。ここにいる仲間達に「また明日ね！」と言わない日々が想像できなかった。しかし、残念なことに予想に反し、意外に寂しくない。(私を見ても誰も手をたたかないことには未だに寂しさを覚えるが・・・) JASC での日々がすっぽり抜ける感覚よりもむしろ、JASC は私のどこかにあるという感を覚えるからである。上手に説明できないが、心に「何か」がくっついているような感覚。会議の感想が進まなかったのは、JASC は終わらない！！まだ続いていのだ！！なんてカッコいいことを思っている訳ではないけれど、JASC は良くも悪くもずっと私について回るものという感が強いからかもしれない。そしてその付き合いは既にスタートしてしまっている。"JASC-ing"しているのだ。

「この会議は 22 万円（私にはやはり大金！！）を出して参加するまでの価値のあるものだったか？」

この問いをふり返った時、現段階で私の中で落ち着いている答え。それは、「"YES！！"と答えられるようになるぞ。これからもよろしくね、JASC！！」である。

最後に、JASC を通じて出会ったすべての人に心からの感謝を捧げたい。貴方たちに出会えてよかった。ありがとう。

第６章

第57回日米学生会議概要

第57回日米学生会議テーマ

開催地及び開催期間

会議の過程

会議中のプログラム

第 57 回日米学生会議概要

企画・運営　第 57 回日米学生会議実行委員会

第 57 回日米学生会議テーマ

Exploring the Roles and Possibilities of the Japan- America Partnership
共に創る明日　～戦後 60 年を今日振り返る～

1934 年、学生有志の提唱のもと創設された日米学生会議は、日本で長い歴史を誇る国際的学生交流プログラムである。「世界平和は太平洋の平和に、太平洋の平和は日米の平和にある。その実現のために学生も一翼を担うべきである」という創立当時の信念に基づき、70 年間継続されてきた。日米学生会議は創立以来、学生の相互理解と友情を促進し、毎夏日米交互で行われる約 1 ヵ月間の会議は、すべて学生の手で企画・運営されている。

第 57 回日米学生会議は、“Exploring the Roles and Possibilities of the Japan-America Partnership”「共に創る明日～戦後 60 年を今日振り返る～」をテーマとして掲げ、滋賀・京都、広島、沖縄、東京で開催される。歴史軸を念頭に、環境問題でも注目されつつある滋賀・京都で日本の根底にある精神や伝統に触れ、次に広島で、原爆の悲劇、戦後の復興や平和について考える。地上戦の舞台となった沖縄では、戦争が終わった現在も抱える基地問題を踏まえ、安全保障問題を中心として日米関係について議論を交わす。そして、会議の成果を情報の発信地である東京にて発表する。あらゆる議題について、日米双方の参加者と現地の人々の視点から考察し、率直に意見を発表すること、また、意見や経験の異なる者同士で学び合い、理解を深めることを目標とする。戦後 60 周年を迎えて、私たちはどのような世界に生きているのか。歴史を共に振り返り、その延長線上に生きる私たちの現在を認識し、未来を見つめなければならない。グローバリゼーション、地域主義、テロリズムや対テロ戦争、核問題、情報化社会など様々な要因によって世界情勢は日々めまぐるしく変化し、その中で日米関係のあるべき姿が改めて問われている。そのような今こそ、日本と米国という二大国家のパートナーとしての可能性を十分に模索しながら、現代における役割を認識するために討議する意義は非常に大きいのではなかろうか。

学生という立場には、限界があるかもしれない。しかし、私たちは学生だからこそ、肩書きにとらわれず、利害関係を超えた議論ができると信じている。日本各地の訪問、率直な意見交換、講師を招いた勉強会や講演会、フィールドトリップや文化交流を通じて、私たち自身について、そして私たちが創るべき未来について考える。そして、会議中、また会議後の活動を通じ、社会発信と社会貢献を目指して第 57 回日米学生会議を創り上げたい。

開催地及び開催期間

開催期間

2005 年 7 月 27 日（水）～8 月 23 日（火）

滋賀・京都

第一サイトは滋賀、京都をまたいで開催される。面積の六分の一を最大の湖「琵琶湖」によって占められている滋賀では、人々は湖とともに歩んできたといっても過言ではない。美しい琵琶湖を保つために、環境保全には特に力を入れている。2003 年には「世界水フォーラム」が催され、国際社会へのアピールにも成功した。また、都市開発や大学の進出によって人口増加率は全国トップレベルであり、成長過程にある都市像を見ることができるだろう。一方で平安遷都以来、様々な歴史を刻んできた古都京都。多くの寺社が立ち並ぶその町並みと風景は独特であり、西陣織、清水焼など日本有数の伝統工芸品も存在する。一つの場所にとどまらず、幅広い視点でこの地域を見る事によってこの地域の持つ特色を感じとれるだろう。

広島

原爆投下から 60 年経った今、広島は長崎とともに平和都市となった。今日、日本人のみならず、世界中の人々がヒロシマと聞いて原子爆弾の悲惨さを連想するのではないだろうか。広島の被爆者はあれから何十年も世界中の人々に戦争の悲惨さを語り、ヒロシマの重要性を人類の記憶にとどめてきた。しかし時が経つにつれ、被爆者の数も減り、直接体験を伝えられる人が減少してきた結果、人々の戦争の記憶が風化しつつあるのも否めない。戦後 60 年を迎えようとする今、広島を訪れ改めて平和と戦争の意味、平和教育の実態、非核三原則、ヒロシマに対する歴史認識、日米関係のあり方などを考察し、世界の平和と未来を見据えるのは日米学生会議参加者にとってとても有意義なことだろう。

沖縄

古くから、武力によらず他の地域と相互依存を深めることで安定を確保してきたため国際色豊かであった沖縄。地理的特異性から独特の文化を育み、現在もそれを受け継いでいる。一方で、沖縄が第二次世界大戦中日本で唯一の地上戦の舞台となり、現在でも米軍基地問題を抱えているのは周知の通りである。そのような背景をもつ沖縄は、日米両国はもちろん、世界から注目されている。

沖縄は、京都、広島で日本の過去を振り返った私たちに現在進行形の問題を考へるヒントを与え、東京での私たちの議論をより豊かなものとする格好の場所となるであろう。私たちの問題意識は国と国との関係だけでなく、国家と国民の関係、風土と人間の関係にさえも及ぶ。

東京

首都東京は多くの企業、政府機関が集中する日本の政治的、経済的中枢であり、同時に常に新しい情報、文化を発信し続け、人々を惹きつけてやまない。人口 1200 万余りを有する世界有数の大都市である東京は日本の中心としての“東京”だけではなく、世界の中の“TOKYO”へとその国際的地位を高めており、日米関係の最前線として重要な役割を果たしている。このような東京で私たちは京都、滋賀、広島、沖縄で得たものを再構築し、会議の意義、そして会議のテーマである“共に創る明日”とは何なのかを改めて考える。終盤のフォーラムでは会議の成果を社会に発信するが、絶えず世界に存在感を示し続ける東京はその最適な場所だといえよう。

会議の過程

第 56 回日米学生会議の参加者から選出された実行委員が、日本側は主催団体である財団法人国際教育振興会、米国側は JASC Inc.の協力の下、本会議開催のための準備活動を行う。参加者が決定後、所属分科会のテーマに関するレポートを作成し、講演会や勉強会、合宿などを事前に行い、夏の本会議に臨む。

本会議では、日米各 40 名、合計 80 名の学生が約 1 ヵ月にわたって共同生活を送る。本会議中の主な活動として、討論が中心となる分科会、各種のフィールドトリップ、そして様々な社会活動、終盤に開催されるフォーラムなどが挙げられる。参加者が 8 つの分科会に分かれ、第 57 回会議のテーマである「共に創る明日～戦後 60 年を今日振り返る～」の下、ディスカッションを行う。また、フィールドトリップでは、各自の視野を広げ討論の充実化を図る。さらに、本会議では議論のみにとどまらず、ホームステイやフォーラムなど積極的に地域の方々との交流を図っていく。フォーラムでは、分科会での討論の結果など本会議の成果を社会へ向けて発信する。

本会議終了後には、参加者は会議の内容を報告書にまとめ、第 57 回日米学生会議の総括とする。各参加者は、本会議で得られた経験を胸に社会へと巣立っていく。

会議中のプログラム

分科会

本会議において活動の中心となる分科会は 8 つ設けられており、日米双方からなるメンバーが、本会議期間を通じて議論を重ねる。事前準備に加え、本会議中もフィールドトリップで関連機関や専門家を訪ねるなど、議論の質の向上を目指す努力が続けられる。なお、第 57 回会議における分科会は以下の通りである。

・文化—伝統とポップ　*Culture: Tradition and Pop*
・ジェンダーとアイデンティティー　*Gender, Sexuality, and Identity*
・社会変動と政策　*Emerging Social Problems and Phenomena: Issues and Legislation*
・安全保障と平和構築　*International Politics: Peace and Security*
・地域主義　*Regionalism*
・世界市場経済と日米社会の再編成　*Globalization and Economic Restructuring in Japan and the US*
・科学技術と現代社会　*Science and Technology: Social Responsibilities*
・グローバリゼーションの功罪　*Social and Cultural Implications of Globalization*

フィールドトリップ

分科会の議題や各開催地に関する理解を深めることを目的に、政府機関、国際機関、企業、大学および研究所などへ訪問研修を実施する。事前活動におけるものと同様に、社会と直接関わることのできる貴重な機会であり、現実に即した議論をするための基礎とする。

ST (Special Topic)

論題が既に固定された分科会とは異なり、参加者が様々な論題を自由に設定し、自発的な意見交換、議論、交流を行う。参加者の新たな視点の獲得や発想を促すと同時に、本会議をより一層充実させることを目指す。

CWD（Conference Wide Discussion）

参加者全員が一堂に集まり、会議の中で感じた様々なことを話し合う。このCWDを通じて、自分の思いを伝え、会議中に感じた悩みや不安を共有することによって他の参加者との相互理解を深めることを目的とする。

フォーラム

会議の最終開催地、東京で行われる。本会議における分科会の議論の発表など、第57回日米学生会議の成果を提示する。現代社会が抱える問題を来場者と共有し、会議の成果を社会へ発信することを目標とする。

CFT（Constructed Free Time）

各サイトにそれぞれ設けられており、参加者が独自の計画を立てて行動をすることができる自由時間である。サイトに対する理解を深めるとともに、それぞれの興味に即した活動を行うことができる。

第７章

日米学生会議にご協力いただいた方々

協力者

賛助者・団体・企業

第56回日米学生会議　協力者

敬称略、順不同

第56回日米学生会議主催・後援

主催：財団法人　国際教育振興会
後援：外務省　文部科学省　米国大使館　日米文化センター
　　財団法人　国際ビジネスコミュニケーション協会

会議全般

財団法人　国際教育振興会	
理事長	大井孝
日米会話学院院長補佐	鈴木堯
総務広報部　広報担当部長	稲田脩
総務広報部　主任	水野詠子
国際教育振興会賛助会	
事務局長	伊部正信
事務局	山崎花里
The Japan-America Student Conference, Inc.	
理事長	Bill Clark
専務理事	Gretchen Donaldson
外務省	
文化交流部　人物交流課長	森下敬一郎
文化交流部　人物交流課	西池万葉
文部科学省	
大臣官房国際課　課長補佐	飯澤隆夫
米国大使館	
広報・文化交流部　教育・人物交流室	松元美紀子
財団法人　国際ビジネスコミュニケーション協会	
理事長	森重利直
専務理事	吉澤誠司
GHRD 推進室主任	田代美智子
日米文化センター　日本代表	伊部正信
財団法人　世界平和研究所　理事長	大河原良雄
社団法人　日米協会　副会長	緒方四十郎
三菱商事株式会社　取締役会長	槙原稔
日米学生会議 OB 会	
会長	山室勇臣
幹事長	中瀬正一
京王観光株式会社　東京中央支店　セールスリーダー	小川富良
インターネット・ビジネス・ジャパン株式会社	
	工藤正詔
	武田真
株式会社実業公報社　常務取締役	古屋繁
株式会社千修	加藤圭一郎

事前活動

全般
日本放送協会（NHK）京都放送局
京都大学新聞社
立命館大学
早稲田大学ガーディアン

講演会・勉強会講師

国際基督教大学客員教授	柴田鉄治
朝日新聞社	武井宏之
大阪市議会議員	福島真治
東京大学大学院総合文化研究科　博士１年	福田潤一
防衛庁	
一等陸佐	山内大輔
二等陸佐	吉田圭秀
防衛大学校	
学校長	西原正
教授	源田孝
教授	清道清二郎
学生代表	小笠原健一
文部科学省　科学技術・学術政策局	上田智一
神戸大学名誉教授	松本悟
スピーチディベート研究所代表	井上敏之
同志社大学助教授	村田晃嗣
青山学院大学助教授	武田興欣
大阪大学助教授	ロバート・D・エルドリッヂ
東京朝鮮中高級学校の皆様	
株式会社公文教育研究会	
グループ広報室・室長	橋口健
広報デスク	山崎恵美
日米コミュニティ・エクスチェンジ　事務局長	セラジーン・ロシート
日本経済新聞社　論説委員	伊奈久喜
DNA チップ研究所　取締役社長	松原謙一
	野元克彦

本会議活動

ホノルルサイト

University of Hawaii	Dr. Robert N. Huey
	Dr. George J. Tanabe, Jr.
	Dr. Takie Lebra
	Mr. Bob Huey
	Dr. Gay Michiko Satsuma
	Mr. James F. Cartwright
	Dr. David McClain
	Mr. Richard A. Kennedy
	Ms. Kristen K.C. Bonilla
University of Hawaii, East-West Center	Dr. Charles Morrison
	Mr. Dennis Donahue

	Dr. Terance Bigalke
	Mr. Marshal Kingsbury
	Ms. Mendl Djunaidy
	Ms. Wendy A. Nohara
	Ms. Sherrie Shiroma
	Ms. Patricia Matsunaga
	Ms. Susan C. Kreifels
	Ms. Ruriko Kumano
	Mr. Ricky Kubota
Office of the Governor, State of Hawaii	Governor Linda Lingle
	Mr. Glenn K. Shigeta
Consulate-General of Japan	Mr. Masatoshi Muto
	Ms. Hiroko Taniguchi
Japan-America Society	Mr. Earl Okawa
Japanese Cultural Center of Hawaii	Mr. Brandon Jiro Hayashi
	Ms. Keiko Bonk
USS Missouri Memorial Association, Inc.	Mr. Scott Osborn
Battleship Missouri Memorial	Mr. Lee Collins
Tateuchi Foundation	Mr. Atsuhiko Tateuchi
Commander, U.S. Pacific Fleet	Mr. Dean Vaughn
Double Tree Alana Hotel Waikiki	Ms. Annie Nevarro
	Mr. Clyde Nakasone
Oahu Visitors Bureau	Mr. Scott Suemoto
FedEx Kinko's	Mr. Wayne Gomes
Super Star Hawaii	Mr. Nate Chargalaf
Fox 2	Mr. Jai Cunninghum
Hawaii Hochi, Ltd.	Mr. George Shimba
The Honolulu Advertiser	Ms. Vicki Viotti
	Mr. Bruce Yamashita
	Mr. Steve Okino

サンフランシスコサイト

Mills College	Dr. Ruth Saxton
	Dr. Emery Roe
	Dr. Bruce B. Williams
	Dr. Andrew A. Workman
	Dr. Wah K. Cheng
Japanese American Museum of San Jose	Mr. Jimi Yamaichi
	Dr. Joseph Y. Yasutake
Consulate-General of Japan	Ms. Hisako Takahashi
All Host Families	

ワシントン D.C.サイト

George Washington University	Ms. Ikuko Turner
	Mr. Hideki Rose
	Mr. Jim Smith
	Mr. Seth Weinshel
	Dr. Mike Mochizuki
	Dr. Amy Searight
United States Department of State	Mr. Stephen B. Wickman
	Mr. Wendell Albright
	Ms. Katherine L. Giles

	Mr. Norman S. Hastings
Embassy of Japan	Mr. Kojiro Shiojiri
	Mr. Hiroshi Kamiyo
CSIS	Mr. Bill Breer
Boys & Girls Clubs of Greater Washington	Ms. Patricia K. Gunnin
	Ms. Tracy Taylor
	Ms. Paula Whaley
National Association of Japan-America Society	Mr. Samuel M. Shepherd
Bridgestone Firestone	Mr. Steven Akey
Center for Global Partnership	Ms. Naomi Sugie
Projects of Harmony & World Peace	Ms. Sharon Hamilton-Getz

プリンストンサイト

Princeton University	Dr. Seiichi Makino
	Mr. Martin C. Collcutt
	Mr. Richard Chafey
	Ms. Tara Zarillo
UNA USA	Ms. Melissa Yahre
UNICEF	Ms. Herb Frank

その他全般

天野順一	井伊雅子
市川裕康	岩崎洋一郎
岩澤雄司	梅崎渉
遠藤繁	大高巽
金井隆	金谷憲
木ノ上高章	小林規威
桜井清治	鈴木啓正
芹沢ユリア	高橋香織
故田端利夫	玉城美穂子
丹羽　秀夫	辻喜久子
千代明弘	冨川秀二
中山智夫	古澤昭子
降旗健人	寶槻徹
宮本昭八	山田勝

第55回日米学生会議実行委員会／参加者一同

第56回日米学生会議 賛助者・団体・企業

敬称略、順不同

財団法人　石橋財団
財団法人　鹿島平和研究所
財団法人　国際教育財団
財団法人　国際ビジネスコミュニケーション協会
財団法人　日商岩井国際交流財団
財団法人　平和中島財団
財団法人　三菱銀行国際財団
財団法人　吉田茂国際基金

大阪日米協会
神戸日米協会
社団法人　日本歯科医師会
社団法人　日本自動車工業会

株式会社　イトーヨーカ堂
オムロン　株式会社
株式会社　オリエンタルランド
キッコーマン　株式会社
シダックス　株式会社
新日本製鐵　株式会社
住友不動産　株式会社
積水ハウス　株式会社
セコム　株式会社
大成建設　株式会社
株式会社　竹中工務店
堤清二
株式会社　電通
東京海上日動火災保険　株式会社
株式会社　東京三菱銀行
東京電力　株式会社
トヨタ自動車　株式会社

伊藤忠商事　株式会社
エクソンモービル　有限会社

日本アイ・ビー・エム　株式会社
野村證券　株式会社
ぴあ　株式会社
株式会社　日立製作所
富士ゼロックス　株式会社
富士通　株式会社
本田技研工業　株式会社
松下電器産業　株式会社
三井物産　株式会社
三井不動産　株式会社
三菱地所　株式会社
三菱重工業　株式会社
三菱商事　株式会社
三菱信託銀行　株式会社
宮沢喜一
明治安田生命保険　相互会社
メルシャン　株式会社

住友商事　株式会社
住友スリーエム　株式会社

協和発酵工業　株式会社
株式会社　公文教育研究会
株式会社　新生銀行
株式会社　リンクアンドモチベーション
WIP ジャパン　株式会社

鹿谷幸史
故田端利夫
富永宏
降旗健人
堀内宗忠

編集後記

この度、第56回日米会議の成果が凝縮された報告書が完成いたしました。この一冊に会議を全て表すのには限界があるのは否めません。しかし、会議参加者がこの夏に感じ取った会議の生の声を代弁するのがこの報告書です。報告書スタッフ一同、この夏に行われた活動をわかりやすく理解していただくために努力してまいりました。この報告書を手に取っていただいた方に少しでも、第56回会議の様子を感じ取っていただけたら幸いです。学生会議の以下、報告書スタッフによる感想文となっております。

本会議や事前・事後活動を含めて、さまざまなことがあった第56回日米学生会議。簡単には語り尽くせない体験でした。参加者の一人ひとりが感じた会議の内容を報告書という形で一つにまとめることで、より多くの人と私たちが得たことを共有できると信じています。(大地悠子)

これだけの多彩な個性を、一つの冊子にまとめる作業は、どうやっても収め切れない数のクレヨンを、無理やり箱に入れようとする難しさに似ていたかもしれない。でも、どの色も愛おしくて、懐かしい。79色、それぞれの色合いを確かめるように作業を進めた。この仕事に携わったことこそが、私にとって最大のJASC-ingだったのかもしれない。みんな協力ありがとう。そして編集スタッフのみんな、お疲れ様でした！(砥上明子)

会議中と違い皆とメールのやりとりでの編集作業はなにかもどかしいような気がしたが、編集を通し日米学生会議を振り返ることができたし、日米学生会議を通して自分たちが得たのもが形になっていくのがうれしかった。(広田愛)

報告書。それは、この夏に私たちが経験させていただいたことを「報告」することや、経験したことを風化させないことにのみ作成価値があるのではない。その執筆は、一種の追体験であり、自分たちが経験して「得たもの」を明確化してくれる。そこに経験を文字化することの重要性があるのではないだろうか。私は、本会議中、拙い英語により足を引っ張ってしまった。だからこそ、事後活動への思い入れが強かったのであるが、今回編集作業に携わることで改めて大きな「もの」を「得た」気がする。その機会を与えていただいたことに、感謝。(能見駿一郎)

報告書の編集に携わることで、本会議の体験を振り返るよい機会となった。参加者一人ひとりの思いがこめられた文章を集め、つなげていく作業は、時に難しかったが、本会議とは異なる形で関わることができ、大変貴重な経験となった。(久野愛)

皆から集めた文章を1冊の報告書として編集していく作業の中で、この夏がいかに濃い夏だったか、改めて感じました。本会議は終わっても「報告書までが自分たちの仕事」と責任持って取り組んでいた報告書メンバー、尊敬します。最後に、東京から1000km離れた場所からでも作業ができるよういろいろとサポートをしてくれたみんなに感謝します。ありがとう。(坪田裕美子)

最後になりましたが、報告書発行にあたりご協力いただいた原稿執筆者、報告書委員、実行委員など全ての関係者の方々、そして何より第56回会議開催にあたり、多くのご支援、ご指導をいただいた皆様に改めて深く御礼申し上げます。

第56回日米学生会議実行委員会
日本側報告書編集責任者　大宮貴史

第 56 回日米学生会議日本側実行委員

第 56 回日米学生会議日本側報告書
2004 年 11 月 27 日発行

編集
第 56 回日米学生会議日本側実行委員会：安藤彩・飯田智紀・大宮貴史・坂口紋野
佐藤智紀・ジェフハッチンズ・原奈央・福家雄大
参加者報告書編集委員：大地悠子・坪田裕美子・砥上明子・能見駿一郎・久野愛・広田愛

編集責任者
大宮貴史　佐藤智紀

発行
（財）国際教育振興会内　日米学生会議事務局
〒160-0004　東京都新宿区四谷 1－21　Tel/Fax 03-3359-0563

印刷
株式会社　千修

Japan-America Student Conference

Since 1934

US JAPAN 150 YEARS

■主　　催　　財団法人 国際教育振興会

■企画運営　　第56回日米学生会議実行委員会